

令和6年第16回教育委員会定例会
(8月20日開会)

台東区教育委員会

○日 時 令和6年8月20日（火）午前10時00分から午後6時10分

○場 所 台東区役所 10階 1001会議室

○出席者

教 育 長	佐藤 徳久
教育長職務代理者	垣内恵美子
委 員	浦井 祥子
委 員	神田しげみ
委 員	高森 大乘

○出席者

事務局次長	前田 幹生
庶務課長	山田 安宏
学務課長	川田 崇彰
児童保育課長	大塚美奈子
放課後対策担当課長	別府 芳隆
指導課長	宮脇 隆
教育改革担当課長 兼教育支援館長	増嶋 広曜
生涯学習推進担当部長	三瓶 共洋
生涯学習課長	吉江 司
スポーツ振興課長	村松 克尚
中央図書館長	穴澤 清美

○日 程

日程第1 教育長報告

1 協議事項

(1) 指導課

ア 令和7年度使用 台東区立中学校教科用図書採択について

イ 令和7年度使用 台東区立特別支援学級教科用図書採択について

追加日程第1 議案審議

第23号議案 令和7年度使用 台東区立中学校教科用図書採択について

第24号議案 令和7年度使用 台東区立特別支援学級教科用図書採択について

午前10時00分 開会

○佐藤教育長 ただいまから、令和6年第16回台東区教育委員会定例会を開会いたします。

本日の会議録署名委員は、垣内委員にお願いいたします。

ここで傍聴について申し上げます。本日、会議の傍聴を希望する方については許可することとしておりますので、ご了承ください。

また、今定例会においては、東京都台東区教育委員会傍聴規則第4条ただし書の規定に基づき、傍聴人が20名を超える場合であってもこれを許可いたしたいと思っております。

また、本日の会議について写真撮影を行いたい旨の申請がありました。つきましては、東京都台東区教育委員会傍聴規則第7条第1項ただし書の規定により許可いたしたいと思っております。

(傍聴人入室)

(写真撮影)

〈日程第1 教育長報告〉

協議事項

(1) 指導課 アイ

○佐藤教育長 それでは、日程第1、教育長報告の協議事項を議題といたします。

指導課ア及びイの審議方法につきましては、8月5日の定例会においてご決定いただいておりますが、審議する教科の順番、発行者の推薦方法及び発言の順番について、改めて私から説明を申し上げます。

まずはじめに、中学校教科用図書採択について審議いたします。審議する教科の順番につきましては、学習指導要領の評価の順番で、1種目ごとに審議、仮決定をまいります。

各委員には、推薦する教科用図書の発行者について理由を付して挙げていただきます。挙げていただく発行者については、1者しかない場合は1者、複数ある場合は3者までとし、優先順位をつけていただくようお願いいたします。

次に、発言の順番でございしますが、私が指名する委員から時計回りにお願いいたします。

この進め方でよろしいでしょうか。

(異議なし)

○佐藤教育長 それでは、そのように進めさせていただきます。

次に、仮決定についてですが、委員全員からご意見をいただいた後、委員会として採択する1者を仮決定まいります。中学校教科用図書につきましては、過半数である3人以上の方が第1位に推薦した発行者については、協議をした上で仮決定とさせていただきます。ただし、過半数に満たない場合は、改めて協議をした上で仮決定まいります。

この進め方でよろしいでしょうか。

(異議なし)

○佐藤教育長 それでは、そのように進めさせていただきます。

次に、特別支援学級教科用図書採択について審議いたします。採択につきましては、年度ごとの子供たちの障害の状況などを考慮して審議及び仮決定してまいります。

この進め方でよろしいでしょうか。

(異議なし)

○佐藤教育長 それでは、そのように進めさせていただきます。

それでは、まず、中学校教科用図書についてご審議願います。

国語

○佐藤教育長 まず、国語についてご審議願います。発行者は4者となっております。

それでは、各委員から、採択すべき発行者について順位をつけてご発言を願います。

まず、高森委員から、時計回りの順にお願いいたします。

○高森委員 私は、今回の中学校教科用図書の採択に当たっては、主として東京都教育委員会並びに台東区教育委員会の調査研究委員会の分析結果報告を参照しつつ、これに個人的な分析・評価の視点を加味して、各教科書会社の教科用図書を比較・検討いたしました。

具体的に申し上げますと、1点目の視点は、教科の概論に相当する部分について、当該教科を学ぶ意義が明確に示されているかどうか。書写や地図の場合に限っては、教材の活用法が具体的に示されているかどうかといった視点です。

2点目の視点は、各教科に共通する項目について比較するもので、目次、索引、付録、注記などの利便性はどうか。学習の方法論やアプローチ法は的確に提示されているか、設問、導入、振り返り、まとめ等の内容は妥当か。発展学習や持ち帰り学習の効果は期待できるか否かといったような視点です。

3点目の視点は、各教科の固有の学習領域、学習内容に関して、適切な教材、並びにデジタルコンテンツが効果的に活用されているか否かといった視点です。

こうした観点に基づき、各社の教科用図書を多角的に比較・検討しまして、本委員会では、各教科についての評価の視点と選考の結果、並びにその理由について述べてまいります。

科目名「国語科」・種目「国語」については、教科書の導入部分において、国語を学ぶ意義や目的が、学習の見通しや学習法とともに整合性をもって説明されているか、国語科の学習を通して育てたい力・知識・技能が具体性を持って示されているか、拡張教材・補助教材的な位置づけとなる資料編は充実しているか。新出漢字や口語文法の解説には重きが置かれているか、古典文献としての漢文・古文の扱いは適切か、国語の教科書に特徴的ともいえるフットノートの活用に工夫が見られるか、デジタル教材は有効に活用されているかといった視点で比較・検討し、私は、1位に光村図書、2位に三省堂を選びました。

推薦の理由ですが、教科書冒頭のガイダンスにおいて、光村図書は各学年での学習の見

通しを立てて、各教材の位置づけを明確に示しております。また、9ページの折り込みに「思考の地図」を用意し、思考を広げ、整理し深めるための思考法の具体例が示されています。一方の三省堂は、目次に続いて、国語科の学習を通して育てたい力、知識、技能について、領域別教材一覧を組んで分かりやすく分類しています。さらに、教科書本編と資料編の使い方が4ページを費やして設けられている点も、光村図書より充実しています。また、三省堂の巻末の折り込みには、光村図書の「思考の地図」と同様の思考法の具体例が「読み方を学ぼう」としてまとめられています。

国語科の学習を通して育てたい力、知識、技能に関しては、光村図書は全学年を通して、本編の要所要所、さらに巻末の「資料編」の中で、メモの取り方、話し合いの仕方、辞書の活用法、原稿用紙の使い方、手紙や通信文の書き方、読書感想文の書き方といった基礎・基本をはじめ、発想の広げ方、豊かな表現方法など、様々なスキル学習を用意し、充実しています。一方の三省堂も、本編の諸所、並びに巻末資料編において、全学年ほぼ共通の内容で同様のスキル学習がまとめられております。加えて三省堂には「学習用語辞典」が用意され、教科書に登場した国語・国文学に関する専門用語が辞書形式にまとめられているのもよい点です。学習用語に関して言えば、光村図書は巻末に作品のみが用意され、辞書的な、辞典的な機能は有していません。

文法事項の学習について確認しますと、口語文については2者ともに本編の要所要所に解説が用意されているのに加えて、各学年の後半に、光村図書では「学びを深める」、三省堂では「文法のまとめ」として、文法事項が集約されています。

敬語の学習は光村図書では、第1学年の資料編287ページ、第2学年の本編113ページに設けられ、三省堂では第2学年の本編102・103ページに設けられておりますが、三省堂のほうがよく整理されているとは感じました。

古文法については、光村図書では、第1学年169ページに歴史的仮名遣い、第2学年156ページに係り結び、第3学年155ページには和歌の表現技法が紹介され、さらに第3学年巻末の資料編302・303ページの見開きでは、文語文法のうち、用言の活用法が用意されています。一方、三省堂は、第1学年132ページに歴史的仮名遣いの解説が、第3学年124ページに和歌の表現方法がそれぞれ用意されておりますが、品詞の学習はありません。古典文法の学習に関しては光村図書のほうがやや充実しているように見受けられます。

一方、漢文法に関しては、三省堂が充実しています。光村図書では1年の174ページに訓読法と訓点のルールなどが紹介される程度ですが、三省堂では、各学年ともに「漢文の読み方」のページを設けて、1年の138・139ページでは訓読法と訓点法、2年生の140・141ページでは漢詩の形式、3年の145ページは訓読法を学習します。

フットノートの活用については、光村図書は新出漢字、語句の解説、補足説明、図版、人物紹介など、実に充実しております。一方、三省堂のフットノートは、新出漢字や語句説明程度にとどめ、その分、デジタル教材を充実させており、コンテンツも写真・動画・音声などを中心にそろえ、授業を補完する機能を担保しているようです。

最後に、具体的な教材をもとに両者を比較したいと思います。対象とした、テキストは光村図書2年、及び三省堂2年の「走れメロス」です。光村図書では220ページの「学びへの扉」で提示される課題がいずれも抽象的であるために、様々な意見が交わされることが想定されます。一方、三省堂は224・225ページの「学びの道しるべ」が用意されていますが、こちらは光村図書とは対照的で、実に具体的な課題が提示され、こちらは誘導的な活動になりがちな予感がし、活発な意見交換は期待できません。このように考えると、光村図書のほうが、主体的・対話的、深い学びにつながる授業を組み立てやすい工夫になっていると感じました。

そのほか特筆すべき点は、光村図書で使用している紙の地色です。ややクリームがかった紙面が、人によっては眩しく感じる白色の紙面と異なり、目に優しい印象を受けました。長文を読んでも目に負担がかからない工夫がなされていると感じます。

以上の比較・検討を踏まえ、私は、1位に光村図書、2位に三省堂を選びました。

○佐藤教育長 神田委員、お願いします。

○神田委員 国語科は言語教育という特色をもつ教科です。また、他教科への影響も大きな教科であるとも言えます。これからは、課題を発見し、解決するために使える言葉の力が必要だと考えます。そのような視点から考えますと、①指導事項を着実に身に付け、実生活に生かすことができるか②言葉の学びがあること、語彙指導の充実が図れる内容か③読み物教材の内容が深い学びを生み出すものか、読書指導につながるものか④小学校との連携が図られているかなどの視点から拝見させていただきました。

光村図書は「問いをもつ」ことに焦点を当てています。全領域で「学びの扉」として、右に学習の流れ、左に身に付けるべき資質・能力が示されています。言葉を手がかりに論理的な思考ができるように導かれています。領域を超えた学びのつながりを明確にして、実生活に役立つ力の育成を意識しています。学習の流れが横書きなのは気になりますが、ページ構成上、やむを得ないことかと思えます。

また、語彙力の育成においても、「語彙ブック」を作成し、思考や感情を的確に言語化する工夫がなされています。各領域の手引きに「言葉のポケット」があり、話型や文型、言葉などが示されています。使える言葉を意識した取組と言えます。

教材についてです。特に読み物教材は生徒にとっては国語を学ぶ上で大切な作品との出会いの場であると考えます。長年親しまれているものは残し、時代に応じた作品を掲載するなど工夫が見られます。

その他、「書くことのミニレッスン」や巻末の「ICT活用のヒント」、QRコードの充実も見られます。

一方、東京書籍も言葉の力が着実につくように学習のポイントが明確に示されています。新しいところでは、「未来の扉」です。「情報社会」「多様性」「地球環境」など9つの現代的なテーマから考えを深めるようになっており、評価されます。掲載されている教材も魅力的なものが多いです。

私は1位に光村図書、2位に東京書籍を推したいと思います。

○佐藤教育長 浦井委員、お願いします。

○浦井委員 浦井です。よろしくお願ひいたします。私も、まず最初に今回の教科書採択にあたっての、全教科を通しての自身の基本的なスタンスをお話させていただいてから、国語の教科書について触れていきたいと思っております。お願ひいたします。

今回、この教科書採択にあたって私が重視いたしましたのは、「教わる生徒たちにとってわかりやすく、かつ教える側も教えやすいこと」です。そのうえで、「生徒にとって負担にならないもの」であること。これは、物理的な教科書自体の重さや形状はもちろん、その内容が負担にならない適度なものであることです。さらに、「生徒たちが興味を持って学べるよう工夫されていること」また、教科によっては「生徒が教員の解説なしに自分で教科書を読んでも、しっかり内容を理解ができること」などを加えて考えました。

ここまでは、小学校の教科書の採択にあたってのスタンスと、基本的に変わりはありません。ただそのうえで、今回中学生という思春期の難しい時期の生徒たちが使う教科書であることを考慮すべきと考えました。

最近、思春期の時期も早まっており、多くの生徒たちにとって、小学校高学年から中学校の時期は、思春期の複雑さがもっとも強まる時期なのではないかと思ひます。小学校から中学への進学というのは、生徒たちにとって大きなステップアップであり、環境も大きく変わります。そんな微妙な時期を、思春期真ただ中の生徒たちが迎えるわけですから、生活面はもちろん、学業面においても、小学校から中学校へのスムーズな接続を促すことは、必要不可欠だと思ひます。

中学校の13歳から15歳という時期は、心も体も著しく成長しますが、かといって完全に大人になっているわけではないという、大変微妙な時期だと思ひます。自分と他人との違いに悩み、自意識と客観的な事実との差で葛藤する時期でもあります。保護者や教員といった大人への信頼感を持ちにくくなり、友達への依存度が上がる時期でもありますから、そのような中で大人に「教わる」という行為自体に嫌悪感を抱く生徒もいるでしょう。そうした中で用いられる教科書ですから、できる限り生徒たちと、実際に現場で使用する教員とに寄り添った選び方をしたいと考えました。これが、今回の教科書採択にあたっての、私の基本的なスタンスです。

さて、そのうえで、国語についてお話しさせていただきます。

さきほども述べましたが、中学生の3年間は、思春期真ただ中です。ただでさえ精神的に複雑で繊細な状態にありますから、小学生の時以上に、自分の思いや考えを正しく言葉にして相手に伝えるための「言語化する力」、相手の言いたいことを正確に読み取るための「読み取る力」、それを総合した「国語力」というものが必要となってきます。言葉の力は大きく大切です。決して疎かにはできません。

また、国語力は、生活面はもちろん、国語以外のあらゆる科目に関連して、必要となってくる力です。数学でも科学でも、近年力を入れるようになった英語でも、基礎となる

母語の言語力が備わっていなければ、問題文を読み取ることも、考えを発展させて考察したり、最終的にまとめることもできません。どれだけグローバル化し、英語が重要視される社会となっても、日本という国の母語である日本語を扱う国語と言う教科は、疎かにされてはならないと考えます。

さて、そのうえで、今回候補となった4者は、どれもそれぞれ工夫をされておりました。大変悩みましたが、私は、第1位を東京書籍、第2位を光村図書とさせていただきました。理由を述べさせていただきます。

第1位とした東京書籍は、今回候補となった出版者の中で、もっとも文法的なものが充実していると感じました。短い言葉で、主語も抜いて話しがちな中学生にとって、煩わしくはあれ、正しい文法を学ぶことは大切だと考えます。もちろん、文法にこだわりすぎて、文章を読む楽しさや、文章で表現する意欲が失われては本末転倒ですが、読むにも書くにも話すにも、正しい文法を知ることが重要だと考えました。

また東京書籍は、全領域に「てびき」として学習の手順を示していますが、この部分で特に、言葉の重要さというものに注目しており、言葉による見方や考え方を働かせられるよう促す工夫がされていました。言葉の大切さが、使用する生徒たちにもしっかりと伝わると思われる構成で、とても良いと感じました。加えて東京書籍は、QRコンテンツにも力が入れられており、総じて使いやすいのではないかと考えた次第です。

実のところ、これまで東京書籍の教科書は、教科書自体の重量が重く、個人的には生徒が持ち歩いたり使用したりするのに負担となるのではないかと躊躇する部分がありました。しかし今回からは、内容は基本的に維持しつつ、教科書自体の重さを軽くして、他者の教科書とほとんど同じ重さとなり、その懸念もなくなったということで、その点も評価した結果となっております。

第2位とした光村図書ですが、1位2位は正直僅差で、悩むところではありました。光村図書の「語彙ブック」をつけて語彙力を高める工夫などは、とても良いと思いました。また、他の委員もご指摘になっておられましたが、使用されている紙がクリーム色で目にやさしく、古文のフォントを筆字風にして古い時代のイメージを高めるなどの点も、工夫されていると感じ、第2位といたしました。

なお、順位には含めませんでした。三省堂の「語彙を豊かに」などの語彙力をみがく工夫や、全体を通して辞書と結びつけることのできる工夫は、大変魅力的なものと感じました。文法についても詳しく取り上げられておりましたが、その分逆に、やや難しい印象を受けるように思い、今回順位には入れておりません。

台東区では、言葉を手掛かりに論理的思考力を高め、語彙力を高めることを重視しているとのことで、この点を補うには東京書籍、光村図書ともに適切であると考えました。そのうえで、全体的な使いやすさと文法的なコンテンツの充実などの観点から、第1位を東京書籍、第2位を光村図書とさせていただきました。

○佐藤教育長 垣内委員、お願いします。

○垣内委員 今回の教科書採択に当たりましては、他の委員と同様、私も台東区の調査研究委員会の報告書、そして東京都の調査報告、さらに学習指導要領も参照しながら、本区の課題も踏まえて、実際のテキストを比較・検討させていただきました。

学習指導要領に規定されている、生きる力につながる、あるいは主体的で対話的で深い学びにつながるということ。さらにはカリキュラムマネジメントとして、教員の方が使いやすい、これは様々なバックグラウンド、それから能力・資質を持った先生方がいらっしゃるわけですが、どの先生方にとっても使いやすく授業がしやすいという点と、合わせて、他の委員もおっしゃいましたけれども、使う生徒さんにとって分かりやすいこと。特に本区の学力の現状、その他も勘案して、検討しました。

国語に関しましては、まずは学習指導要領の中で規定されている、言語活動を通して国語で正確に理解する。これが全ての学力の基礎になると私も思っておりまして、適切に言語で表現する、そういった能力をきちんと育成することにつながるかどうかということを中心としました。社会生活に必要な国語の特性を理解し、適切に使うということだけでなく、人々との間で伝え合う、また、思考能力、想像力を養うことにつながるということそして、国語が持つその力を十分に理解し、言語感覚を豊かにして、それが将来の言語活動の、そしてまた日本の言語文化にもつながっていくという、大きな重要な要素があるということ認識した上で、本区の課題としては、論理的に思考するような内容になっているのかどうか。そしてその思考力を支える語彙力、これが養われるか。この2点を特に注目して比較・検討いたしました。

結果といたしまして、1位は光村図書、2位、東京書籍とさせていただきます。

いずれの教科書も学習の見通しを大切にしながら、その手順が示されて主体的な学びにつながるという様々な工夫がされていて、内容面でも、教材その他も充実しておりますし、ユニバーサルデザインフォントなど、見やすい工夫がされていて素晴らしいというふうに考えましたが、第1位の光村図書に関しましては、他の委員もおっしゃいましたけれども、全領域で「学びへの扉」として、学習の手順を非常に丁寧にご紹介されて、学習の見通しが持てるということ。それから、「学びのカギ」として、各教材で身に付ける資質・能力を焦点化して、図解し、見える化していると、そういったようなところも評価いたしました。

語彙力に関しては、「語彙ブック」も非常に素晴らしい工夫ではないかというふうに思いました。

こういったことによって、基礎・基本の定着が図られる。こういう丁寧で細やかな工夫を評価いたしました。

また、推薦図書も多く、子供たちにとって様々なメニューを提供しているというところを、一番高く評価いたしました。

第2位の東京書籍もよくできていて、各領域で手引きがありまして、また、全領域で、

「見通す」として、学習目標と問いかけを示し、「振り返る」というところで、その目標に照らした振り返りの観点も示しているというところも、非常に工夫されていると思いました。

また、「言葉の力」というものも明示しています。

東京書籍、光村図書、どちらも素晴らしい教科書と思いましたが、より丁寧で細やかな工夫という点で、光村図書が1位になっております。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

それでは私のほうから、国語についてでございますが、今回の中学校の教科用図書の推薦に当たりましては、他の委員と同様に、都の使用教科書調査研究資料や区の調査委員会からの教科用図書の調査研究の結果についての報告、また改めて学習指導要領などを参照しながら、各社を比較・検討したところでございます。

国語科については、中学校の学習指導要領によれば、言葉による見方、考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し、適切に表現する資質・能力を育成することを目指すことが大切であると認識しております。

学習の基盤となる資質・能力の一つとして、言語能力が挙げられ、その育成のためには、全ての教科等において、それぞれの特質に応じた言語活動の充実を図ることが必要であります。特に言葉を直接の学習対象とする国語国科の果たす役割は大きいとされております。

しかしながら、各種調査の結果によると、伝えたい内容や自分の考えについて、根拠を明確にして書いたり話したりすることや、複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすること、文章を読んで明確な根拠や論理の展開・表現の仕方などについて評価することなどに課題があることが明らかになっております。

つまり言葉、言語を手がかりとしながら、論理的に思考する力の育成が課題であると思えます。論理的に思考するためには、その際に用いる概念や方法、用語を理解し、それを活用する必要があると考えております。

そこで私は、各単元に身につけた内容や用語がどのように示されているかという点に着目して、4者それぞれの教科書を比較・検討させていただきました。

どの教科書も各単元における学習ポイントや使用する用語などが工夫されて示されており、授業だけではなく、家庭学習においても進んで利用しやすいものとなっております。

光村図書は、語り手の視点に着目するといった学習のポイントを、他の委員も示しておりますが、「学びのカギ」として各単元に示しております。このページには、そのポイントを踏まえて学習するとどのようなよさがあるのか、その際にどのような用語を使うのか、注意すべきことは何かといったことが詳細に解説されております。また単元の学習課程とセットで示されていることで、何を学ぶのかと、どのように学ぶのか等を関連づけながら、学習を進めることができます。さらに巻末には、各領域の学習課程に沿って「学びのカギ」の一覧が掲載されており、1年間で学習したことを俯瞰して捉えることができるよう

となっております。

また東京書籍は、教科書の冒頭において、「領域別教材一覧」というコーナーを設け、それぞれの教材における学習過程の重点や、身につけたい言葉の力が示されております。また、情報の分類・比較など、情報の関係を捉えたり、情報を整理したりすることに関しては、どうしたら様々な情報をうまく整理できるだろうかという問いのもと、様々な方法やポイントが掲載されており、生徒の思考に沿った示され方になっていると感じました。

以上のことから、私は、1位、光村図書、2位、東京書籍を推薦させていただきます。

ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について事務局に報告をさせます。

○事務局 それでは、ただいまの集計結果について申し上げます。

1位に光村図書を推薦された方が4名、東京書籍を推薦された方が1名。第2位に光村図書を推薦された方が1名、三省堂を推薦された方が1名、東京書籍を推薦された方が3名。

以上でございます。

○佐藤教育長 ただいまの集計結果のとおり、1位に光村図書を挙げた方の数が4名と最も多く、過半数を超えております。このことにより、国語については光村図書に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見等はございますでしょうか。

よろしいですか。

(なし)

○佐藤教育長 それでは、国語については光村図書に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

○佐藤教育長 ご異議ございませんので、国語については光村図書に仮決定いたしました。

書写

○佐藤教育長 続いて、書写についてご審議願います。発行者は4者となっております。

それでは、各委員から、採択すべき発行者について順位をつけてご発言を願います。

神田委員から、時計回りの順にお願いいたします。

○神田委員 書写指導については「文字を正しく整えて速く書くことができるようにするとともに、書写の能力を学習に生活に役立てる態度を育てることに配慮すること」と学習指導要領に書かれています。また、毛筆は硬筆の能力の基礎を養うよう指導することとなっております。このような視点で教科書を検討させていただきました。

光村図書では、学習の進め方が「考えよう」⇒「確かめよう」⇒「生かそう」となっており、全てのページで統一されています。観察や比較で課題を発見し、実際に書いてみる。確かめたことを硬筆につなげるといった流れです。お手本は半紙原寸大で提示され、文字も美しいです。別冊の「書写ブック」は硬筆練習帳となっており、硬筆課題を豊富に掲載しております。国語教科書との連動した教材が設定されて、使いやすくなっています。

また、全ての毛筆のお手本にQRコードが付いており、筆の動きや方向、力の入れ方なども確認することができます。数も469点と他者に比べて多いです。

教育出版社は、右ページにお手本、左ページに「目標」「考えよう」「生かそう」「振り返ろう」となっており、学びのポイントを確認できるようになっています。特に、硬筆に繋げる点では、「試し書き」と「まとめ書きと応用」があり、授業の終わりに振り返り、書く力を確実に付ける工夫がなされているところは評価できます。

総合的に考えて、その結果、私は1位を光村図書、2位に教育出版社を推したいと思います。

○佐藤教育長 浦井委員、お願いします。

○浦井委員 よろしく願いいたします。

書写は、日本の伝統的な技能のひとつであると同時に、正しくきれいな字を書くことを学ぶという意味で、大切な教科であると考えます。中学生は、学ぶが増える中で、素早くノートを取り、答えを書くことに気を取られ、字が荒れていきがちです。さらに、国語の授業の中で、一文字ずつ書き順から丁寧に教えてもらい、漢字ドリルや漢字ノートなどで教員にチェックしてもらえた小学生の頃と異なり、中学では出てきた漢字を自分で学び、身に付けていかなくてはいけないことがほとんどだと思います。そのような中で、どうしても時間をとって字と向き合い、丁寧に字を書く機会が減ってしまうのは、想像に難くありません。

改めて正しく丁寧な字に向き合うことは、小学生のころ以上に大切になっているのではないかと思います。ただ、その一方で、小学校の授業でしか筆を持ったことがない生徒も多いでしょうし、場合によっては、筆を持つこと自体になじみのなかった生徒がいる可能性もあります。

そこで、書写の教科書を選ぶにあたっては、筆の持ち方や筆運び、書く時の姿勢、お手本などが、写真や動画、原寸大のお手本などで、できる限り具体的に、丁寧に分かりやすく提示されていること。使う側にとってはもちろん、教える側にとっても分かりやすいものとなっていることを重視しました。

そのうえで私は、第1位を光村図書、第2位を教育出版とさせていただきました。まず、光村図書につきましては、神田委員からもご指摘があった通り、半紙サイズの原寸大のお手本が掲示されている点が、大変良いと感じました。これにつきましては、教育出版にも1点、半紙サイズの原寸大のお手本が参照できるようにしてなっておりました。このように、原寸大のお手本があると、特に書写に慣れない生徒たちにとっては、大変使いやすいものになるのではないかと考えます。

さらに光村図書は、別冊で「書写ブック」として硬筆練習帳がついている点が、大変素晴らしいと感じました。ペンや鉛筆で書く文字と、筆で書く文字とは、どうしても別々のものと捉えられがちですが、実際には私たちが現在使っている漢字・平仮名・カタカナのすべては、かつてすべて筆で書かれていたものです。さらに常用漢字は、現在「くずし

字」と呼ばれるような、漢字を筆字で書いた時のくずし方の中から選ばれたものです。そう考えてみても、私たちの普段使う文字と筆で書く文字は、別々のものではなく、美しい字を書くためには、その繋がりを学ぶことは必要不可欠です。そのためにも、日頃なじみのない生徒にとっても、写真や動画、原寸大のお手本などで、具体的にやり方を見て取ることで光村図書は、とても使いやすいと考えました。

教育出版や東京書籍も、書道をする時の姿勢や筆の持ち方などの写真が載せられていました。特に教育出版は、光村図書同様、使いやすく分かりやすい教科書となっていたと思います。最終的には、光村図書の教科書の方が、デジタルコンテンツが多く、QRコードが使いやすいこと。小学校からの接続スムーズにできるよう、より考えて構成されていることなどを考えあわせ、総合的に判断した結果、光村図書を第1位、教育出版を第2位とさせていただきます。

○佐藤教育長 垣内委員、お願いします。

○垣内委員 書写に当たりましては、学習活動だけでなく日常生活に生かすことができる書写の理解を育成すること、特に伝統的な文字文化の継承も大切です。先ほど浦井委員もおっしゃいましたけれども、書道というのは日本の無形文化財であります。

書写は、こういったことを系統的に選ぶということが出来る、貴重な授業でもあるというふうに理解しております。この文字文化の継承だけでなく、社会に役立つ様々な文字文化に関する知識・機能について具体的に理解し、そして実践する。文字を効果的に書くことができる力を育成するということが重要な目的であるというふうに考えております。この観点で、このテキストを比較・検討させていただきました。

いずれのテキストも、学習目的を明示して、その内容の構成も、学習の流れを非常に強く意識し、振り返りを設け、そして知識・技能の定着につながるような工夫がなされているというふうに理解いたしました。

ただ、年間での授業時間もそんなに多くない中で、上記の事柄を確実に身に付け、そして実践するという観点から、私は、光村図書を第1位、第2位は教育出版とさせていただきます。

光村図書に関しましては、ほかの委員もおっしゃいましたけれども、小学校からのスムーズつなぎができているということだけでなく、原寸大のお手本もあります。そして、デジタルコンテンツに関しても圧倒的に多く、短い時間の中で、必要に応じて学習する内容を柔軟に選択して教える、あるいは学ぶことができるであろうというふうに理解いたしました。

第2位の教育出版に関しましても非常によくできていると思いました。巻頭に学習のすすめ方を提示し、また、生徒の事例とか、活動写真などを示すことで、主体的な学習に導くという姿勢も強く見られているところです。

文字の書き方、姿勢や筆遣いといったようなところも非常に工夫されていると感じましたけれども、総合的に見て、光村図書のほうが、よりきめ細やかな学習ができるのではな

いかというふうに理解いたしまして、1位、光村、2位、教育出版とさせていただきます。

○佐藤教育長 私から、書写について述べさせていただきます。

書写につきましては、中学校学習指導要領によれば、目的や必要に応じて、楷書や、または行書を選んで書くことや、身の回りの多様な表現を通して文字文化の豊かさに触れ、効果的に文字を書くことなどが大切であると認識しております。

書写の能力を学習や生活に役立てる態度を育てるよう配慮することとも示されているように、書写の学習を通して身につけた力を、各教科等の学習活動や日常生活に生徒自身が活かしていくことが求められております。字形の整え方、運筆の際の筆圧のかけ方、筆脈を意識した点画のつながりなどを身につけるのが必要であることは言うまでもありませんが、生徒自らが楷書や行書の特徴に気づき、どのようにすれば、これらの特徴を生かした書き方ができるのかを考え、身近な文字を書く活動に積極的に役立てるような主体的な学習がなされるようにすることが、より重要であると考えております。

そこで私は、生徒が問題意識を持って学習に取り組んだり、学習の成果を確かめながら次の課題を見いだしたりすることを促す工夫がなされているかという点に着目して、4者それぞれの教科書を比較・検討させていただきました。

どの教科書も、生徒が主体的に学習に取り組むことができるよう、教材の構成や学習の流れなどが工夫されており、特に光村図書は、各単元において、課題について「考えよう」、書き方を確かめて毛筆で書く「確かめよう」。学習をしたことを生かして書く「生かそう」という学習過程となっており、

その中でも、特に「考えよう」の段階では、生徒が課題意識を持つことができるよう、読みやすくするために直すところを探して書き込んだり、楷書と行書を比較して違いを見つけたりする活動が設定されており、また、1人1台端末を活用し、自分が書いている姿を友達に撮影してもらって筆遣いや姿勢を確かめたり、書いた文字を自分で撮影し、自分の課題を見つけたりする活用例が掲載されており、生徒が自ら次の課題を見出すことにつながると感じました。

加えて、巻頭には取り外して使用できる別冊の「書写ブック」が唯一付属しております。教科書では文字の整え方の原理・原則を学び、「書写ブック」では、毛筆での学びを硬筆に生かすという繰り返しの学習により、書写の力がより一層確かになることが期待できます。

また教育出版は、各単元において学習の目標を確かめる「目標」、試し書きと教科書の文字とを比べ、自分の課題を「見つけよう・考えよう」、毛筆で学習したことを生かして硬筆で他の文字を書く「生かそう」、課題が解決できたかどうかを自己評価し学習を振り返る「振り返ろう」という学習過程となっております。

試し書きをして自分の課題を見つけるという学習活動が設定されていることで、生徒が自分の学習状況を把握し、次の課題を見出すことにつながると感じました。

以上のことから、私は、1位、光村図書、2位、教育出版を推薦させていただきます。

私からは以上です。

次に、高森委員、お願いいたします。

○高森委員 科目「国語科」・種目「書写」については、書を学ぶ意義や態度、学習の進め方などの説明、書道における筆画や筆法の基本的解説、毛筆から硬筆への接続、書写の学びを活用する発展学習、デジタル教材の充実度・完成度などの視点で比較・検討し、私は東京書籍のみを選びました。

まず書を学ぶ意義、書に向かう姿勢や対応について、今回選考に挙げた4者のうち、東京書籍、並びに教育出版では、表2と1ページの見開きに文字の表現効果や伝達効果が有する役割を提供して、書写学習の意義を婉曲的に伝え、学習者の内的動機を引き出す工夫が図られています。

書写学習の進め方については、4者いずれも各単元冒頭に目標が設定され、東京書籍では「見つける」「確かめる」「生かすの」活動が、光村図書では「考える」「確かめる」「生かす」の活動が、三省堂では「考える」「確かめる」「振り返る」の活動が、教育出版では「考える」「生かす」「振り返る」の活動が、それぞれ用意されています。これらとは別に、教育出版には各学年の内扉に、当該学年での学習目標が示されているという特徴があります。また、東京書籍では、各学年の最後に「書写テストに挑戦！」が、三省堂には、第2学年の最後に「学力テスト問題」が用意され、書写の教科においてテスト問題を設けられていることが新鮮でした。

書写の学習を日々の暮らしに活かすコンテンツについては、東京書籍は第1学年に3回、第2学年に2回、第3学年に1回、「生活に広げよう」の枠を設けて学習する機会を提供するのに加え、巻末の「書写活用ブック」において、手紙・原稿用紙などの書式を学べる工夫が取られています。他者においてもほぼ同様のコンテンツが用意されていますが、一部にコラム的な扱いとして配置されるなど、まとまった学習としては展開しないという点が指摘されます。

筆画や筆法の基本的解説で、東京書籍を特に評価したいのは、字形の学習が充実している点です。第1学年12ページには漢字の字形と配列、18ページは仮名の書き方・字形が解説されていますが、青色の実線や破線などのガイドラインを用いて、文字の外形、運筆の方向、点画の間隔やつながり、部首の組み立て、筆順の決まりを意識して書かせる工夫が取られていることです。これは他者にはない、特筆すべき長所と言えます。

デジタル教材の活用については、4者とも概ね充実しています。書道における筆画・筆法・書体の指導については、教員の技量が問われるところではありますが、デジタル教材を活用することで、一律の学びを学習者に提供することができ、書道になじみの少ない若手教員の精神的負担を軽減することが期待されます。

最後に、他教科との関連について、東京書籍では22・43・60・69ページなどに国語科へのリンクが、34ページ・活用ブックの9ページには国語科・社会科へのリンクが、同10ページには国語・社会・理科・技術へのリンクがそれぞれ張られているなど、科目横断的学

習を実現しています。これも他者にない特色です。

以上、検討を踏まえ、私は東京書籍を推薦いたします。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について事務局より報告をさせます。

○事務局 それでは、ただいまの集計結果について申し上げます。

第1位に光村図書を推薦された方が4名、東京書籍を推薦された方が1名。第2位に教育出版を推薦された方が4名。

以上でございます。

○佐藤教育長 ただいまの集計結果のとおり、1位に光村図書を挙げた方が4名と最も多く、過半数を超えております。このことにより、書写については光村図書に仮決定させていただきたいと思っておりますが、このことについて附帯意見等はございますでしょうか。

よろしいですか。

(なし)

○佐藤教育長 それでは、書写については光村図書に仮決定させていただきたいと思っておりますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

○佐藤教育長 ご異議ございませんので、書写については光村図書に仮決定いたしました。

社会（地理的分野）

○佐藤教育長 続いて、社会（地理的分野）についてご審議願います。発行者は4者となっております。

それでは、各委員から、採択すべき発行者について順位をつけてご発言願います。

浦井委員から、時計回りの順にお願いします。

○浦井委員 よろしくをお願いします。

地理につきましては、私は第1位を帝国書院、第2位を東京書籍とさせていただきます。

地理と言う教科は、非常に多くのものに関わってくる教科だと思います。地理的な見方・考え方を養い、グローバル的な物の見方を養うとともに、地域の特色や課題を見出し、その解決の方向性を見出すことが求められています。実際に中学で学ぶ地理の内容を見てみると、その内容は、地形や気候・植生など、自然的要素から考える「自然地理学」の側面と、歴史や文化・経済などの文化的要素から考える「人文地理学」の側面に分けられると思います。これらはすべて、大学で学ぶとすれば、専門的に別の領域の内容となりますし、さらに専門的に学ぶとなれば、地理的要素から歴史を見る「歴史地理学」や、特定の地域の性格についてその特徴を掘り下げて探求する「地誌学」など、細かい分野にも分けられることさえあります。中学における「地理」とは、そのすべてを包括した、大変幅広い

い教科だということができるよう。

したがって、地理の教科書においては、掲示されている表や地図などの見やすさと共に、日本国内であれ、世界と日本であれ、異なる地域の比較がしやすい構成であるかを重視しました。

候補に挙げたどの出版社も、それぞれに見やすさや使いやすさをしていると感じましたが、総合的に見て、なかでも帝国書院・東京書籍の2者が使いやすいのではないかと考え、順位に挙げました。

さらに、帝国書院・東京書籍は、どちらも地方ごとに同じレイアウトをするなど、比較のしやすさを考慮した構成になっていると感じましたが、特に帝国書院は、中国地方・四国地方など、地域ごとの冒頭に、1ページを使ってその地域の大きな地図を掲載し、その地方の内容がそこで確認しやすいように工夫されていて、使いやすいのではないかと感じました。また、帝国書院は、表なども見やすく、コラムなども充実しており、関心を持った生徒が、教科書を見てさらに興味を広げていくことができるのではないかと考えました。

最初に述べた通り、地理という教科は、他の教科との繋がりが多く、大変幅広い教科です。それゆえに、ともすれば地名や用語を羅列し、うまい比較ができないままに、それぞれの地域の特徴を暗記させるばかりになってしまいかねないなど、教え方は難しくもあります。しかし、興味を持たせることができれば、生徒たちにとって大変魅力的な教科になることは、間違いありません。そのためにも、教員にとって授業がしやすく、生徒たちが使いやすいということを重視したうえで、先に挙げた理由から、第1位を帝国書院、第2位を東京書籍とさせていただきます。

○佐藤教育長 垣内委員、お願いします。

○垣内委員 地理の教科書の採択に当たっては、グローバル化する社会において、平和で主体的・民主的な担い手をつくるという大きな目的を念頭に、社会的事象の地理的見方、つまり位置とか空間的な広がりといったものに着目して、それぞれの地域の環境・条件・地域間の結びつき、そして人間の営みを関連づけて課題を把握する。さらに、その課題を追求し、解決できることが重要、解決につながるような姿勢・能力を育成することが重要であると理解いたしました。そのため、知識・技能だけでなく、国際理解、そして国際協力の観点からもこの理解を深めるといようなことも考慮に入れました。

また、併せて本区の課題として、地理的事象に主体的に取り組む、主体的に調べる、そして自分で分かろうとする、そういう姿勢や態度を養うという点から使いやすく、そして分かりやすい、そういったテキストであるということが重要であろうというふうに考え、この点から4者を比較いたしました。

それぞれのテキスト、非常に構成もよくできていて、教科書の使い方についての説明がきちんとされているだけでなく、課題をつかむ、そして追求する、解決するといったような流れが示されていること、また、単元の終わりには、まとめや振り返りという形で総括

していること。SDGsなども含め、内容的にも非常によくできていると思います。形式的にもユニバーサルフォントを使っていること等々、全て優れていると思いましたがけれども、以下述べるような理由で、第1位は東京書籍、第2位は帝国書院といたしたいと思います。

まず東京書籍ですけれども、ほかのテキストよりも、より細かく、丁寧に、課題をつかむ、追求する、解決する、まとめるというところに注力しているという点を評価いたしました。また、地理のイントロダクションにも着目しました。先ほど浦井委員がおっしゃったように、地理というのは非常に多くの事象、多様な分野を包含するわけですが、一番最初の1年生のテキストは世界の食事から始まり、見開きで世界を俯瞰して、持続可能な社会の実現というふうに導いていく、そういう流れも非常に好ましく思いました。

そして、資料としては使用上の便宜として、導入資料だけでなく、「チェック&トライ」などの活動へのいざないもあり、見開き2ページで授業のときに全てが完結する点もよくできていると思いました。ほかのテキストも同様の配慮はありますが、よりきめ細かくそのステップを提示しており、ステップをフォローしながら、非常に具体的な学習ができるのではないかと。これによって、教員の方の経験値に合わせた授業も可能になるのではないかとこのように思いましたので、第1位は東京書籍です。

第2位は帝国書院ですけれども、こちらも非常によくできたテキストで、特に大きな単元で、見通しを持って調べるといふ、俯瞰的な姿勢も身に付くかなと思いましたが、より主体的に取り組んで、主体的に調べて分かっていくということをサポートするという観点で、東京書籍が一步リードかというふうに思いました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

私は、地理的分野については、中学校学習指導要領によれば、我が国の国土及び世界の諸地域に関して、地域のいろいろな事象や地域的特色を理解するとともに、地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、地理的な課題の解決に向けて公正に選択・判断したりする力などを養うことが大切であろうと認識しております。グローバル化が引き続き進展し、また、環境問題などの地球的課題が一層深刻化する現状においては、地理に関わる必要な知識や技能を身につけるだけでなく、世界各地で見られる地球的課題を自分ごととして捉え、主体的に追及・解決しようとしたり、その結果として、地理学習の楽しさや有用性を実感したりすることが今求められていると考えます。

そこで私は、小学校の地理的学習内容や地図の読図や作図などの地理的技能を活用しながら、問いや見通しを持って学習に取り組むことに着目して、4者それぞれの教科書を比較・検討させていただきました。

どの教科書も、章や節の扉のページでは、生徒の興味・関心を高めるための様々な工夫がされております。特に帝国書院においては、章の扉において学習の展開の見通しが明確に示されるとともに、各地域において追求する主題や注目する視点、地球的課題や地域に見られる課題が表に整理されており、章の学習全体を俯瞰して捉えることができます。節

の扉においても、節の問いを持つことができるよう、写真を中心とした資料が豊富に示されています。

また、東京書籍は章の扉において小学校の社会で習った言葉や、この章で学習する内容とのつながりが示されています。節によっては、節の冒頭において写真や地図などの資料を基に探究課題を設定し、その解決に向けて学習を進めるという構成になっております。

本文のページについては、帝国書院は1時間の授業で解決を目指す学習課題に加え、節の問いも掲載されており、何のためにこの内容を学んでいるかを自覚しやすい構成になっていると感じました。小学校・歴史・公民・他教科との関連や、地図帳活用の記載もございます。学習内容相互の関連づけや地図の読図や作図を促す紙面構成となっております。

また、東京書籍は1時間の授業で解決を目指す学習課題に対しまして、指定した語句を使って説明する「トライ」というコーナーが設定されていることで、生徒自身が自分の理解度を確かめることができ、次の授業や家庭での学習の充実にご寄与すると考えました。

以上のことから、私は、1位、帝国書院、2位、東京書籍を推薦させていただきます。

私からは以上です。

次に、高森委員、お願いいたします。

○高森委員 科目名「社会科」・種目「地理」については、教科書の導入において、地理を学ぶ意義、学習の方法論・アプローチがどのように示されているか。各編・各章の構成が統一されたフォーマットになっているか、デジタル教材は実効性があるか。社会科の歴史・公民の分野をはじめ、他教科への科目横断的関連性が示されているか。実践的・実習的学習や、現代的課題を考察するコンテンツが用意されているかなど、多角的な視点から比較・検討し、私は、1位に帝国書院、2位に東京書籍を選びました。

地理学習の意義、地理的な見方・考え方・調べ方などの基本的態度については、帝国書院は巻頭4ページを割いて提示がされていますが、東京書籍は4・5ページにコンパクトにまとめられています。

地理学習の意義について、帝国書院では「巻頭1・2」の「未来に向けてよりよい社会を目指して」の見開きを使って、一方の東京書籍は「巻頭3」と1ページの「持続可能な社会の実現に向けて」の見開きの中で、それぞれ具体的な課題を提示しながら説明していますが、帝国書院はこれに加えて、「巻頭8」の「地理的分野の学習の全体像」の中に、「地域的分野を学ぶ意義」の項目を別立てして、地理学習の意義を旗幟鮮明に打ち出しています。

基礎的・基本的技能の学習としては、帝国書院の「技能をみがく」21テーマに対し、東京書籍では「スキルアップ」31テーマが用意されており、こちらでは東京書籍のほうが充実しているように見受けられます。

学術調査や資料活用の実践を学ぶ地域調査の手法について、帝国書院128ページ以降、東京書籍144ページ以降にそれぞれ12ページにわたって、地図帳の利用法、ルートマップの作成法、調査記録の取り方、調査結果の発表の仕方など、段階的に学習するつくりにな

っています。

学びを広め、深める工夫では、教科横断的学習の内容について、東京書籍では「もっと知りたい」のコラムに他分野や他教科との関連を示すアイコンを駆使して紹介しています。一方、帝国書院はほぼ全ての偶数ページの下段ノンブル脇に、他分野や他教科との関連とキーワードが提示され、東京書籍に比べ、歴史・文化・宗教について充実した説明が見られるなど、明らかに優位性が見られます。特に帝国書院20ページ、日本の領土について学習する場面では、1855年の日露通商条約以降の北方領土の歴史の変遷を地図を用いて説明する点など、よくまとめられていると感じました。

全体の学習内容の配分について気づいたことですが、世界の諸地域を学習する第2章の分量について、帝国書院は83ページ、東京書籍は86ページとほぼ同程度であるのに対して、日本の諸地域を学習する第3章については、帝国書院が117ページ用意されているのに対して、東京書籍は86ページと、少ないことが指摘できます。単純にページ数で比較してはいけなかもしれませんが、日本の地理学習について言えば、全体的に東京書籍は文章のテキスト量も少なめに設定されているようで、これを無理のない学習が展開できる工夫とみなすか、情報量の不足とみなすかで判断が分かれるところです。

なお、各章・各編のフォーマットについて、例えば地理学習冒頭の自然・気候・人口・産業・経済などの図表のレイアウトが、現行の教科用図書では、帝国書院は統一感がなく、東京書籍は首尾一貫しているという特徴がありましたが、今回は帝国書院もフォーマットの統一が図られたことが分かります。フォーマットやレイアウトの統一性は、使い勝手に影響する部分も大きく、例えば各州の気候や人口密度を比較したい場合などに、必要な情報へアクセスしやすいというメリットがありますので、今回、帝国書院に改善が見られたことは評価したいと思います。

また、現代的課題について考えさせる教材について、帝国書院では「アクティブ地理」と名付けたアクティブラーニングが4か所も用意され、「自然災害」「観光公害（オーバーツーリズム）」「再生可能エネルギー」などの諸問題について話し合う活動が用意されています。一方、東京書籍では、142ページに「地理的課題を振り返ろう」のコーナーを設けて、学習内容のまとめの中で全体を俯瞰して巨視的に考えることの重要性を学ばせている点が興味深いです。

最後にデジタル教材について、帝国書院は「図解」「アニメーション」「ジオグラフ」「用語解説」「統計資料」「思考ツール」などのテーマごとに分類され、学習の見通しと振り返りも行えるなどの特徴もありますが、基本的に教科書の内容を補完する機能を持たせているようです。一方、東京書籍のデジタル教材は、各編・各章ごとに整理され、内容も動画解説・補足資料のほか、ワークシート、クイズ、学習の振り返りとチャレンジ問題がセットになった「チェック&トライ」など、実践的なコンテンツも多く、また他教科等へのリンクは同じ東京書籍の他の教科の学習内容を閲覧できる仕組みになっているなど、実用的なコンテンツが用意されています。

以上のように両者とも一長一短ありますが、全体的に帝国書院の完成度が高いということで、私は、1位、帝国書院、2位に東京書籍を選びました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

神田委員、お願いします。

○神田委員 地理の教科書選定の視点として、①資料の量とその活用の仕方が明確か②主体的・対話的で深い学びの視点を取り入れられ、学び方を身に付けられる内容か③基礎・基本の習得が可能であるかという視点で選びました。加えて、地理ということで、日本の領域や領土をめぐる問題等についてもその記載内容を比較させていただきました。

帝国書院は、主体的・対話的で深い学びにつながる単元構成の工夫をしています。「写真で眺める」⇒「章や節の問い」⇒「学習問題」⇒「確認しよう・説明しよう」⇒「学習を振り返ろう」の順で学ぶことができます。特に、導入の資料では鮮明で分かりやすい写真が多く、生徒が気付きや学習の見通しを立てる上で効果的です。地図等に表記されている文字が鮮明で分かりやすいです。地理的な見方・考え方を働かせる工夫もなされており、随所に「地図活用」のマークがあり、学習が深められるようになっています。特に、第4部「地域の在り方」では、各地域の課題を設定して、様々な地域の在り方にスポットを当てています。自然環境、歴史・文化、産業、地球的課題と進み、最後に学習を振り返ろうで自分の考えをまとめることができるようになっています。ここでも地域の特色が見える写真やイラストの配置が優れています。SDGsに関する具体的な事例も多く載せられています。また、「個別最適な学び」を支援するQRコンテンツも充実しています。

東京書籍は、「問い」を中心とした構成になっています。まず課題つかみ、課題を追究する。そして、課題を解決する流れです。1時間ごとの学習課題と単元を振り返る「探究のステップ」が設けられています。導入や展開、まとめの各所にQRコンテンツが配置されており、内容も充実しています。

日本の領域の特色や領土をめぐる問題について、帝国書院は本文で扱い、東京書籍は資料的に扱っていますが、両者ともに、地図や写真を活用して、分かりやすく述べられていると思いました。私は、1位を帝国書院、2位を東京書籍を推したいと思います。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について事務局に報告させます。

(集計)

○事務局 それでは、ただいまの集計結果について申し上げます。

第1位に、帝国書院を推薦された方が4名、東京書籍を推薦された方が1名教育。第2位に、東京書籍を推薦された方が4名、帝国書院を推薦された方が1名。

以上でございます。

○佐藤教育長 ただいまの集計結果のとおり、1位に帝国書院を挙げた方が4名と最も多く、過半数を超えております。このことにより、社会（地理的分野）については、帝国

書院に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見等はございませんでしょうか。

よろしいですか。

(なし)

○佐藤教育長 それでは、社会（地理的分野）については、帝国書院に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

○佐藤教育長 ご異議ございませんので、社会（地理的分野）については帝国書院に仮決定いたしました。

社会（歴史的分野）

○佐藤教育長 続いて、社会（歴史的分野）についてご審議願います。発行者は9者となっております。

それでは、各委員から、採択すべき発行者について順位をつけてご発言願います。

垣内委員から、時計回りの順にお願いします。

垣内委員、お願いします。

○垣内委員 ありがとうございます。

歴史的分野に関しては、グローバル社会に主体的に生きる公民を育成するという大きな目的を持って、社会的な事象の時期や推移を関連づけて考え、類似性や差異を明確にしたり、その意味とか意義、あるいは特色や相互の関係を考察したり、社会の課題を把握、解決に向けて構想する、そういった能力を養う、非常に重要な科目だと認識しております。

また、本区の課題として、特に社会的な事象の推移と関連に関する多様な要因への考察と理解、こういったものが必要とされており、また歴史の流れを理解し、背景を考察し、文化的な側面にも配慮しながら、主体的に生きるということにつなげていく、そういう資質・能力を養うという観点から、それぞれのテキストを比較・検討させていただきました。

いずれのテキストも、大変よく構成的にまとめていただいているかと思えます。ほぼ全ての教科書において、教科書の使い方についての記述があり、また学習課題の提示、そして本文、振り返り、まとめといったような学習の内容が示されて、生徒の主体的な学習を促すというところにつながっていると思えます。

また単元の終わりにも、まとめという形できちんと知識の定着も図られているということもあります。使用上の便宜として、1時間の授業で学習しやすいという工夫がなされているのは、特に特徴的かと思えます。課題・本文、そしてコラムとか確認とか、ステップアップとか、様々な言葉で表現されておりますが、学習の多面的な内容を示すことによって、その単元で学んだ、まとまりのある知識を、1時間という授業の中で完結させるということもできるかなというふうに思いました。

ユニバーサルデザインフォントも使用されておりますし、学びやすい、読みやすいテキストになっているかと思います。

その上で私は、東京書籍を第1位、第2位を帝国書院とさせていただきたいと思います。

東京書籍に関しましては、教科書の使い方だけでなく、単元の最初に探求課題と課題解決のために「探求のステップ」というものを非常に明確にしているということがあります。これによって比較をして相互の関連を考察し、つながりを検討し、現在とのつながりへと理解が深まっていくというようなことが期待されるように、学習の流れ、思考の流れを示すという点で、非常に好ましいと思いました。

また、考えを整理する、あるいは思考を整理するというような形での項目も示されています。

個別の事象の丁寧な説明だけでなく、豊富な情報量もあり、教えることもしやすいのではないかというふうに思いましたし、生徒の方の興味関心とか能力に応じて、自分で学習することもできるのではないかというふうにも思いました。

以上の点から、第1位は、東京書籍、第2位を帝国書院というふうにさせていただきます。
○佐藤教育長 ありがとうございます。

歴史的分野については、中学校学習指導要領によれば、我が国の歴史の大きな流れを、世界の歴史を背景に、各時代の特色を踏まえて理解するとともに、歴史に関わる事象の意味や意義、伝統と文化の特色などを多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し、複数の立場や意見を踏まえて、公正に選択・判断したりする力などを養うことが大切であると認識をしております。

現代は文化の時代とも呼ばれ、変動的で不確実、複雑で曖昧な世界とも言われております。このような予測困難な社会においてこそ、歴史を学習することには大きな意義があると考えます。

個別の知識も必要ではございますが、各時代の日本を体感して、その特色を多面的・多角的に考察し、表現することが求められております。

そこで私は、生徒が歴史に関わる事象を結びつけながら、それらを概念的な知識として獲得し、理解を深めるための紙面の構成に着目し、9者それぞれの教科書を比較・検討をさせていただきました。

どの教科書も章や節の問いが設定されており、その解決に向けて1時間の授業における学習課題に取り組む構成となっております。

特に東京書籍は、章の問いを「探求課題」、施設の問いを「探求のステップ」として、章や節の冒頭で示されております。各節の「探究のステップ」に取り組むための長文や、そこで活用する思考ツールが掲載されており、個別の知識の確認を行いながら歴史の大きな流れも理解することができるような工夫がされております。

「みんなでチャレンジ」と称して、グループで話し合う対話的な学びのコーナーも設定されており、他の生徒の考えとの共通点や、相違点を明らかにしていくことで、多面的・

多角的な考察がより一層充実することが期待できると考えます。

また、帝国書院は「タイムトラベル」というページにおいて、古代の縄文時代から現代の高度経済成長期までの12の時代の様子を見開きの大きなイラストで提示しております。各時代の学習を始める前に眺めて、時代のイメージを膨らませるだけでなく、それぞれの章の終わりに設定された「学習を振り返ろう」では、このタイムトラベルを活用して、章の問いを考察し、時代の特色や今の時代とのつながりについて考えることができ、一貫性のある構成になっていると考えました。

以上のことから私は、1位、東京書籍、2位、帝国書院を推薦させていただきます。

私からは以上です。

次に高森委員、お願いいたします。

○高森委員 科目名「社会科」・種目「歴史」については、教科書の導入部分において歴史を学ぶ意義や学習方法が分かりやすく示されているか、課題を追求し学びを深める活動が充実しているか、資料を分析する能力を育むコンテンツが用意されているか、資料の見せ方に工夫があるか、デジタル教材の使い勝手はどうかなどの視点で比較・検討し、私は、1位に帝国書院、2位に東京書籍を選びました。

まず、歴史を学ぶ意義について、両者とも教科書導入部分のオリエンテーションに明確に示されており、帝国書院1ページは、同者の地理・公民分野の2～3倍の文章量で「歴史的分野を学ぶ意義」が示され、東京書籍2・3ページには、写真や概念図を用いて、なぜ歴史を学ぶのかのメッセージが用意されています。

学習の方法については、東京書籍は6・7ページの見開きで学習のプロセスが簡潔に解説されているのに対して、帝国書院は5～9ページの5ページにわたって学習の全体像、見方・考え方、思考ツールの活用法など、具体的な説明が用意されています。

レポートのまとめ方、発表の仕方については、帝国書院13ページ下段のコラム欄「技能をみがく」では、文字情報だけであるのに対して、東京書籍は18・19ページの見開きを活用して、人文社会科学系の科学的アプローチが、具体的事例とともに丁寧に解説されています。なお、帝国書院、東京書籍ともに、発表は他者も理解・合意できるようにするために、論理整合性・事実立脚性・主観的客観性が要求されることを中学生にも分かりやすい表現で、説明している点は評価できます。

主体的学びにつながるコンテンツとしては、2者ともに充実しており、帝国書院「技能をみがく」14テーマ、東京書籍「スキルアップ」21コーナー、対話的学びにつながる活動は、帝国書院「アクティブ歴史」5テーマ、東京書籍「みんなでチャレンジ」20コーナー、深い学びにつながるコラムでは、帝国書院「未来に向けて」63テーマと「地域史」16テーマ、東京書籍は「もっと知りたい」33コーナー、本編後半部分には「未来にアクセス」4コーナーがそれぞれ用意されています。

資料の分析能力を育むコンテンツについては、帝国書院・東京書籍それぞれによいところがあります。東京書籍巻頭の「資料から発見！」の特設ページは、時代を代表する絵巻

物・屏風絵・浮世絵・錦絵を並べて用意し、「スキル・アップ」のコラムおよび二次元コードの動画で、資料に描き込まれた情報を読み取る学習を用意しています。一方、帝国書院では39ページの「系図の見方」、56ページ「絵巻物の見方」、267ページ「情報の意図を読み解く」など、「技能をみがく」のコラム欄が充実しており、このほかにも各章・各節に掲載された写真・資料の多くにキャラクターの吹き出しで問いを設け、資料から情報を読み取る活動を取り入れております。

資料の見せ方で優れていると思ったのは、帝国書院の「世界とのつながりを考えよう～地図編～」で、44ページに8世紀、78ページに13世紀、110ページに16世紀、172ページに19世紀の、それぞれの世界の動静をスプレッドで俯瞰することができる特設ページが用意されています。また、「歴史を探ろう」の特設ページでは、154ページに近世の江戸、192ページに近代の横浜、246ページに大阪と神戸というように、それぞれの時代に特に発展を見せた都市の実際を学習できる教材が、同じく見開きで用意されております。これらは知識の幅を広げるという意味でも効果的だと思いました。

本編の個々の歴史地図、組織図、統計図、相関図等の挿図類を比較しますと、帝国書院25ページ・東京書籍33ページの世界三大宗教の興起と展開を示す歴史地図では、東京書籍は仏教の伝播のみを記載しているのに対して、帝国書院は、仏教・キリスト教・イスラム教の伝播も記載、帝国書院の40ページ・東京書籍44ページの太宰府の図版では、帝国書院は現在の航空写真や水城の断面図まで掲載。帝国書院125ページ・東京書籍113ページの江戸幕藩体制下の諸国大名の配置図では、帝国書院は各藩の石高が一目瞭然となるバブルチャートを使用、帝国書院183ページ・東京書籍163ページの幕末の攘夷・倒幕運動の図版では、東京書籍は5つの事件のみを記載するのに対して、帝国書院は11の事件を記載、帝国書院266ページ・東京書籍235ページの太平洋戦争下での本土空襲の被害状況については、帝国書院は死者数が一目瞭然となるバブルチャートを活用するなど、帝国書院は東京書籍よりも直感的に情報を読み取ることができる工夫が随所に設けられています。一方、東京書籍でも、69ページの保元・平治の乱の相関図、及び源平争乱の歴史地図のように、帝国書院の69ページと比べると内容が充実している部分もありますが、こうした事例は、各時代・各項目を担当した編集委員や編集協力者の力点の違いが表に出ているのではないかと感じました。

次にデジタル教材について、帝国書院は「図解」「アニメーション」「ジオグラフ」「用語解説」「統計資料」「思考ツール」などのテーマごとに分類され、教科書の内容を補完する機能を有しています。一方、東京書籍のデジタル教材は、各編・各章ごとに整理され、ワークシート、クイズ、学習の振り返りとチャレンジ問題がセットになった「チェック&トライ」など実践的なコンテンツが用意されています。

以上の比較・検討を踏まえ、私は、1位に帝国書院、2位に東京書籍を選びました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

神田委員、お願いします。

○神田委員 歴史の教科書を選定する観点として、①学習のねらいが明確であるか②主体的・対話的で深い学びにつながる内容か③知識・技能の習得が可能か④客観的事実を基に分かりやすい説明がなされているかなどを比較させていただきました。

どの教科書も冒頭で教科書の使い方や学び方が示されており、導入、課題、本文、コラムなどの資料も充実しています。歴史はその捉え方が様々あります。公教育で指導する際には客観的な資料を多く掲載し、学習者がその資料を基に多面的な思考ができることが大切だと考えます。

東京書籍は第1章が「歴史へのとびら」として、時期や年代の表し方、歴史の流れの捉え方が丁寧に示されています。

「問い」を中心とした課題解決学習の流れとなっています。これは、社会科の他の領域においても同じ構成となっています。

生徒の興味を引く導入の資料、1時間を貫く「学習課題」が提示されています。また、本文が丁寧に分かりやすく記述されています。1時間の学習課題を解決するために「チェック&トライ」の流れで構成されています。また、歴史的な見方・考え方がマークで表示されているのも分かりやすいです。

まとめのページでは、評価の観点が示されています。節の問いの答を記入できるようにもなっています。深め方ですが、思考ツールや対話的な学び方が提示されていたり、QRコードが様々なシーンで提示されたりして、生徒の学びをサポートしています。東京書籍の社会科のどの領域の教科書にも、現代の5つの課題を取り上げ、コラム「未来にアクセス」領域や教科を超えて未来を見つめる姿勢は評価されます。

帝国書院は、大判のイラスト資料が特徴的です。生徒の気付きと課題意識を引き出す上で効果的だと思います。琉球やアイヌなど地方から歴史を見ることができますし、伝統文化、人物史など多様な視点から歴史を捉えています。小学校で学ぶ事項、地理や公民で学ぶ事項がページ下にアイコンとして掲載されていて発達段階や小中との連携を意識しているのは評価できます。

このような理由により私は、第1位は東京書籍、2位を帝国書院に推したいと思います。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

浦井委員、お願いします。

○浦井委員 まず、少し長くなってしまいますが、私自身歴史学を専門としている人間の端くれなことでもございまして、最初に少し、私自身の歴史に対するスタンスをお話させていただいてから、本題に入らせていただきたいと思います。

歴史という教科はある意味で、小中学校で教えるということが難しい教科です。曖昧なことは教えられません、かといって事実確認のできた事柄のみを羅列していくと、ただの表のようになってしまい、年号や人物名を覚えるだけのただの暗記科目となってしまいます。これでは当然、興味もわかかなければ頭にも残らず、生徒たちのためになりません。歴史は本来、物語の意味のストーリーを持って語られるべきものではありません。これは本

来、歴史を意味する英語の「history」と物語を意味する「story」の語源が同じであることからも分かります。

しかし、何らかのストーリーを作れば、今度はどうしても、そこに作り手の意図や価値観が含まれてきてしまいます。はっきりとした価値観とストーリー性があると、生徒たちの頭には入りやすくなりますが、一方で当然のことながら、どのようなものであれ思春期の中学生に、特定の価値観を植え付けることは避けたいところです。この矛盾が、中学の歴史という教科の難しいところなのではないでしょうか。

そもそも歴史学というものを考えた場合、どんな歴史書であっても、書き手の価値観が入り込むのを防ぐことは不可能です。これは、歴史を語るうえで証拠ともされる史料（この場合、歴史の史を書く方の史料ですが）であっても、作り手の価値観や立場、意図が入っているわけです。したがって、そういったものをどう解釈するかが問題なわけですが、ここでさらに研究者の価値観が加わります。歴史とは、書き手の数だけ多種多様な見方が存在する可能性があるわけです。

したがって、真実を追求しながらも、「正しい歴史」というものは存在しがたいという、究極の矛盾が生じることになります。これが歴史の面白いところですし、ある意味で、歴史は見る人間の数だけあって良いわけです。とはいえ、だからといって曖昧なものを教えても、生徒たちは混乱してしまいます。このジレンマと向き合わなければならないわけですが、ストーリー性の強いものほど、うまく他の見方を紹介しないと生徒が混乱するなど、それを扱う教員の技量が必要になると考えました。

中学生となり視野の広がりつつある生徒たちには、自分はどう考えるか考えを含め、考えが違う場合は、相手はなぜそう考えているのかななどを広く考察し、自分と違う見方を否定することなく受け入れる力を養ってほしいと考えるところです。

さて、長くなってしまいましたが、このようなスタンスから私は、中学生という微妙な時期の生徒たちが、もっとも歴史というものを広い視野で学びやすく、また教員にとって教えやすいものはどれであるかをもっとも重視いたしました。また、申し上げるまでもありませんが、私自身の歴史観は含めずに検討させていただきました。

そのうえで、順位を申し上げます。実のところ、大変悩みましたが、私は第1位を帝国書院、第2位を東京書籍、第3位を日本文教出版とさせていただきました。

まず、この3者に共通して良いと思ったポイントが、ページの端（ページの下、もしくは横）に時代の流れをスケール（定規のような目盛り）で示し、該当する部分に色をつけて、今自分がどのあたりの時代を学んでいるのかを確認できようになっている点です。これは、大変使いやすく素晴らしい工夫であると感じました。

中でも第1位とさせていただいた帝国書院は、写真資料の量も的確で、レイアウトも見やすく、分かりやすくまとめられており、多変使いやすく感じました。

写真資料は大切ですが、多すぎても目移りしてしまいます。実際に、興味のある生徒はどんどん細かいところまで読みますし、資料集やプリントなどにも目を通すでしょうが、

歴史に興味を持ってない生徒ほど、教科書は端的に大切な部分が強調されている構成の方が良いのだろうと思います。

これは、本来どこが大切なのかを自分で判断させるのがベストなわけですが、生徒によってはなかなか難しいところです。その点については、多くの教員が、掲載された写真資料などから何が分かるかを読み取らせる問題を出すなど、工夫されていると伺っており、そういったことから、適切な写真資料の選択と配置は、重要であると考えました。

第2位、第3位は実のところ大変悩みましたが、東京書籍は、デジタルコンテンツが充実しており、また單元ごとのまとめが充実していること、自身の習得状況を確認できるチェック&トライなども使いやすいことから、第2位とさせていただきます。

第3位とした日本文教出版も、QRコードなどでデジタルコンテンツを使い、自身の学習のポートフォリオを作成できるようにするなど、生徒の学習をサポートする工夫がされていて、良いと思いました。

なお最後に、順不同になりますが、順位には挙げなかった他の教科書についても簡単に触れさせていただきます。自由社・育鵬社・令和書籍の教科書につきましても、教科書展示会での感想などを拝見しても、それぞれ歴史観などにより評価が分かれるところだと思います。ある意味では価値観が明確な分、ストーリーがあって分かりやすいという考え方もあるかとは思いますが。ただ、実際に中学校の授業で使うとなると、全体の形式や構成なども含め、いずれもその分、教員にそれなりの高いスキルが必要とされることになり、難しいと判断いたしました。

山川出版社につきましても、定説を確実に丁寧にまとめており、堅実な印象を受けました。ただ、それゆえかもしれませんが、どうしても硬い雰囲気を感じる場所があり、特に歴史に興味のない生徒や苦手な生徒には難しく感じられ、少々使いづらく思えるかもしれないと考えました。

教育出版につきましても、内容は現代への結び付けなどが、大変工夫されていると感じました。ただ、先ほど触れた時代の目盛り（スケール）が項目ごとにつけられているのですが、これはページの端などの方が、一見してすぐにどこにあるか分かりやすいように思いました。また、自分が今、どのあたりの時代を学んでいるかが黄色で塗り示されているのですが、個人的にはこの黄色が少々見づらいように思いました。

学び舎は、上野動物園の象の話を取り上げるなど、台東区の生徒達にとってはなじみ深い内容もあり、生徒が興味を持てるようにさまざまなエピソードを入れるなど工夫されておりました。ただ、順位に挙げた3者と比べると、やはり教える際に教員のスキルを必要とすると感じました。

台東区は、歴史的なさまざまなものを、手に取り肌で感じることでできる、大変素晴らしい特徴を有した区です。現存する史料や写真から学び、歴史を読み取る力を育てるためにも、写真資料などの適度な充実は重要かと考えます。また、歴史に限らず、社会の教科書は、特に繰り返し熟読することによって、自ら学べるものであることが大切かと思

ますので、何度も読んで線を引き、自分のもののできる教科書が良いと思います。
そのような点もふまえ、総合的に考えました結果、第1位を帝国書院、第2位を東京書籍、
第3位を日本文教出版とさせていただきます。長くなり申し訳ありません。

以上です。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてのご発言をいただきましたが、集計した
結果について、事務局より報告させます。

(集計)

○事務局 それでは、ただいまの集計結果について申し上げます。

第1位に、東京書籍を推薦された方が3名、帝国書院を推薦された方が2名。第2位に、帝
国書院を推薦された方が3名、東京書籍を推薦された方が2名。第3位に、日本文教出版を
推薦された方が1名。

以上でございます。

○佐藤教育長 ただいまの集計結果のとおり、1位に東京書籍を挙げた方の数が3名と最も
多く、過半数を超えております。このことにより、社会（歴史的分野）については、東京
書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、そのことについて附帯意見等はございま
すでしょうか。

よろしいですか。

(なし)

○佐藤教育長 それでは、社会（歴史的分野）については、東京書籍に仮決定させていた
だきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

○佐藤教育長 ご異議ございませんので、社会（歴史的分野）については東京書籍に仮決
定いたしました。

社会（公民的分野）

○佐藤教育長 続いて、社会（公民的分野）についてご審議願います。発行者は6者とな
っております。

それでは、各委員から、採択すべき発行者について順位をつけてご発言願います。

私から、時計回りの順にお願いいたします。

公民的分野につきましては、中学校学習指導要領によれば、民主主義・民主政治の意義、
国民の生活の向上と経済活動との関わり、現代の社会生活、及び国際関係などについて理
解を深めるとともに、社会的事象の意味や意義などと、現代の社会生活と関連づけて、多
面的・多角的に考察したり、現代社会に見られる課題について公正に判断したりする力な
どを養うことが大切であると認識しております。

近年、ウェルビーイングという考え方がかなり一般的なものとなってきました。ウェル

ビーイングとは、身体的・精神的・社会的に良好な状態であることを意味する概念でございます。ウェルビーイングな社会を実現するためには、現代社会に見られる課題を自分ごととして捉え、その解決に向けて主体的に社会に関わろうとする態度を生徒に養うことが求められております。

そこで私は、生徒が社会的事象等から学習課題を見だし、課題解決に取り組むことができるよう、章の導入でどのような工夫がなされているかということに着目して、6者それぞれの教科書を比較・検討させていただきました。

どの教科書も章の学習内容に対して生徒が興味関心を高めることができるよう、それぞれに工夫がなされております。

特に東京書籍は、ベン図やマトリックスなどの思考ツールを活用し、対象を比較して分類する活動や、有権者や経営者になって投票や出店を行う活動、自分と友達との考えの違いについて、グループで話し合ったりする活動が設定されております。

生徒1人1人の選択・判断を促す活動を行うことで、学級内での考えの違いが生まれ、章を貫く問いである、探究課題に対する興味関心を高めながら、解決に得取り組むことができると期待できます。

また、帝国書院は、暮らしの様子を示したイラストから、憲法との関わりや経済との関わり、地球的課題などを探す活動が設定されており、章の学習内容と自分の生活との関わりを実感することを促す工夫がなされていると考えております。

以上のことから、私は、1位を東京書籍、2位に帝国書院を推薦させていただきます。

私からは以上です。

続いて高森委員、お願いいたします。

○高森委員 科目名「社会科」・種目「公民」については、教科書の導入部分において、公民を学ぶ意義や学習の方法が分かりやすく示されているか、人類が抱える今日的課題について議論し掘り下げる対話的で深い学びにつながる活動があるか、デジタル教材は有効に活用されているかなどの視点で比較・検討しました。特に公民の分野は、同じ社会科の地理・歴史分野と大きく異なる点として、「答えのない課題をみんなで考える」という特色が比較的強い教科と思われるので、対話的で深い学びについては、特に重きを置いて比較いたしました。結果、私は、1位に教育出版、2位に帝国書院を選びました。

推薦の理由ですが、まずオリエンテーションの充実度について、教育出版は目次を含む巻頭11ページを、帝国書院は同じく目次を含む巻頭9ページを使って、それぞれ丁寧に説明されています。公民的分野を学ぶ意義については、帝国書院では、巻頭8ページ下段に600文字程度に約言して、自他の関わりの中で生きていく術を学ぶのが公民学習の核心部分であることが説明され、一方の教育出版では、巻頭扉見開きを存分に使って、社会科学習の集大成として、本質的な問いの探求を目指すのが、公民を学ぶ意義であると説明しています。

全体の構成は両者それぞれに特色があり、帝国書院は現代社会・政治・経済・国際・課

題探究の5章で構成されているのに対して、教育出版は、政治・経済をさらに細分をして、現代社会・憲法・政治・経済・社会・国際・SDGsの7章で構成されております。

考えを整理する思考ツールについては、帝国書院は「巻頭9」に4種類、デジタルコンテンツに6種類の計10種類、教育出版では巻頭10ページに5種類を用意しています。

課題を深掘りする対話的で深い学びについて、2者ともに要所に特設ページや学習コラムを設け、教育出版は、「公民の窓」39テーマ、「公民の技」11テーマ、「クリップ」4テーマ、「特設ページ」13テーマが用意され、帝国書院は「アクティブ公民」特設ページ10テーマ・コラム31テーマ、「未来に向けて」特設ページ13テーマ・コラム13テーマ、「技能を磨く」6テーマ、「公民プラス」18テーマが用意されています。

点数としては、帝国書院のほうが多いように思われますが、主体的・対話的で深い学びを実現する帝国書院の「アクティブ公民」と、教育出版の「特設ページ」とを比較すると、帝国書院は「マンションの騒音問題を解決しよう」「青果店の立ち退きについて考えよう」「もしも無人島に漂着したら」「パン屋さんを起業してみよう」など、日常的にあまり判断を迫られることがないと思われる事案を想定したアクティブラーニングになってしまっているような気がします。

一方の教育出版には、帝国書院にない切り口の活動が用意され、例えば34ページでは大規模災害時の避難所運営の課題、70ページでは人工知能の発達と人権、78ページでは沖縄米軍基地問題、112ページでは裁判員裁判の疑似体験、148ページでは契約と消費者トラブル、180ページでは障がいの社会モデルなど、一步踏み込んだ考えさせられるテーマ設定がなされており、社会に出たときにすぐにでも役立つ実践カリキュラムとなっています。

次に、デジタル教材について、帝国書院は、「図解アニメーション」「他分野教科書リンク」「NHK for school」「用語解説」「統計資料」などのテーマごとに分類され、学習の見通しと振り返りも行われるなど特色もありますが、基本的に教科書の内容を補完する機能を持たせているようです。

一方、教育出版のデジタル教材は各章ごとに整理され、「中学社会クイズ」「中学社会チェック」「役立つリンク集」など、実用的なコンテンツが用意されている点で評価できます。特に「中学社会クイズ」は練習問題形式にもなっており、一度攻略すると、苦手項目が復習できるなど、独自の教材で存在感を高めています。

図版や表の見せ方について、社会的存在としての人間について学ぶ第1章の中から、帝国書院17ページの「社会集団の例」の図、教育出版28ページの「社会集団の広がり」と主なルール」の図を比べてみます。両者を比較すると分かりますように、帝国書院は、「自分・家族・学校・地域社会・国・世界」の6集団を同心円で描いた概念図のみであるのに対して、教育出版は、「家族・地域・学校・職場・地方自治体・国・国際社会」というように、帝国書院とはカテゴライズも階層も多少異なる理解を示し、さらにそれぞれの集団における具体的なルールも併せて学習する工夫が取られています。ほかにも、地方自治体を扱った帝国書院102ページ、教育出版119ページの「地方自治の仕組み」の図も、教育出

版は、各種行政委員会に至るまで詳細に図式化しています。

最後に、公民の学習の集大成ともいえる最終章を比較してみます。帝国書院は第5部の「課題探究学習」、教育出版は終章「私たちが未来の社会を築く」となります。世界が直面する課題は多岐にわたりますが、教科書では、国際法上の主権侵害や武力による現状変更などの国際社会の分断と対立の問題に始まり、核兵器の脅威、エネルギー問題、放射性廃棄物、環境問題、貧困・難民・移民問題、子供と女性の権利など、今日の人類社会が抱える多くの課題と向き合う学習が用意されています。

その中でも特に注目したいのは、教育出版216・217ページに展開する、「なくてはならない食糧と水」の学習課題です。帝国書院では204ページに「食料や水をめぐる問題」として、250文字程度の解説がありますが、教育出版は遥かに多い2ページにわたって学習と活動を用意しています。エコロジカル・フットプリントの指標では、70億に膨れ上がった人類を支えるのに地球が1.75個必要と言われる時代において、このテーマを通して、食料安全保障の課題意識を共有し、いま私たちが何をなすべきかを考える契機にしてほしいと思いました。

以上の比較・検討を踏まえ、私は、1位に教育出版、2位に帝国書院を選びました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

次に、神田委員、お願いします。

○神田委員 公民の教科書を選ぶにあたっては、①「公民」を学ぶ意義やねらいを導入に明確に示しているか、②現代社会の見方・考え方を働かせて課題を追究したり解決したりすることができる内容や資料が盛り込まれているか、③様々な事象を自分のこととして主体的に社会に関わろうとする態度が育成できるかの視点から拝見させていただきました。学習するのは3学年ですが、「公民」という学習の意義を理解するのは難しいと考えます。そこで導入部分を比べてみました。

東京書籍は、持続可能な社会の実現に向けてこれからの社会を考えることを「人権・平和」「環境・エネルギー」「防災・安全」「情報・技術」「伝統・文化」の5つの視点からとらえ、公民の学習の意義について簡潔に分かりやすく説明しています。小学校社会の学習からどのようにつながっているのか写真を使って図で表しています。教科書の使い方、学びの流れ、コラム等の特徴についての説明があります。第1章への導入にあたり見開きで資料と探究のステップや探究課題の説明があります。思考ツールの提供などもあります。1章の展開も持続可能な社会、グローバル化、情報化へとつなげています。生徒にとって公民の学習への導入の流れがスムーズなのではないかと考えます。他の社会科の教科書全体に言えるのですが、課題をつかむ→課題を追究する→課題を解決する→まとめの活動といった学び方が明確に示してあるので、生徒は主体的な学習を進めることができます。

内容については、現代社会、憲法、政治、暮らしと経済、地球社会などの課題がバランスよく分かりやすい説明で書かれており、公民の学習の基礎基本を身に付けることがで

きます。また、自分ごととして考え学ぶことができる工夫が見られます。先ほどは1章の導入について述べましたが、各章の導入でも様々な工夫された資料を基に自分なりに考えてみる形がとられ、本題に入ることができます。章末には学習を振り返る問題があります。導入や展開では、学習内容をイメージできる動画、まとめでもチェック&トライで入力した回答を保存したりすることもできます。

主権者意識を高めるために「18歳へのステップ」が設けられています。領域や教科を超えてこれからのあるべき社会を考えられる教科書であると思います。グローバル化や多様化に対応し、「誰一人取り残されない学び」を意識した教科書です。

また、帝国書院も内容や構成がしっかりしており、主体的に社会に参画する意識を育てる教科書であると思います。学習課題の提示、本文、振り返り、まとめという流れで主体的な学習を進めることができます。「18歳への準備」として、様々な面から主権者意識を高めています。また、小学校や地理・歴史での学びと関連付ける、本文に解説を細やかに入れる、QRコンテンツの活用なども考えられており、生徒の学びを助ける工夫がしっかりなされています。

これらのことを考え、1位を東京書籍、2位を帝国書院を推したいと思います。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

浦井委員、お願いします。

○浦井委員 よろしく申し上げます。

公民は、中学校では1・2年生まで歴史と地理を学び、そのうえで3年生から、地理に代わって歴史と並行して学ぶ教科となっています。したがって、対象は3年生となるわけですが、この1年弱で1冊分を学ぶと考えると、ボリュームのある内容となっています。

したがって、まず政治や経済などさまざまな内容をバランスよく配置し、生徒にも教員にも使いやすいものとなっているかを考慮しました。指導要領に、現代社会の見方や考え方を養うとある通り、公民の授業は私たちが生きている現代社会について、広く多面的な見方ができるようになることを目的としております。したがって、この教科書を使って学ぶことによって、生徒たちが社会にかかわる中で広い視野と正しい知識を持ち、考えを広め深めて、問題と向き合い解決策を見出していけるよう、工夫されているものであることを重要視しました。

候補に挙がった教科書は、どれもそれぞれに工夫されておりまして、さらに、大変僅差で迷いましたが、私は第1位を東京書籍、第2位を帝国書院とさせていただきます。

第1位とした東京書籍は、教科書の最後に「公民の学習をこれからの生活に生かす」として、学びを広げる促しをしています。これから進学にせよ就職にせよ、社会へと足を踏み出していくことになる生徒たちが、自分たちのこれからのにとって、この公民の授業がどう役立っていくのか、どう役立てていくべきなのかを明確にしており、良いのではないかと考えました。レイアウトも見やすく構成されており、学習課題の横に必ず二次元コードをつけて、デジタルコンテンツを活用しやすく工夫されている点も、良いと思いました。

第2位とした帝国書院は、写真資料も多く、索引もメインとなるページが太字で示されている点など、こちら使いやすいと思いました。写真資料は、多すぎても邪魔になりますが、公民の場合、具体的なイメージのわきにくいものも多く、的確な写真資料が必要と考えました。また、215～225ページの9ページ分を使って、「第5部 課題研究学習」として、学んだことを元に、それぞれの考えを広げるよう促されており、丁寧に使いやすかったです。

東京書籍・帝国書院共に、ORコードは使いやすく、教科書の最初の方に小学校の社会科から繋がりを意識したページがあります。公民という初めて出てきた教科に対しての導入は、大切だと思います。帝国書院では、これに加え、公民の学び方や思考の整理の仕方、思考ツールの活用などを細かく提示しています。この部分、丁寧に良いとも感じましたが、一方で考えることを苦手とする生徒にとっては、思考ツールを埋めることに頭が行ってしまい、新しい公民と言う教科へのハードルを、少々高くさせてしまう気もいたしました。以上のように大変悩みましたが、総合的に見ると、実際に使う生徒たちにとっては東京書籍のまとめ方の方がシンプルで分かりやすいのではないかと感じ、東京書籍を第1位、帝国書院を第2位とさせていただきます。

以上です。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

垣内委員、お願いします。

○垣内委員 公民的分野について、グローバル社会で主体的に生きるということを想定して、社会的事象を、政治、法、経済に関わる多様な視点から、その概念・理念などに着目して捉え、よりよい社会の構築に向けて課題解決のための選択・判断に資する、そういう能力を身に付けるということになっております。そのための基本的な概念や理論というものを理解するというのも重要なことだろうというふうに認識しております。

その上で、とりわけ主体的に社会に貢献する事象を読み取って、多面的に考察する。社会に関心を持ち、そして課題発見につなげられる、そういったような能力を育成することが重要であろうというふうに理解いたしました。

以上の観点から、テキストを拝見いたしまして、比較・検討いたしましたが、私は、第1位を帝国書院、第2位を東京書籍といたしたいと思えます。

いずれのテキストも教科書の使い方、学び方についてイントロダクションがあり、課題をつかむ、そして追求する、解決するといったような学習の流れも、十分に丁寧に提示されており、また、その振り返りといったようなことも用意されていて、十分に学びやすいものであろうというふうに思いました。

さらに、1時間の授業で学習しやすいという工夫もなされておりまして、カリキュラムマネジメントの観点からも、いずれの教科書も素晴らしいものだと思います。

その上で、帝国書院につきましては、先ほど浦井委員もおっしゃっていましたが、単元の終わりに、3ページに「章の学習を振り返ろう」ということで、その中に知識、思

考力、表現力、主体的な学びといったようなものを育む探求学習の準備を設定していること、また、各単元に比較や考察ができるようなビジュアル教材を設けていること。考えを整理する方法として、様々な思考ツールが紹介されているといったようなことに加え、幾つかのテーマに分かれて、現実の社会の視点というものも表記がされているところがあります。

特に今日の分断社会を形づくる上で必ず知っておくべき知識・概念等も過不足なく盛り込まれているところがよいと考えました。

主体的に生きる、公民に必要とされるような考えを整理する方法、思考ツールといったようなこと、例えば対立と合意であったり、公立と公正であったりといったような、分断社会の中でどうしても避けて通れないようなキーワードの提示も、もう中学3年生ですので、少し学んでよろしいのではないかというふうに思いました。

なので、帝国書院が1位になりました。

東京書籍は、非常にきれいに整理されてはおりますけれども、今言ったような点で、帝国書院のほうが一步リードと理解いたしました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてのご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局から報告をさせます。

(集計)

○事務局 それでは、ただいまの集計結果について申し上げます。

第1位に、東京書籍を推薦された方が3名、教育出版を推薦された方が1名、帝国書院を推薦された方が1名。第2位に、帝国書院を推薦された方が4名、東京書籍を推薦された方が1名。

以上でございます。

○佐藤教育長 ただいまの集計結果のとおり、1位に東京書籍を挙げた方の数が3名と最も多く、過半数を超えております。このことにより、社会（公民的分野）については、東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、そのことについて附帯意見等はございませんでしょうか。

よろしいですか。

(なし)

○佐藤教育長 それでは、社会（公民的分野）については、東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

○佐藤教育長 ご異議ございませんので、社会（公民的分野）については東京書籍に仮決定いたしました。

議事進行中ではございますが、昼食時となりましたので、ここで一時中断し、休憩をさみたいと思います。

なお、再開は午後1時10分といたします。よろしくお願いいたします。
それではこれより休憩といたします。

(休憩：12：10～13：10)

○佐藤教育長 それでは、会議を再開させていただきます。

地図

○佐藤教育長 地図について、ご審議願います。発行者は2者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけて、ご発言願います。
高森委員から、時計回りの順にお願いいたします。

○高森委員 科目名「社会科」・種目「地図」については、地図帳の凡例や活用法の示し方、地図の視認性、情報量のバランス、資料や統計等の充実度という4つの視点で比較・検討し、私は帝国書院を選びました。

推薦の理由ですが、凡例および地図の使い方については、2者ともに冒頭の4ページを使い、説明がなされています。それぞれに特徴があり、帝国書院では、一般図・鳥瞰図・主題図の扱い方が示されているのに対して、東京書籍は一般図と主題図のみのガイダンスとデジタルコンテンツの活用法が示されています。また、オリエンテーションの部分の比較では、SDGs関連の学習が、帝国書院では7ページ割いているのに対して、東京書籍は1ページに留まっています。

地図帳は、学習の質を高めるための「道具」としての意味合いが濃厚な教材となりますので、他の教科と異なり、まずは地図帳の活用法が具体的に示されているかどうかが重要です。いかに有効に地図帳を駆使して情報を読み取るかを学習の導入部分で学ぶことは、地図帳に触れる楽しさ、地図や統計に隠された情報を発見する喜びを知る機会になると思います。

地図帳の基本となる地図の部分に関しては、例えば世界地図では、帝国書院の51ページと東京書籍の35ページのヨーロッパ州中央部、日本地図では、帝国書院129ページと東京書籍103ページの関東地方をそれぞれ比較いただければ一目瞭然で、文字量・視認性ともに、帝国書院のほうが優れているという印象があります。ただし、日本列島全体図については、帝国書院は81ページから4ページにわたり見開きで展開しているため、ページをめくらないと全体像を確認できないのに対して、東京書籍は巻末の折り込み3ページ分を活用して、島しょ部も含めた列島の全体を一望できる点は工夫されていると感じました。

また、地図帳は単に地図から地形や地名を読み取るだけではなくて、主題図・統計表などの資料編のボリュームも重要となります。2者とも世界地図では大州ごと、日本地図では地方ごとに、要所要所に詳細な資料編が組み込まれ、内容も地理の分野にとどまらず、歴史の分野に及ぶなど、大変充実しています。このうち、主題図の点数を比較すると、東

京書籍は世界120点・日本135点の計255点に対して、帝国書院は世界160点・日本174点の計334点、統計表については、東京書籍251点に対して、帝国書院が389点と、いずれも帝国書院のほうがより充実していることが分かります。

また、巻末の付録についても、2者いずれも充実していますが、見せ方の工夫で、例えば日本の火山・地震及び列島を取り巻く変動帯の主題図では、東京書籍は135ページのみであるのに対して、帝国書院は159・160ページに見開きで展開し、情報量も充実している点が評価できます。

そのほか、見せ方の工夫という側面からも帝国書院が優れていると思いました。以上の比較・検討を踏まえ、私は帝国書院を選びました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

続きまして、神田委員お願いします。

○神田委員 地図は地理の学習はもとより、歴史や公民の学習でも活用するものであり、生徒が使いやすいものが求められます。また、教員が指導に活用できる資料が豊富であることなども選定の理由となります。

同じ場面で比べてみました。

巻頭に地図の見方や使い方が説明されていますが、帝国書院では、地図記号が折込みに、地図の使い方が見開き4ページで詳しく説明されています。東京書籍も同じように地図記号が折込みで、活用の仕方が2ページで説明されています。ページ数が違うように帝国書院は地理的技能の基本が身に付けられるように段階を追って丁寧に解説しています。QRコンテンツも項目ごとに対応しています。

同じ国や地方の地図を比べると情報量が帝国書院の方が多いです。また、見開きの地図の側面にも解説や簡単な資料が載っています。例えば、北アメリカ州についての記述ですが、帝国書院では、見開きにて気候や密度の資料とともに地図を確認。2ページに渡って産業等の資料、次のページにはアメリカ州のでき方などにも触れています。東京書籍の資料は帝国書院に比べてやや少ないです。

竹島や尖閣諸島など領土の扱いは、帝国書院では23ページのアジアの大きな地図にも記載があります。

帝国書院は地図の色合いがくっきりと濃く、また立体的な表現でもあり、見やすくなっています。一方東京書籍は淡い色調です。地図は他の社会の分野でも活用することが多いので、見やすい、分かりやすいという点は重要です。両者ともに鳥瞰図が掲載されていますが、帝国書院のものは色合いもはっきりとし、見開きで大きく扱っています。その中に書き込みもあり生徒の興味関心を引きます。両者ともインターネットの活用や学習に活用できる資料の掲載などが多いです。

以上の結果、私は、1位を帝国書院、2位を東京書籍で推したいと思います。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

続きまして、浦井委員、お願いします。

○浦井委員 よろしくお願ひします。

私は、地図は、第1位を帝国書院とし、第2位を東京書籍とさせていただきます。
地図帳は、資料として副教材的に用いられるものですが、社会科のみに限らず、あらゆる教科で使えるものです。

帝国書院の地図は、色合いがクリアで、高低差などが見やすく感じました。ただ、その点につきましては、視覚的に鮮やかな配色が苦手な生徒などは、東京書籍の地図の方が見やすい色合いになっているかもしれません。

形状につきましては、帝国書院は大判で多少重量はありますが、地図という特性上、広い地域を表示するためには、ある程度大きい紙面での表記が好ましいことは確かであり、日常的に持ち歩く教材ではないことから、問題はないと考えました。

また、帝国書院の地図は、特に比較を通して各地域の特色を把握し、その理解を深めることができるように工夫されていると感じました。たとえば、人口や自然についての主要素が、同じ縮尺で表示されており、一見して違いが分かるようになっています。また、世界と比較して、日本の位置関係や大きさなどを比較できるように、同じ緯度や同じ縮尺の地図が掲載されています。これは、とても分かりやすい工夫だと感じました。

さらに、高森委員も触れておられましたが、SDGsに結びつけたページを、7ページ分しっかりと取っており、この点も良いと考えました。

東京書籍の地図も、中学で学ぶ内容を整理し、さまざまな工夫をして分かりやすくまとめていると思いました。情報量も敢えて限ってまとめているように感じられ、中学3年間のみの学習を考えれば、非常に有効に使えるものと思います。

確かに教科書は、どれくらい多くの情報が詰められているかよりも、その時学ぶべきこと、教えるべきことが、分かりやすく簡潔に整理されている方が、使いやすい場合が多いかと思います。しかし一方で、私自身の考えといたしましては、他分野にわたって用いられる地図は、見やすさと使いやすさはもちろん、情報の多さも大切な要素だと考えます。中学で使用する地図は、普通の市街地図等と違い、さまざまな情報が載せられおり、できるならば中学卒業後も手元に持ち続け、活用していつもらえるものであってほしいと考えるところです。地図は、中学卒業後も長く使えるものであり、地名や国境の変化など時代を映す鏡となるものです。そのうえで、最終的に長く手元に置いて活用できる情報量がある方が良いと考えました。

以上のような理由から、私は、第1位を帝国書院、第2位を東京書籍とさせていただきます。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

垣内委員、お願ひします。

○垣内委員 地図については、他の社会の科目と同様、現代社会のあふれる情報の中から、課題解決に向けて有用な情報を適切に収集する技能を養うという点が非常に重要であろうというふうに認識しております。

その観点から、地図の作図などの関連情報を系統的に学習すること、そのための工夫がなされていることが大切であると思います。位置や空間などの広がりやを考慮し、地図上で捉えること、新旧の比較などを通して地図を読む、読み込むという、そういう知識・技能、さらには適切な情報を地図にまとめて主題図として作成する。作図能力といったようなものも育成することが必要不可欠であろうというふうに思います。さらに、読み取った情報を多面的に活用するという観点からは、調べたい内容がすぐに調べられる、こういったことを重視したいというふうに考えております。

この上で、2者比較いたしましたして、私は、第1位を帝国書院、第2位を東京書籍とさせていただきます。

ほかの委員もおっしゃっていましたが、帝国書院は主題図が多くて、多角的に学べるという工夫が、より東京書籍よりも多くなされているということ。それから、日本との結び付きや、関連する情報を示すことで、生徒の学びの広がりが期待できること、さらに様々な情報量が多いということによって、教員の教える側の力量や生徒のニーズに応じて、適切に順応に情報収集。あるいは、そのための学びができるというようなところを高く評価いたしております。

また、SDGsについても、非常に詳しい、丁寧なご説明があるという点も好ましく感じました。

以上、第1位が帝国書院、第2位が東京書籍です。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

地図の取扱いについては、中学校学習指導要領によれば、地理的分野においては、地図の読図・作図、景観写真の読み取り、地域に関する情報の収集や処理などの地理的技能を身に付けるに当たっては、系統性に留意して計画的に指導すること。その際、教科用図書、地図を十分に活用すること。また、歴史的分野においては、年表を活用した読み取りやまとめ、文献・図版などの多様な資料、地図などの活用を十分行うことと示されております。また公民的分野においても、地理的分野、及び歴史的分野の学習の成果を活用すると示されていることから、いずれの分野においても、地図は重要な役割を果たしていると言えます。

地図を活用する際に最も大切なことは、開きたい内容をすぐ見つけ、すぐに開くことができることだと考えます。その視点から、2者それぞれの教科書を比較・検討したところ、目次インデックスはそれぞれに工夫がなされておりましたが、帝国書院は世界のページ、日本のページ、統計のページなど、大まかなくくりでシンプルな色分けとなっており、生徒にとっては使いやすい教科書になっていると感じました。また、自然、農業、工業、人口、交通、歴史など、様々なテーマで地域の特徴を深めるようにした地図である。取材時のページについては、帝国書院は「日本との結びつき」というコーナーを適時設定し、関連資料が掲載されております。生徒が獲得してきた個別の知識同士を関連付けやすくする工夫であると考えました。

以上のことから、私、1位を帝国書院のみで推薦とさせていただきます。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてのご発言をいただきましたが、集計した結果について事務局に報告させます。

(集計)

○事務局 それでは、ただいまの集計結果について申し上げます。

第1位に帝国書院を推薦された方が5名、第2位に東京書籍を推薦された方が3名。

以上でございます。

○佐藤教育長 ただいまの集計結果のとおり、1位に帝国書院を挙げた方の数が5名と最も多く、過半数を超えております。このことにより、地図については、帝国書院に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見等はございますでしょうか。

よろしいですか。

(なし)

○佐藤教育長 それでは、地図については、帝国書院に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

○佐藤教育長 ご異議ございませんので、地図につきましては、帝国書院に仮決定いたしました。

数学

○佐藤教育長 続いて、数学についてご審議願います。発行者は7者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

神田委員から、時計回りの順にお願いします。

神田委員、お願いします。

○神田委員 数学は、数や図形などの基礎的な理解と技能を身に付けること、論理的に考察する力数学的な表現を用いて表現する力などを育成することが大切です。また、数学的な活動を通して学んだことを生活や学習に生かそうとすることが求められています。

①生徒の学力差に対応した内容か②思考力の育成が考えられているか③生活に生かそうとする工夫があるかの3点から見ていきました。

1点目についてです。学力調査の結果等で、本区の生徒は数学における学力の差があることが課題と言えます。そのため基礎的・基本的事項の確実な理解を図る工夫、常に振り返りや学び直しがある教科書が適していると思います。また、数学が得意な生徒のために、問題数が多いだけでなく、様々な問題が用意されているということも大切です。この観点で見ると、丁寧な扱っているのが教育出版と東京書籍です。

両者とも、中学校1年の最初の章は小学校の振り返りから始まっています。教育出版は10ページ、東京書籍は8ページです。

そして教育出版は巻末の資料に下学年との学習のつながりを表す「学びのマップ」が

設置されていて、『次の章を学習する前に』と連動しています。生徒が躓いても、いつでも学び直しができる仕組みになっています。

また、教育出版は章の中の「節」の流れも非常に丁寧です。（例1年89ページ）

「Q」があり、「例題」が来て、その例題の「たしかめ」、そして「問い」につながるようになっています。生徒が例題で躓いても、例題に類似した問題の「たしかめ」があるので生徒が確実に理解できるような作りになっています。

東京書籍はここを、「Q」があり、「例題」が来て、「問い」に入ります。

この「問い」の中で基本的な問題には♡（ハートマーク）がついています。

では、数学が得意な生徒への対応をどのようにしているかという観点で見ると、東京書籍はデジタルコンテンツが非常に多く、すべてのページに二次元コードが用意されています。その分、紙の教科書の問題数は少なめです。教育出版は、2次元コードの数はさほど多くないと思いました。その分、紙の教科書の問題掲載量は非常に多いと感じました。両社とも問題数は多いことがわかりましたが、紙で使用するかデジタルで使用するかの違いはあるかと思いますが、問題に直接アプローチできる教育出版のほうが良いのではないと思いました。

また、実力アップの問題をどのように配置しているのかという視点でも見てみました。東京書籍は章末でA問題とB問題という形で提示されています。それぞれの追加問題もDマークコンテンツとして用意されています。

教育出版も章末の（例2年183ページ）“章の問題”の中で基礎的な問題は「たしかめよう」で、応用的な問題は「力をのぼそう」「学んだことを活用しよう」という形で提示されています。応用的な問題の追加問題も巻末の補充問題/実力アップ問題で用意されています。

教育出版では、3年生の巻末260ページに「総合問題」とし入試問題などで問われる複合的な問題が掲載されています。

これは余談ですが、両社の「もくじ」の見やすさは教育出版のほうが丁寧だと感じます。章で学ぶ項目を詳しく明記していますので、生徒が探しやすいよう工夫がされていると思いました。各章で登場する「重要項目」に関しても、教育出版はオレンジページの色で目につきやすい工夫がされていますが、数学が苦手な生徒にとってはこのような配慮も重要だと思います。

2点目の思考力の育成からです。両社の「数学的な見方・考え方」に着目して見てみました。

教育出版は巻頭に4ページで『見方・考え方』が設置されていて、本章の中でも、なるほどマークの左に適宜表示されています。そして説明もあります。

例として1年29ページの最下段に「見方・考え方：条件や範囲をひろげて考える」と巻頭の説明ページと同じ文言が示されています。思考をするうえで、思考の手掛かりとなるものが教科書に設置されているということは重要な視点だと思います。

東京書籍も巻頭に教科書の緑虫眼鏡マークで大切にしたい見方や考え方として示していますが、本章の中ではマークだけが置かれていて説明がないため、生徒が重要な視点であることを見過ごしてしまいそうです。

3点目として生徒が学びを生活に生かそうとし、自分事ととらえられるのかという視点です。生徒に数学を学ぶ意義をとらえさせる・感じさせることは、学ぶ意欲にもつながる大事なことです。

教育出版は現行の教科書にもこの視点があります、すべての章の扉ページに、その章で学ぶ項目と社会・自然とのつながりに触れられています。例としまして、

1年 データの分析→スポーツアナリストという職業の紹介

2年 相似な図形 →都市模型と数学の関係

3年 連立方程式 →連立方程式を活用したCTスキャンの技術

さらに今回の教科書では、LINK!!が全ての章扉に新規に設置され、章を全て学んだあとに、コラムや問題などが用意されていて、学ぶ意欲と学んだことの定着がはかれる作りになっています。

東京書籍も章の扉ページはありますが、導入問題のイラストなどで構成されており、数学を学ぶ意義としては若干弱いと感じました。

以上のことから、1位は教育出版、2位は東京書籍で推したいと思います。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

浦井委員、お願いします。

○浦井委員 よろしくお願いします。

数学についてですが、どの出版社もやはり様々な工夫をなさっており、正直大変悩みましたが、私は第1位を東京書籍、第2位を数研出版、第3位を日本文教出版とさせていただきました。

小学校までの「算数」は、中学から「数学」という教科名になります。小学校の教科書採択の際にも触れたことですが、算数の目的は、日常的なことからを計算で正確に答えを出せるようになること。数学の目的は、日常的でない事象もふくめて、なぜそうなるのかを数字や記号を用いて論理的に説明できるようになること、というような違いがあるといえます。

したがって数学は、これまで小学校で学んできた算数の知識をベースに、さらに抽象的な概念を広げていく必要がありますが、これは苦手な生徒にとっては、大変難しいことです。とはいえ、中学までの義務教育終了後、就職や進学など、生徒たちがどのような進路を選ぶにせよ、中学で学んだ数学的思考と数学的な知識は、様々な場面で役立つはずで、そのためにも、少なくとも数学の授業や教科書が、生徒たちに苦手意識を抱かせやすいものであってはならないと思います。

数学は、得手不得手の差のつきやすく、同時に苦手と感じる生徒も多い教科だと思えます。それぞれのレベルに合わせた教え方をするのは難しいですが、苦手な生徒にとっても

分かりやすい内容であることを重視しました。

また、中学になると、途中式が重視されるようになります。これは、答えを導くまでの考え方を重んじるからですが、特に2年生で学ぶ連立方程式になると、解にたどりつくまでの作業量が非常に多くなります。私自身、今中学生の子供がおりますが、個人的には、こうした途中式の部分が、小学生の「算数」と中学生の「数学」のもっとも異なる部分であり、小学生まで算数が得意だった生徒が、中学生になって数学に苦手意識を抱く理由のひとつだと考えます。そこで、途中式の意味と書き方が、苦手な生徒にとっても分かりやすいよう、丁寧に説明してあるかどうかを重要視いたしました。

長くなりましたが、こうした考えの上で、第1位とした東京書籍は、問いが解けたらチェックボックス☑に印をつけて確認できるようにするなど、生徒が自ら学ぶために使いやすい工夫がされていると感じました。さらに、レイアウトが分かりやすく、QRコードも使いやすいものと感じました。QRコードによるデジタルコンテンツは、神田委員もご指摘の通り、数学の特異な生徒もさらにスキルアップできるなど、実力差のつきやすい数学という教科の難しい面を、うまく補えるものと考えました。くわえて、章末ごとに各単元で学習した内容を確認し、さらに深められるような工夫がもっとも丁寧にされていると感じました。

個人的に気になる点をひとつ挙げるとすれば、1年生の最初の単元です。個人的には、周囲の中学生や保護者の話を聞いても、自身の子供を見ても、中学に入学して初めての「数学」の授業で、これまであまり聞いたことのなかった「素数」の話が出てくるよりも、すでに耳にしている可能性の高い「プラス・マイナス」、つまり「正負の数」の話から入った方が、算数から数学へとレベルアップしたことへの抵抗感は弱いように感じました。ただ、東京書籍は、小学校で見慣れた九九表の決まりなどから導入し、算数から数学への接続に関する章も設けられており、大変丁寧な導入が行われていること。また、今年からしばらくは、アメリカでの「素数ゼミ」の多量発生がタイムリーにあるため、導入として良い効果があるかもしれないと考えました。

次に、第2位とした数研出版は、「ノートづくり方」として、ノートの取り方についてのページがあり、これが大変良いと感じました。他の者でもノートの取り方を取り上げているところはありませんでしたが、数研出版のものが、もっとも具体的で丁寧な説明であったように思います。数学に限ったことではありませんが、中学になると、内容が多なり、さらに複雑になることもあって、小学校の時以上にノートがうまく取れない生徒が一定数出てくるのではないかと思います。数学は、ノートは関係ないと思われがちですが、実際はそうではなく、自分の計算間違いや考え違いなどを整理するためにも、きちんとノートが取れていることは大切だと思います。

第3位とした日本文教出版は、「話し合おう」「説明できるかな？」など、言葉で説明をさせ、思考力を養う問いが設定されており、その点がとても素晴らしいと感じました。数学は、単なる計算の科目ではなく、思考力が必要となるからこそ、面白くもあり難しく

もあります。他の単元へ繋がる意味でも、思考力を養うための工夫は大変重要だと考えました。

学校図書は、今回順位には入れませんでした。各章で小学校との接続が分かりやすく示されており、この点は個人的にとっても分かりやすく感じましたので、その点、触れさせていただきます。

最後に、これも数学に限りませんが、最近はICTの活用により、授業の中で教員が、式や文章を一文字一文字板書せずに、一気にひとまとめで映し出すことが多くあるようです。これは、授業の効率化という面では良いことですが、板書をノートに写し取る生徒たちにとっては、ハードルが高く、場合によってはどこに新しい式や文字が追加されたのか、見逃して分からなくなってしまうこともあるかと思います。そのため、必要な式や内容の解説が、分かりやすく教科書に示されており、後から自分で確認できるような教科書であることが大切ではないかと思い、この点も評価に含めました。

以上のことを、総合的に考慮したうえで、私は第1位を東京書籍、第2位を数研出版、第3位を日本文教出版とさせていただきました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

続きまして、垣内委員をお願いします。

○垣内委員 数学的に考える資質・能力というのは、すべての学習においても非常に重要なものであるというふうに認識した上で、数学的に考えるということはどういうことかという、学習指導要領では、数量・図形などの基礎的な概念・原理などを理解し、数学的に解釈し、表現する能力。さらには、数学を活用して社会的な事象も含め論理的に考察する力。数量とか図形などの性質・特性を見出し、総合的・発展的に考察する力。数学的な表現を用いて様々な事象を関連付ける力というふうにされています。さらに、数学的活動の楽しさ、数字のよさというものを実感して、数学を生活や学習に生かそうとする態度。それから問題解決の過程を振り返って評価し、改善しようとする態度というものを養うことが重要とされています。

特に、小学校の算数から数学へと変わる、中学校の数学に関しては、この移行の中で、よりポジティブに学びに向かう、そういう姿勢を促すような、そういうテキストが望ましいというふうに考えました。

さらに本区の課題として、既に他の委員もご指摘の学力差への対応、それから、思考力の育成、そして最後に、数学を生活に生かすという観点から、このテキストの、それぞれの比較をさせていただきました。

私は、第1位が東京書籍で、第2位が日本文教出版であります。

東京書籍の場合は、まず最初に、「MATH CONNECT」ということで、数学とのつながりというものを非常に丁寧に説明しています。身の回りから社会、そしてつながる、見方を深める。さらに算数から数学、そしてICTですつながるといったような形で、学びに向かうためのメッセージとして、いぎないの導入部分を入れているというところも高く評価した

と思います。

さらに、演習問題については、知識や技能を身に付ける問題と、思考力や判断力・表現力を身に付ける問題に区別されている。その中で必ず解けるようになりたい問題にはマークが付けられているということで、学力差への対応だけではなくて、学力の定着と、それから進み具合によって、生徒が自らのニーズに合わせて勉強して、学んでいけるといような工夫がなされているというふうに考えました。

また、デジタルコンテンツにつきましても、非常に丁寧に、ほかの教科書もそうですが、二次元コードから視聴することができるわけですが、東京書籍の場合は、非常に丁寧に、多くの活動が提供されていて、非常に有効に活用できるのではないかと。これがまた主体的な学びにつながるのではないかとというふうに考えております。

第2位の日本文教出版、こちらも非常によくできた教科書で、章末に学んだ内容が身についているか確かめるための問題と、やや程度の高い問題、これは「取り組んでみよう」というふうに書かれていますが、こういったものが掲載されていること。それから、間違えたりしやすい問題にも「間違えやすい問題」というふうに明記されていること。こういった工夫によって、学力の定着と、それから主体的な学びができるのではないかとというふうに考えました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

数学科については、中学校学習指導要領によれば、数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成することが大切であると認識しております。論理的・統一的・発展的に考える力は、数学の授業だけではなく、日常や社会において問題を論理的に解決していく場面などでも広く生かされるものであり、生徒が将来社会に出た際に、賢明な意思決定や判断を行っていく上で必要不可欠な資質・能力と言えます。

しかしながら、近年の学力に関する様々な調査の結果からは、小学校から中学校に移行すると、数学の学習に対し肯定的な回答をする生徒の割合が低下する傾向にあり、課題ともなっております。

そこで私は、数学的活動の楽しさや数学のよさを実感して、粘り強く考え、通学を生活や学習に生かそうとする態度、問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする態度を養うという学びに向かう力、人間性等の涵養に特に着目して、7者それぞれの教科書を比較・検討をさせていただきました。多くの発行者では、章末のコラムや巻末の読み物として、他教科等々を関連させた問題や、身の回りに潜む数学の紹介、自由研究のテーマの例などが掲載されております。

一方で、垣内委員からのご意見もございましたが、東京書籍は「MATH CONNECT」、つまり数学のつながりを教科書全体を貫くテーマとして掲げ、六つのつながる「身のまわりとつながる」、「社会とつながる」、「つながりを深める」、「見方・考え方でつながる」、「算数・数学同士がつながる」、「ICTでつながる」に関する話題を豊富に提供しており、

生徒が数学の学習をしながら、関係事項とのつながりを理解し、興味・関心を高めることが期待できると考えました。

また、学びに向かう力の育成に絞って言えば、日本文教出版は、学びに向かう力を育てようというコーナーを設定されており、そこで使用する振り返りシートが巻末に付属しておりました。自分の学習を振り返って学習状況を客観的に把握し、次の学習へつなげることができるよう工夫されていると感じたところでございます。

以上のことから私は、1位、東京書籍、2位、日本文教出版を推薦させていただきます。以上でございます。

続きまして、高森委員、お願いします。

○高森委員 科目名「数学」・種目「数学」については、導入部分のオリエンテーションにおいて、数学を学ぶ意義・目的・方法が示されているか、具体的な学習の進め方、学習記録の取り方、レポートの書き方などが提示されているか、本編において、物事を筋道立てて考える論理的思考の大切さが示されているか、身の回りの問題解決にも数学的思考が役立つことが示されているか、問題、補充・発展学習、振り返り、まとめが適切に用意されているか、デジタル教材が効果的に活用されているかなどの視点で比較・検討し、私は一位に啓林館、2位に東京書籍を選びました。

推薦の理由ですが、まず導入部分のつくりについて、東京書籍は「大切にしたい数学の学び方」の中で、類推・帰納・演繹という数学的思考に基づいて、つかむ・見通す・解決する・振り返る・深めるの過程を重視して学習を進めることが提示され、0章「整数の性質」の冒頭で、「つかむ」から「深める」までのステップを踏まえた実例が示されています。

一方の啓林館は、各章が話し合い活動から開始される工夫が取られており、身の回りの数学的場面を話し合うところから始まり、「状況を整理し問題を解決しよう」「解決の見通しを立てて問題を解決しよう」「問題解決の過程を振り返って、気づいたことや、もっと調べたいことを話し合い、問題を深めよう」という3つのステップで、すり鉢状に学習を深めていくという特色があります。東京書籍のような従来型でロジカルな学習法とは異なり、学習者の興味関心をかき立てる工夫がとられていると感じました。

ノートやレポートの作り方について、東京書籍では、学習の記録法をアドバイスする「振り返りレポート」「数学マイノート」が各学年とも6・7ページに用意されています。なお、各学年巻末の「数学の自由研究」では、「レポートにまとめよう」において研究レポートの作成方法の具体的を例示して学ぶことができるようになっています。

一方、啓林館では、ノートの取り方が各学年とも8・9ページの見開きで用意されています。罫線の適切な使い方、余白の有効活用に始まり、板書の内容、教師の説明、他の生徒の発言などをどのように書き留めるかの具体例が示されていて大変参考になります。

また、巻末の「数学広場」には、各学年ともに見開きで「レポート例」のコーナーが用意され、こちらにも具体例を挙げて解説されています。レポートに盛り込む内容については、

東京書籍では、目的・方法・結果・考察・感想の5項目にとどまるのに対して、啓林館は動機・方法・結果・考察・感想・参考文献の6項目が整っているという点も評価したいです。

小問題や章末問題また巻末付録の補充問題は、2者ともに十分な質と量を担保していますが、啓林館では、巻末補充問題で「入試問題にチャレンジ」が第1学年から用意されているという特色があり、高校入試の予行演習を意識したつくりになっています。生徒たちも自分の学力の達成度を試す機会になるのかと思います。

次に、ふりかえり・まとめについて、東京書籍では、付録の「もっと数学をつなげよう」において、「数学の目で振り返ろう」「学びのベース」の中の「まとめ編」「1年の振り返り」「2年の振り返り」が用意されているのに加え、第3学年では「学びのマップ」のコンテンツを設けて、中学校3年間の学習の総まとめが用意されています。

一方、啓林館では、付録の「数学広場」に設けられている「学びをふりかえろう」が、まとめではなくて問題形式で構成されており、二次元コードから学習内容を振り返ることができます。公式や定理などのまとめは巻末に「1年生のまとめ」「2年生のまとめ」「3年生のまとめ」として用意されていますが、東京書籍のように中学校3年間の総まとめはありません。

発展学習のうち、生活に密接な題材については、今回選考に上がった教科用図書の中でも啓林館、東京書籍は内容・量ともに充実していました。啓林館では巻末付録の「学びをいかそう」において、第1学年では食品ロス、値引き特売、緊急地震速報、気候変動、第2学年ではトラック競技のスタート位置、身体活動量と健康、くじの当選確率、年間の大雨の発生状況、第3学年では鏡に物体が映る鏡像範囲、コピー機の拡大・縮小など、数学を用いた課題解決の事例を挙げ、数学が日常と密接な学問であることを理解できる内容が多く紹介されています。

一方、東京書籍のほうも、数学の関連教材を用意した「MATH CONNECT」の6項目のうち、「身のまわりとつながる」「社会とつながる」のアイコンで示されたコンテンツにおいて、行列の待ち時間予想、トラック競技のスタート位置、くじの当選確率、桜の開花日予想、鏡像範囲で割り出される自動車の死角などが、また巻末付録の「数学の自由研究」において、食品ロス、緊急地震速報、黄金比などが用意されています。

ただし、共通する題材として、例えば第1学年の視力検査で用いるランドルト環の学習、第3学年の大工道具の曲尺の学習で比較してみますと、啓林館はいずれも2ページ見開きを使って解説し、さらに計算問題まで用意されているのに対して、東京書籍はいずれも1ページに収め、ツールの紹介のみとなっているという違いはあります。

最後に、具体的な各単元の中身について、中学校3年間でステップアップ形式で学習していく「データの活用」を例に2者を比較してみたいと思います。

「データの活用」は、確定的な答えを導くことが困難な事象について、目的に応じてデータを収集・処理し、その傾向を読み取って統計的に問題解決する力を養うために欠かせ

ない学習となりますが、中学校の数学で学ぶ四つの領域、すなわち「数と式」「図形」「関数」「データの活用」の4領域の中では、最も生徒の苦手意識が強いとされるのが、この「データの活用」だと言われております。特に図形の定義や定理のように多用される専門用語が壁となっている傾向が強いです。

その点に着目して2者を比べると、啓林館は専門用語の「階級」「度数」「累積度数」「度数分布表」「ヒストグラム」「度数分布多角形」「代表値」「階級値」「相対度数」「累積相対度数」「四分因数」「四分範囲」「箱ひげ図」などの用語がページの囲みの中に太字で提示され、前後の学習活動の内容を引き立てています。東京書籍は本文中に太字で示されるのみで、文字情報に埋没してしまい、読み流してしまうため意識の中に定着しづらいという側面があります。

啓林館には、こうしたキーワードが目立つ工夫が随所に見られ、「データの活用」以外の領域においても、重要な公式・定義・定理などが青い囲み罫を用いて強調するかたちをとっています。東京書籍のほうも同様な囲み罫での強調が取られている例はありますが、啓林館はその点数が実に多いという特徴があります。こうした工夫は重要事項が文字情報に埋没せずに印象に残りやすく、後々読み返したときにも一目瞭然に目に飛び込んできますので、振り返り学習で最も大きく効果を発揮すると思います。

以上、両者ともに優れた部分には違いが見られますが、学力差の大きいとされる本区の課題を踏まえると、全体として、東京書籍は少しハードルが高いのではないかななどの理由もありまして、私は、1位に啓林館、2位に東京書籍を選びました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について事務局に報告させます。

(集計)

○事務局 それではただいまの集計結果について申し上げます。

第1位に東京書籍を推薦された方が3名、教育出版を推薦された方が1名、啓林館を推薦された方が1名。第2位に東京書籍を推薦された方が2名、日本文教出版を推薦された方が2名、数研出版を推薦された方が1名。第3位に日本文教出版を推薦された方が1名。

以上でございます。

○佐藤教育長 ただいまの集計結果のとおり、1位に東京書籍を挙げた方の数が3名と最も多く、過半数を超えております。

このことにより、数学については、東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、このことにつきまして附帯意見などございますでしょうか。

(なし)

○佐藤教育長 それでは、数学につきましては東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

○佐藤教育長 ご異議ございませんので、数学については東京書籍に仮決定いたしました。

理科

○佐藤教育長 続いて、理科についてご審議願います。発行者は5者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について順位をつけてご発言願います。

浦井委員から時計回りの順にお願いします。

○浦井委員 よろしく願います。

中学校の理科は、学習指導要領は、「自然の事物・現象に関わり、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察・実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象を科学的に探究するために必要な資質・能力を育成することを目指した」として改訂されています。したがって、理科の教科書には、取り扱う事物や現象がどのようなものであるか明確に示し、興味を持ちやすい形で提示されていること。具体的な実験の手順や過程が、分かりやすく示されていること。そして、考察への誘導が的確なこと、などが必要不可欠であると考えました。

いずれの出版者もそれぞれの良さや工夫がありましたが、そのうえで私は、第1位を東京書籍、第2位を教育出版、第3位を学校図書とさせていただきました。

科学的な知識はもちろん、科学的な見方や考え方は、社会で生きていく中で大切です。さまざまな現象に疑問を持つ姿勢と、探究する力を養うことによって、問題を明らかにし、それを解決する力を身に付けていくことができます。

東京書籍と学校図書は、QRコードが使いやすく感じました。また、この2者は、NHK for schoolの関連動画が見られるようになっております。NHK for schoolは、新学習指導要領に対応したさまざまなコンテンツが充実しており、小学校向けほどではありませんが、中・高向けのコンテンツもそれなりに充実し、実験動画やCGでの解説など、大変分かりやすいものとなっていると同時に、その教科への苦手意識をなくし、楽しく興味を持たせ、知識を広げることができるものだと思います。とはいえ、多くのコンテンツの中から、自分が学習している物を探し出すのが難しいという生徒もいるかと思っておりますので、関連動画への誘導があることで、どの動画を見れば良いかが分かるのは、大変良いのではないかと考えました。

各教科書共に、単元末には学習内容のまとめと問題をつけてあります。学校図書の用語を覚える問題も良いと思いましたが、単元末の問題のなかでは、私は教育出版の章末問題が一番使いやすく感じました。とくに、「要点と重要用語の整理」がしっかりしており、そのうえで「基本問題」と「活用問題」に分かれていることから、自分の学習度合いを測るには、一番使いやすくないのではないかと考えたためです。

観察や実験の結果を分析・考察させる過程については、東京書籍が丁寧で分かりやすいように感じました。また、東京書籍は今回から教科書を軽量化したとのことですが、小学校の理科の教科書とは違い、中学校の理科は覚える内容も増え、復習の際に読み返す必

要も増えると考え、軽量化は大変ありがたいと感じました。

中学校の理科は、物理・化学、そして生物・地学と、非常に幅広い分野を一気に学習します。本来楽しいはずの教科ですが、興味があって楽しく思える生徒もいれば、覚えることも多く、数学が苦手な生徒が物理に抵抗感を抱いたり、虫などが嫌いで生物が苦手と感じたりする生徒もいて、好き嫌いの分かれる教科ではないかと思えます。単なる暗記科目になることのないよう興味を持たせ、分析力や考察力を養い、それと同時に分析や考察の重要性、そして何より楽しさを感じてもらえることが大切です。

このような観点から、物理・化学・生物・地学のどの単元でも使いやすく、教えやすいものであることを最も重視し、総合的に考えました結果、第1位を東京書籍、第2位・第3位は迷いましたが、第2位を教育出版、第2位を学校図書とさせていただきました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

引き続きまして、垣内委員、お願いします。

○垣内委員 理科は自然の事象・現象への理解と、科学理解と科学的探求のために必要な観察・実験などの基本的な技能を身につけるといことが非常に重要であります。同時に見通しを持って、つまり、何のためにどのような結果を予想して観察・実験を行うのかの目的をもって実践すること、それによって探究力を養うということも重要なのかと思えます。さらに、自然の事象・現象に進んで関わる、科学的に探究しようとする態度も必要ではないかというふうに考えております。

さらに本区の課題としては、理科は楽しくない、あるいはあまり好きじゃないという生徒さんもいらっしゃるというふうにお聞きしました。こういった観察や実験を通じて課題を発見し、解決する。そういう有用性と楽しみ、知的な刺激を受けることによって、理科に対する理解とともに、好きになるという、そういう姿勢を身につけることができるような教科書というものを私は重視したいというふうに考えております。

具体的には、観察・実験がきちんと全て示されているということと、そのプロセスから見通し、そしてその結果に至るまで、実際に体験できるということ。

それから二つ目は、学習内容の定着、有用性の実感、まとめなどのやり方が丁寧で分かりやすいということが重要かと考えました。

この視点から、各教科書を比較・検討しました。いずれの教科書の実験あるいは観察、そして安全に関わる事項も網羅されており、単元の学習の前後で考える課題が示されていると共に、巻末にはその定理、確かめ、活用問題といったものを掲載されています。また、デジタルコンテンツも各者非常に充実しているというふうに感じました。

その上で、第1位は東京書籍、第2位は教育出版といたしたいと思えます。

東京書籍は、それぞれの単元の扉に、学習の前後で考える課題が示された「Before & After」というものがあります。また、既存の学習事項を整理した、「これまでに学習したこと」のほかに、今後の見通しを整理した「この単元で学ぶこと」といったような非常に丁寧な学習の整理があり、これが学習へのいざないになっているということ。また章末

には、チェックするための問題も掲載され、学習した内容を日常生活や社会に広げて考える活動も設定されているというところは、高く評価いたしました。さらに内容のまとめりに、ほかの教科書もそうですが、ステップが示されていますが、東京書籍の場合は、より細かく、そしてより丁寧に示すことによって、興味関心のレベルの違う生徒さんにとっても分かりやすい、知識・技能の定着が図られるような仕組みになっているのではないかというふうに考えたので、第1位とさせていただきます。

第2位の教育出版も非常によくできていて、特に専門的な内容をうまく説明しているなどという感じがいたしました。単元末には要点と重要用語の整理、基本問題、活用問題なども掲載されているところ、ほかの教科書もありますが、こちらの出版社のものはより優れているというふうに感じましたので、第2位とさせていただきます。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

私から理科について申し上げます。

理科については、中学校学習指導要領によれば、自然の事物・現象に関わり、理科の見方・考え方を働かせ、見通しを持って観察・実験を行うことなどを通して、自然の事物・現象を科学的に探求するために必要な資質・能力を育成することが大切であると認識しております。

持続可能な社会を作っていくためには、身の回りの事象から地球規模の環境までを視野に入れて、科学的な根拠に基づいて賢明な意思決定ができるような態度を身につける必要があります。理科はそこに大きく寄与する重要な教科であると言えます。

近年の国際調査においては、日本の生徒の理科が役立つ、楽しいとの回答が国際平均より低く、理科の好きな子供が少ない状況を改善する必要があることが分かっております。そこで私は生徒が理科の面白さを感じたり、理解の有用性を認識したりするために、観察・実験を中心とした探究の過程を通じて課題を解決したり、新たな課題を発見したりすることに着目して、5者それぞれの教科書を比較・検討させていただきました。

どの発行者においても、内容のまとめりに学習過程が明記されておりますが、特に東京書籍は、問題発見・課題・仮説・構想と観察・実験までの学習過程が他者に比べて段階的に示されております。また、観察実験後には分析・解釈から、検討・改善となっております。他者においては考察とひとくくりになっている部分が、より具体的となっております。このように丁寧にステップを踏みながら学習過程に示されていると、生徒自身が教科書を手がかりにしながら、主体的に観察実験を進めていくことが期待できると考えられます。

また、理科の学習が日常生活や社会で役立つことを実感したり、そのことによって意欲が高まったりすることも重要です。東京書籍では、章末に学んだことをチェックするための章末問題だけではなく、学習した内容を日常生活や社会に広げて考える活動が設定をされております。

また教育出版では、学習内容を確認する「要点をチェック」だけではなく、学習内容を日常生活に活用することを促す、「学習後の私」が掲載されております。

以上のことから私は、1位、東京書籍、2位、教育出版を推薦させていただきます。

私からは以上です。

続きまして、高森委員、お願いいたします。

○高森委員 科目名「理科」・種目「理科」については、課題の把握・解決・追求という科学的探究プロセスが活動にしっかりと位置づけられているか、観測や実験地の安全面への配慮、器具・薬品の使用法の説明が充分になされているか、単元ごとのまとめや応用は工夫されているか、資料類やデジタル教材は充実しているかなどに着目しつつ、化学・生物学・物理学・地球科学の各分野の学習内容を比較いたしました。検討の結果、私は、1位に啓林館、2位に東京書籍を選びました。

導入部分のオリエンテーションについて、まず着目したのは、科学における探究の進め方、つまり科学的アプローチの方法についての概説です。2者ともそれらの全てのプロセスが過不足なく網羅され、各単元の活動も概ねこのプロセスに沿って展開します。具体的に、東京書籍では、扉の③と1ページの見開きで「問題発見」「課題」「仮説」「構想」「観察・実験」「分析・解釈」「検討・改善」「表現」「ふり返り」活用の順に整理され、このステップが本編ではどのように提示されているかの実例を2・3ページの「教科書の使い方をおさえよう」で紹介しています。啓林館でも、各学年オリエンテーションの④のページに示されている「疑問」「課題」「仮説」「計画」「観察」「結果」「考察」「表現」の8ステップに基づいて、⑤⑥の見開きページで教科書の使い方の説明がなされています。

こうしたプロセスは2者ともに、教科書の本編中にも、バナーやアイコンを駆使して提示され、自分たちの学習や活動が今どの段階にあるかが分かるように工夫されています。

導入部分で2者の際立った相違点は、啓林館には、各学年⑦⑧の見開きページに「ICTの活用」のガイダンスがあることです。教科書と端末の双方を効果的に活用することで、学習内容の確認、観察・実験の方法、学習を広げ、深め、振り返る活動など、学習効果を高める狙いがあります。

一方、東京書籍では、目次の前のページに「科学の本だな」、その前のページに考察の仕方、発表の仕方、議論の仕方、情報収集の仕方などのハウツーコラムが用意されています。これは啓林館にない特色となります。

東京書籍のほうのICT活用については、巻末の表3に、「デジタルコンテンツを活用しよう」のコーナーが用意されていますが、啓林館ほど詳細な解説はなく、付録的扱いになっていることは残念です。

さらに、理科の学習では欠かすことのできないレポートの書き方について、啓林館は各学年ごとに、単元の要所要所に「わたしのレポート」のページが用意され、具体的な事例を提示して学習できる工夫がされています。

一方、東京書籍は、第2学年18ページ、第3学年14ページの2か所のみでレポートの書き方のガイドが用意されるだけで、ほかには第3学年273ページの「私のレポート」のように、

レポートの見本事例が示されることはありますが、それ以外には見られません。

観察や実験時の安全面への配慮について、啓林館では、「サイエンス資料」のページで「実験を正しく安全に進めるために」が用意され、また、各実験のページには、右上に換気・廃液処理・感電注意・火傷注意などの注意喚起アイコンが提示されています。実験器具の使用法についても、「サイエンス資料」のページで、顕微鏡・ガスバーナーなどの使い方がトピックで用意され、その他の実験器具は、個々の実験・観察・観測のページ内でその都度解説されています。

一方、東京書籍では、安全面の配慮について、理科室のきまり、薬品の扱い方が巻末に用意され、また各実験のページには、「安全のための注意」アイコンで注意事項の呼びかけをしています。

実験器具の使用法については、「基礎操作」のページで、実験器具一覧、・顕微鏡・天体望遠鏡・ガスバーナー・電気分解装置・電流計・電圧計・メスシリンダーなどの使い方が用意されています。安全管理や器具の使用法については、そのほとんどが巻末にまとめられている東京書籍のほうが、後で読み返したときには見つけやすいという利点があります。

次に、単元ごとの構成、まとめや応用、資料類やデジタル教材について比較しますと、まず単元の構成で注目したいのは東京書籍で、各単元の冒頭に「これまでに学んだこと」「この単元で学ぶこと」が1ページ用意され、既習事項の確認と単元学習の見通しが立てやすいという点です。このコンテンツは啓林館に見られませんでした。また、東京書籍では各章ごとの「章末のまとめ」、各単元ごとに2ページ用意された「学習内容の整理」はよくまとめられ、図版を多用し、キーワードの出典ページも明記されるなど、他者にはない工夫が見られます。

また、問題集となる「確かめ問題」が2ページ、「活用問題」1ページも、中間・期末考查などを想定したような作りになっています。一方の啓林館は、各章末に振り返りを促す「Review」、各単元末に「学習のまとめ」が2ページ、問題集として「力だめし」が3ページ配置され、また各学年の巻末には、「学年末総合問題」が2ページ、さらに、第3学年でこれらに加えて「中学校総合問題」が2ページ用意されています。東京書籍には総合問題の類いはありません。

なお、デジタル教材については、啓林館も東京書籍も外部リンクばかりに頼るのではなくて、各社独自で作成したコンテンツが用意されています。

学習の発展性について、啓林館、東京書籍ともに「発展」のコラムは充実しており、ことに第3学年では、高校での学習を見据えたものも散見されます。具体的に、啓林館では、31ページに高校生物の「相似器官」、130ページに高校化学の「イオン化傾向」、233ページに高校物理の「放射性同位体年代測定」などが、また、東京書籍では57ページに高校化学の「イオン化傾向」、91ページに高校生物の「ヒトの生殖機能」、105ページに高校生物の「DNA」、173ページに高校物理の「位置エネルギーと運動エネルギー」、223ページ

に高校地学の「潮汐と月の引力」など、各者特色のあるトピックを用意しておりますが、特に東京書籍はその点数が多いという特徴があります。最後に一点だけ、内容の比較について述べたいと思います。中学校で学習する教科の中で、人類の未解決の課題について考える教科の代表格が社会科、理科、技術、道徳だと思えます。特に理科では、第3学年最後に学習する理科第2分野の「科学技術と人間」「自然と人間」がこれからの世界を生きていく次世代にとっては重要な学びになります。

そこで、東京書籍第5単元での「地球と私たちの未来のために」と、啓林館の「環境」の単元の「自然と人間」に着目したいと思います。

取り扱うテーマは、生態系・環境・科学技術、・持続可能社会と多岐にわたり、学ぶ順序、押さえるポイントが両者それぞれに特徴があります。啓林館は生態系の学習の後に科学技術の環境への影響、自然環境の保全、人類の活動と環境破壊、持続可能な社会という流れであるのに対して、東京書籍は、生態系の学習から自然環境の保全、科学技術の環境への影響と続き、持続可能な社会のチャプターに人類の活動と環境破壊が含まれるという流れで組まれているため、テーマが前後せずに一貫して、滑らかに学習が展開しているよう印象を受けます。ただし個別の内容を確認すると、マイクロプラスチック、脱炭酸カーボンニュートラル、使用済み核燃料、再生可能エネルギー、気候変動、地球温暖化、大気汚染、オゾン層破壊、水質汚染、自然災害、生態系破壊などの多様なテーマが取り扱われているのは啓林館のほうで、また、啓林館では、科学技術がもたらす恩恵について、第3学年の274・275ページの見開きを使って「未来を変える科学技術」のコンテンツが用意され、環境・福祉・資源・宇宙開発・海洋開発・防災減災の各項目で具体例を挙げて解説されている点が評価できます。

地域の自然災害を学ぶコーナーでは、啓林館は第3学年の284ページから4ページを使って、東京書籍では第3学年272ページから4ページを使って、それぞれ学習が用意されていますが、啓林館では土石流・火砕流・津波などの災害の影響が及ぶまでの時間や、地震・津波・大雨などの災害情報が伝達されるまでの経緯を図を使って紹介されていたり、防災・減災のための地域の取組が具体的に示されている点など、東京書籍には見られないコンテンツが充実しています。

この他、東京書籍では第3学年の292ページに人工知能AIの解説がありますが、啓林館では第3学年の273ページに、人工知能に加えて仮想現実VRについても触れています。

以上、分析・検討の結果、いずれも優劣をつけ難いところではありますが、私は、1位に啓林館、2位に東京書籍を選びました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

神田委員、お願いいたします。

○神田委員 理科の学習は、見通しをもって観察や実験を行うことを通して、自然の事象や現象を科学的に探究する力をつけることが必要です。理科観察・実験の充実、関心・意欲の向上、指導力の向上、基礎学力の定着を図ることで、台東区では理科好きな生徒を

育てることが求められています。

そこで、①興味をもって学習の取り組めるという視点②実験や観察の指導がしやすい、実験や観察の指導では実験の仕方や安全面での指導が十分なされているか。③理科好きな生徒を育てる工夫と学力の定着という視点から比べさせていただきました。

1点目の「興味をもって学習に取り組めるか」についてです。

教育出版社、東京書籍共に興味をもって学習に取り組めるように工夫されています。教育出版では、「探究の進め方」を巻頭に配置し、疑問から探究する流れや話題が示されています。折込みになっているので、いつでも開いて学習過程を確かめることができます。東京書籍では、学習の前後で考える課題が「Before&After」で示されています。「この単元で学ぶこと」としてこれまで学習してきたことと、この単元で学ぶことが示されています。単元の流れ、ワークシート、器具の使い方、資料等のデジタルコンテンツが充実しています。

どちらも主体的に学習できる工夫が見られました。前回の選定の時は、東京書籍の美しい表紙に目を奪われた記憶があるのですが、今回は、教育出版の表紙のデザインが優れていると感じました。

2点目の、「実験や観察がしやすい」「実験の仕方が分かりやすい」「安全面での配慮がなされているか」についてです。

実験観察を進めていくうえで重要なのは、生徒が、「今、自分が何をしているのか・次に何をすべきなのか」という学習過程を意識しながら活動ができる構成になっているかという点です。

実験観察については、両社それぞれ問題解決のステップに合うような流れで構成されており、それぞれ主体的に学習できる工夫を感じました。

東京書籍では巻頭「探究の流れを確認しよう」では、実際の活動例とともに流れを提示していて、工夫されているなど感じました。

教育出版では「探究の進め方」で学習の流れをわかりやすく提示されています。

どちらの教科書も工夫されていると感じたのですが、教育出版には、「探究の流れ」の中で立ち止まって戻ることも記載されており、「実験には進んでみたものの、仮説が間違っていたり、思い通りにいかなかったりしたときにはどこに戻って考え直すのか」という視点も盛り込まれています。今行っていることが間違いだと気づき戻れることを示唆している部分は評価できると感じました。

次に、実験の安全性についてです。

中学校の理科では、実験の際に扱いを注意しなければ危険な薬品や器具などが登場します。もちろん授業中に先生が指導を行います。教科書でもしっかりと扱ってほしいところです。

東京書籍では1年生のみ巻頭で掲載で、2・3年生では巻末に掲載しています。2・3年生は、「理科室の使い方」が1年生より少なめに掲載されています。どの学年でも巻頭で

注意喚起をした方が良いように感じます。教科書内での注意書きももう少し目立つようにする方がよいと思いました。

特に気になりましたのが、1年生85ページの「白い粉末の区別」の実験です。この実験はいくつかの白い粉を分類する学習です。今後の人生において、こういったわからない物質に遭遇する機会は出てくると思われます。87ページのステップ2の実験方法の例1では、白い粉の『触り心地』や『におい』を確認しています。この実験は授業の中で行っており、また調味料を使っているので問題はないですが、社会に出て「わからない物質」を判断する際に『触る』、『においを嗅ぐ』ということに違和感を覚えました。

続いて教育出版です。理科室の安全性については、全学年巻頭ページにあり、全学年で万が一の応急処置方法を掲載しているなど、安全に気を使っていると感じました。また、教科書本文内では、絶対にしてはいけないことには禁止マークと下地を黄色にして記載しており、生徒が常に意識できるように工夫されていました。さらに、注意に関しては危険マークとともに文字の色を変えて記載しています。安全性に配慮していると感じました。さらに、先ほど述べた東京書籍と同様の『区別のつかない白い粉（調味料）の分類』の実験についてですが、こちらの教科書では、手ざわりやにおいの確認はありません。さらに、白い粉を溶かした水溶液にも触ってしまったらすぐ洗うようにという注意書きもありました。

この実験の前に課題や仮説を考えるページでは、75・76ページと2か所で「性質のわからない物質を扱う際には手ざわりやにおい、味を調べることは絶対にしてはいけない」という注意があり、社会生活を送るうえで出合う可能性のある「不確かなもの」を想定した注意が掲載されています。

最後に、3点目の理科好きの生徒育成と学力の定着についてです。

構成や内容に、実生活への接続や学力の定着に資する内容となっているのかという視点で見ってみました。

実生活への接続については、コラムなどで確認してみましたが、両社ともに様々な種類のコラムが充実しており、大人が読んでも理科を学ぶことの大切さや面白さに出会える内容になっていると感じました。

学力の定着に関してですが、中学校の理科では、算数・数学の力が必要になる単元が多数存在します。そういった単元で数学ができずに理科が嫌いになってしまう生徒も多いと伺います。

教育出版では、巻末（1年274ページ）にて『理科で使う算数・数学』という資料があり、算数・数学が苦手な生徒にとっては復習をする機会にもなり、これは有益な資料だと感じました。

次に章末問題に関してですが、どちらの教科書も各章の終わりにその章の要点を確認できるコーナーがあり、東京書籍は穴埋め形式、教育出版はチェック形式で掲載されています。どちらもデジタルコンテンツを見るとフラッシュカードの様なコンテンツで確認チ

ェックできるので、章末問題に関しては両社とも定着がはかれると感じました。

私は、1位に教育出版を、2位に東京書籍を推したいと思います。

○佐藤教育長 ありがとうございます

ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果につきまして事務局に報告をさせます。

(集計)

○事務局 それでは、ただいまの集計結果について申し上げます。

第1位に東京書籍を推薦された方が3名、啓林館を推薦された方が1名、教育出版を推薦された方が1名。第2位に教育出版を推薦された方が3名、東京書籍を推薦された方が2名。第3位に学校図書を推薦された方が1名。

以上でございます。

○佐藤教育長 ただいまの集計結果のとおり、1位に東京書籍を挙げた方の数が3名と最も多く、過半数を超えております。

このことにより、理科については、東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、このことにつきまして附帯意見などございますでしょうか。

(なし)

○佐藤教育長 それでは、理科については東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

○佐藤教育長 ご異議ございませんので、理科については東京書籍に仮決定いたしました。

音楽(一般)

○佐藤教育長 続いて、音楽(一般)についてご審議願います。発行者は2者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

垣内委員から時計回りの順にお願いいたします。

垣内委員、お願いします。

○垣内委員 音楽につきましては、学習指導要領では、表現及び鑑賞の幅広い活動を通じて、音楽的な見方・考え方を働かせた学習活動によって、生活や社会の中の音、音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するということになっております。そのために必要な技能、そして音楽表現の工夫、また、音楽を愛好する心情を育むということが大切かと思えます。

具体的には、3点ほど着目しました。1つは、活動の充実です。主体的に実践することによって様々な技能の定着、そして表現の工夫、その先の音楽を愛好する心情を育むことにつながるというふうに考えました。

2つ目は系統的な指導。学びの流れがスムーズであって、構造化されているということ

が重要かと思いました。さらに、実践という観点から、タブレットの有効活用にも着目いたしました。

以上の3点に着目しながら、2者の教科書を比較・検討させていただきました。

いずれの教科書も合唱、創作、鑑賞といった系統的な学びになっていること、それから小学校における学習状況、各学年の発達段階を考慮した無理のないものになっていること、また教材の内容も非常に充実しているというふうに拝見いたしました。和楽器の写真なども豊富に掲載されておりまして、二次元コードによって、合唱曲の伴奏を聞くことができるといったような工夫もあります。

その中で改めて順位をつけるということですが、第1位は、私は教育芸術社とさせていただきます。第2位の教育出版、こちらもいい教科書ですので、第2位とさせていただきます。

教育芸術社の場合は、巻末に発展事項というのでしょうか、音楽の約束とか音楽を形づくっている要素というものを使用することによって、基礎的・基本的な内容の確認や反復学習ができるよう配慮されていること、さらには、音楽を聞いてイメージと音楽自体を学び、そして創作につなげていくというような学習の流れをより意識した構成になっていること、これによって、教える側の教員の方も教えやすく、また、生徒の側も学びを深めることができるのではないかというふうに考えました。

どちらも素晴らしい教科書ではありますけれども、教育芸術社のほうが、よりスムーズな、系統的指導につながるのではないかというふうに考えましたので、教育芸術社を第1位とさせていただきます。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

私から音楽科についてお話しします。

音楽科については、中学校学習指導要領によれば、表現及び鑑賞の活動を通して、音楽愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力・豊かな情操を養うことが大切であると認識しております。

子供たちの豊かな心を育む上で、音楽学習はとても大切な役割を果たしている教科であると言えます。

2者それぞれの内容について比較・検討いたしました。歌唱、器楽、創作といった表現及び鑑賞に関する教材数は偏りなく掲載されております。私は学習指導要領でも強調されております、他者との協働による音楽表現につながる創作教材について着目いたしました。

2者とも創作教材が掲載されておりますが、特に教育芸術社につきましては、歌唱教材・鑑賞教材との関連が重視されている印象がございます。生徒の主体的な創作活動を促す構成になっております。さらに、教科書に掲載されているワークシートは、他者との協働を意識させる構成になっており、今後充実した活動を生み出すものであると考えました。

以上のことから私は、1位、教育芸術社、2位、教育出版を推薦させていただきます。

私からは以上です。

続きまして、高森委員、お願いいたします。

○高森委員 科目名「音楽科」・種目「音楽（一般）」については、1点目として、導入部分のオリエンテーションで音楽を学ぶ意義・目的は明記されているか、年間を通じた学習内容の見通しが概観できるかについて、2点目は発声法・旋律法・指揮法・楽譜記号の解説などの学習資料の充実度、3点目は、使用された楽曲・曲目のジャンル別バランスという3つの視点で比較・検討し、私は、1位に教育芸術社、2位に教育出版を選びました。

推薦の理由ですが、1点目の音楽を学ぶ意義・目的、学習内容の見通しに関して、教育芸術社は教科書冒頭4・5ページの「音楽ってなんだろう」、及び目次を挟んで8・9ページの「学習内容」においてそれぞれ詳述され、教科書がどのようなコンセプトのもとで編集されたかを読み取ることができる点で評価できます。一方の教育出版では、8・9ページの「学習MAP」において、目次に統合させる形で年間の学習内容が提示されますが、音楽を学ぶ意義・目的についての記述は管見の限り見当たりません。

2点目の学習資料の充実度について、教育芸術社、教育出版ともに歌唱・創作、鑑賞の3

つのカテゴリごとに実践的な学びのプログラムが設定されています。また、各学年ともに発声法・旋律方・指揮法・楽譜記号・音楽の構成要素の解説などの学習資料も充実しています。

音楽著作権に関する学習は、教育出版では2・3年生上巻の64・65ページのみとなる一方、教育芸術社は1年66・67ページと、2年・3年の下巻64・65ページとに記述があり、後者のほうが内容が充実しています。

なお、教育出版では1年の64ページ、2・3年下巻の64ページに、音楽作成アプリケーションソフトウェアを用いたコンピュータ音楽に関する説明が用意されており、学習者は新しい芸術表現のあり方に触れることができます。

二次元コードの活用については、教育芸術社の充実ぶりが目を引きます。ほぼ全ての奇数ページにコードが用意されているばかりでなく、特に秀逸なのは、巻末の「歌い継ごう日本の歌」と「心通う合唱」の全曲にピアノの伴奏を聞くことができる「カラピアノ」の二次元コードがあります。これは合唱練習を自宅でも行えるなどの活用が期待されます。

3点目の楽曲のジャンル構成について、2者ともに童謡、唱歌、交響曲、映画音楽、歌謡曲、雅楽、民謡、日本の古典音楽など幅広いジャンルから選曲がなされ、それぞれ、学習の目当てに応じて配当されていることが理解できます。

このうち教育出版は、教育芸術社に比べて曲目の数が多く、学習者に多様な音楽に触れる機会を提供したという見方もできますが、選択肢が多いために、限られた学習時間では消化不良となる可能性もあります。一方、教育芸術社は曲目のバランスがよく、教師が年間を通して意図的、かつ計画的に授業を組み立てやすい構成になっていると思われます。

以上の比較・検討を踏まえ、私は、1位に教育芸術社、2位に教育出版を選びました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

神田委員、お願いします。

○神田委員 音楽は表現と鑑賞の活動を通して学習します。学んだことを生かし、生活や社会の中で音楽を楽しみ、親しんでいく態度を育成することが大切です。①活動の充実が図れるか②学習指導要領に基づく系統的な学習ができるか③タブレットなどを活用して実際の音楽に触れることができるかについて見てきました。

教育芸術社、教育出版社ともに歌唱、創作、鑑賞がバランスよく配置されています。古典的な曲と新しい曲、日本の曲と海外の曲なども多様に取り上げられています。

教育芸術社は各教材において「学びのコンパス」を設定して、目標とする学習内容やその方法などが明確で、生徒が学びやすくなっています。また、歌唱、創作、鑑賞の内容とその系統については発達段階を考慮した無理のないものとなっています。歌唱からイメージをもたせ、創作につなげる配置、また取り上げている教材は、歌唱、創作、鑑賞ともに学びを深められる配置になっています。音楽を作ったり、指揮をしたりする活動が多く盛り込まれ、音楽を楽しみながら学ぶことができると思います。両者を比較すると教育芸術社の内容が若干高度に感じますが、音楽教育に力を入れている本区では適切な内容かと思います。

教育出版社は、学習マップで分かりますが、教材と学習内容の関連が分かる工夫がなされています。生徒が見通しをもって学習に臨むことができる点が評価できます。また指揮の学習については、説明が分かりやすくスモールステップで学べるように工夫されています。

最後に二次元コードについてですが、教育芸術社はほとんどの楽曲にカラピアノや資料が提示されており、実際の音源に触れ、旋律を聴いたり歌ったりすることができます。

私は、1位を教育芸術社、2位を教育出版社として推したいと思います。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

続きまして、浦委員お願いします。

○浦井委員 よろしくお願いします。

音楽は、技能だけでなく、豊かな情操を培うことも目的としています。候補となった2者は、どちらもどんな曲を使うかという選曲をはじめとして、中学生が音楽に興味を持ちやすく、学習しやすいよう、それぞれ工夫をされていると感じました。

ここ数年、コロナ禍により、合唱などの活動に支障があり、経験の少ない生徒もいること。さらに、教員のなかでもblankがあったり、未経験の場合があったりすることを考慮し、教員のスキルのあるなしにかかわらず、教員にとっても生徒にとっても教えやすく使いやすい内容であることを重視しました。

そのうえで、音楽（一般）については、私は、第1位を教育芸術社、第2位を教育出版社とさせていただきます。

先に述べました通り、教育芸術社・教育出版ともに、それぞれの工夫があると感

したが、比較してみますと、教材数が絞られ、より教えるべきものが厳選され、的確な順序で配置されている教育芸術社の方が、使いやすいと考えたためです。

今回、教科書展示会でのご意見に、教育芸術社の教科書で、令和5年度に使っているものよりも、考えさせる部分などの学習量が減っているというご指摘がありました。この点、確認し考慮する必要があると考え、現在使用している教科書との比較と確認をお願いいたしました。部分的には増やされた内容もあるなど、全体的な学習量は減ってはいないとのことでした。おそらく、部分的に整理されるなど、減らされた部分もあるのかと存じますが、全体の学習量や、考察などを広げる部分を削ったわけでないのであれば問題はないかと判断いたしました。

とはいえ、考えさせる部分などの学習量が少なくなることを危惧する意見があるのは当然かと思えます。学習量を減らすことなく、負担の少ない教科書を作ることは至難の業と分かったうえではありますが、あえて今回の教科書展示会でのご意見には触れておきたいと思えます。

さて、改めて私自身の具体的な意見となりますが、教育芸術社はQRコードで聴くことのできる曲が多く、他の委員からのご指摘にもありましたが、「からピアノ」というピアノ伴奏も聴けるようになっております。また、国歌である「君が代」についても伴奏のQRコードがあって、学びやすくしてあります。「君が代」については、保護者のなかには、「強制になるのではないか」などの懸念を抱かれる場合もあるかと思えますが、その点、同時に他国の国歌を尊重する姿勢を養うなどの工夫がしてあり、良いのではないかと感じました。

さらに日本の伝統的な音楽についてですが、教育出版が「郷土の音楽と芸能」として神田祭の「獅子舞」や浅草神社の「三社祭」を取り上げている点は、音楽の分野にとどまらず、歴史や文化・美術的な興味を広げさせるものとして、大変良いと感じました。特に、本区の三社祭が取り上げられているため、生徒の親近感もわくと思えました。

ただ、これは考え方によっては思いますが、「音楽」という意味でいうのであれば、「舞」や「祭り」などに気をとられず、純粹に音楽として目を向けられるという意味で、教育芸術社が52ページで取り上げている、雅楽の代表的な曲ともいえる「越天楽」の「平調」は、日本の伝統的な音律の一端に触れることができるようにしてある点でも、さらに良いのではないかと感じた次第です。

さらに、垣内委員も触れておられましたが、教育芸術社は、1年の巻末に、「音楽を形づくっている要素」「音楽の約束」として、基本となる楽典的なものをまとめてあります。これが、大変使いやすいのではないかと感じました。ページの通ごうもあるかと思えますが、できればこれは、2・3年の巻末にも入れていただくと、さらに使いやすくなるのではないかと感じた次第です。

また、教育芸術社は、「アジロ製本様式」を採用して、安全かつ丈夫で長持ちする製本になっています。音楽の教科書は、座学だけではなく、実践で立って手に持ったり、譜

面台に置いてめくったり、場合によっては立てかけて使ったりとイレギュラーな使い方をし、演奏中にページが戻らないよう強く押し広げたりすることも、多々あると想像されま
す。そのため、特に音楽の教科書には、丈夫な製本は大切なのではないかと考えました。

ここまで述べさせていただきましたような点から、教育芸術社の方がより使いやすく、
効果的な音楽教育がしやすいと考え、第1位を教育芸術社、第2位を教育出版とさせていた
だきました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結
果について事務局より報告させます。

(集計)

○事務局 それではただいまの集計結果について申し上げます。

第1位に教育芸術社を推薦された方が5名、第2位に教育出版を推薦された方が5名。

以上でございます。

○佐藤教育長 ただいまの集計結果のとおり、1位に教育芸術社を挙げた方の数が5名と最
も多く、過半数を超えております。

このことにより、音楽（一般）については、教育芸術社に仮決定させていただきたいと
思いますが、このことにつきまして附帯意見等はございますでしょうか。

(なし)

○佐藤教育長 それでは、音楽（一般）については教育芸術社に仮決定させていただきた
いと思いましたが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

○佐藤教育長 ご異議ございませんので、音楽（一般）については教育芸術社に仮決定い
たしました。

音楽（器楽合奏）

○佐藤教育長 続いて、音楽（器楽合奏）についてご審議願います。発行者は2者となっ
ております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

私委員から時計回りの順にお願いいたします。

私から音楽（器楽合奏）について申し上げます。

器楽分野については、中学校学習指導要領によれば、知識や技能を得たり生かしたりし
ながら、生徒が曲にふさわしい器楽表現、まとまりのある創作表現を創意工夫して取り組
むことが大切であると認識しております。

2者それぞれの内容について比較・検討いたしました。歌唱、器楽、音楽作りといっ
た表現、及び鑑賞に関する教材数は、偏りなく掲載をされております。

台東区内、区内には、琴の演奏を特色ある教育活動に位置づけている学校や、三味線の

演奏を部活動として取り組んでいる学校があるなど、和楽器の伝統を大切にしております。今回、このことから私は、和楽器の音楽を含めた我が国の音楽に着目をいたしました。

2者とも取り上げられておりますが、特に教育芸術社につきましては、日本の伝統音楽の楽器編成や、伝統の枠を超えて活躍する和楽器が資料として数多く掲載されております。

裏表紙にも郷土の祭りや芸能が掲載されており、我が国や郷土の伝統音楽に親しむ態度を養うことにつながる内容構成になっていると感じたところでございます。

以上の点から私は、1位、教育芸術社、2位、教育出版を推薦させていただきます。

私からは以上です。

続きまして、高森委員、お願いいたします。

○高森委員 科目名「音楽科」・種目「器楽合奏」については、1つ目は、教科書の導入で器楽を学ぶ意義がどのように示されているか。2つ目は、具体的な楽器の特色、奏法についてどのような記述がなされているか。3つ目は、実践的な楽器による表現法についてどのような記述がなされているかという3つの視点で比較・検討し、私は、1位に教育芸術社、2位に教育出版を選びました。

まず、導入部分の比較では、教育芸術社では、4・5ページの見開きの「音楽って何だろう」の中で、人類と大自然とを結びつける楽器の価値・存在意義・魅力について語り、8・9ページの見開きでは、目次とは別に教科書の学習内容が明示されています。楽器の持つ意義に気づかせ、学習の筋道を見通せる、こうした工夫は、教育出版にはない特色と言えます。

具体的な楽器の特色・奏法について見せ方の工夫では、2者ともに写真入りで丁寧に解説されており遜色はないのですが、例えば中学生が最も活用するであろうリコーダーの説明では、教育芸術社は12ページに不適切な扱い方の事例が示されるなど、教育出版にはない特徴が見られます。また、太鼓以外の打楽器について、教育出版は102ページに簡単に紹介するにとどまるのに対して、教育芸術社は63～67ページにかけて、使用法も含めて言及するなど、充実しています。

最後に、実践的な演奏の内容・表現法について、リコーダーを例に比較すると、教育芸術社はレッスン1から3というように段階を追って展開するのに対して、教育出版は、タンギング、サミングなどのテクニック主体の学習になっているという特色がありますが、学習のステップを踏むかたちの教育芸術社は、教員にとっても、学習者にとっても取り組みやすいという利点があるのではないかと思います。

以上の理由で、私は、1位に教育芸術社、2位に教育出版を選びました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

神田委員、お願いします。

○神田委員 器楽指導は自分が演奏したり、様々な器楽についてその音色を感じるなどして知識を身に付けたりすることが大切かと思えます。演奏する楽器に関しては演奏のポイントなどが分かりやすく示されているかということ、演奏が難しい楽器については写真や

イラストなどで分かりやすく紹介されているかということが大切になってくると思います。

教育芸術社、教育出版社ともに、楽器ごとに構成され、「学習のねらい」や「楽器の扱い方」が示されています。巻末にも基礎基本を確認したり反復練習ができたりするように配慮されています。

教育出版社はたくさんの曲を載せております。一方、教育芸術社は二次元コードを読み込んで伴奏や演奏方法を聴くことができるページ数が多いです。

教育芸術社は「学びのコンパス」で指導事項を押さえることができます。教育出版社は学びリンクと連動して学習を発展的に行うことができます。どちらも優れた教科書であると思いますが、私は、1位に教育芸術社を、2位に教育出版社を推したいと思います。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

浦井委員、お願いします。

○浦井委員 よろしくをお願いします。

器楽合奏は、楽器の基本的な知識や奏法を学ぶほか、器楽の演奏や、合奏することへの関心を高め、音楽に対する感性や情操を養うことが重要な目的だと思います。

候補となった2者は、どちらも良くまとめられ、工夫のある教科書だと思いますが、私は、第1位を教育芸術社、第2位を教育出版とさせていただきました。

コロナ禍は収まってきたとはいえ、リコーダーの演奏ができなかった期間があったことを考えると、まだまだその影響はあると思います。また、これまでよりは、習い事など学校外で楽器に触れる機会も少なかったかもしれません。楽器に触れる経験が少なかった生徒がある程度いること、さらに、音楽（一般）の方でも触れましたが、教員の中でもブランクがあったり、音楽の授業が未経験の場合があったりすることを考慮すると、教わる側・教える側双方にとって、やはり負担のない使いやすい内容であることが大切だと考えます。

教材数、この場合取り上げている曲数は、教育出版の方が多く、いろいろな曲に触れられるという点では良いかと思います。また、創作教材数を5つと複数挙げてあるのは好ましいと思いました。ただ、全体の教材数について言えば、昨今音楽も多様化し、譜面もネットやコンビニなど様々なツールで、好きな曲のものだけを比較的安価に手に入れて楽しむことができることを考えると、多くの曲を掲載するメリットよりも、教材数を絞っても限られた時間の授業の中で使いやすいものであることの方が、よりメリットが大きいと考えました。

教育芸術社は、全体的にレイアウトも見やすく、使いやすく感じました。また、取り上げられている楽器数も多く、生徒たちの興味の幅を広げることができるのではないかと思います。伴奏も多く、QRコードも活用しやすいものに感じます。

加えて、先ほど音楽（一般）の方でも触れましたが、器楽合奏の際の教科書の使い方を考えると、「アジロ製本様式」の丈夫な製本は、良いのではないかと考えました。

このように、より教えるべきものが厳選され、的確な順序で配置されている教育芸術社の

方が、使いやすいと考え、教育芸術社を第1位、教育出版を第2位とさせていただきます。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

垣内委員、お願いします。

○垣内委員 音楽は、その表現・鑑賞のための技能・知識を身につけるということだけでなく、表現・鑑賞学習に共通に必要な思考力、そして判断力、さらには表現力を身につけるということが重要であるというふうに認識しております。この中で、特に器楽に関しましては、実践と体験というのが非常に重要ではないかと思い、教員の方が、教えやすく、そして生徒の方の興味関心を引き付けられる工夫がなされていること、そしてより豊かな経験ができることに着目して、2者、比較・検討させていただきました。

いずれの教科書も非常によくできていて、教材自体が小学校における学習状況、それから世界各学年の発達段階も考慮された無理のないものであろうというふうに思われます。

また、3年間を見通した教材配置にもなっているし、楽器ごとに編成され、学習の狙いとか、扱い方、そして必要な楽曲も提示されて、丁寧に学ぶことができるというふうに思われます。

和楽器につきましても両者扱っていて非常に好ましく思われました。

ただ、教材につきましても、教育出版のほうが多いわけですけれども、その説明ぶりに関しては教育芸術社のほうがより細やかではないかというふうに感じました。

以上、総合いたしまして、私は、第1位、教育芸術社、第2位、教育出版とさせていただきます。

教育芸術社に関しましては、この学習の流れということがきちんと意識されているということだけでなく、伴奏や演奏方法の説明がより丁寧に、多くなされているということ、そしてレッスンごとに分かれて段階的に行うことができるということ。

和楽器に関しましては写真も大きく、丁寧に、より細やかな説明がなされているというところが評価できるかと思えます。

また、目次の次のページに学習内容が示されているというところも教えやすいのではないかと思います。

いずれも優れた教科書ですが、第1位は教育芸術社ということにしたいと思えます。

○佐藤教育長 ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について事務局より報告させます。

(集計)

○事務局 それではただいまの集計結果について申し上げます。

第1位に教育芸術社を推薦された方が5名、第2位に教育出版を推薦された方が4名。

以上でございます。

○佐藤教育長 ただいまの集計結果のとおり、1位に教育芸術社を挙げた方の数が5名と最も多く、過半数を超えております。

このことにより、音楽（器楽合奏）については、教育芸術社に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見等はございますでしょうか。

（なし）

○佐藤教育長 それでは、音楽（器楽合奏）については教育芸術社に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○佐藤教育長 ご異議ございませんので、音楽（器楽合奏）については教育芸術社に仮決定いたしました。

それでは、ここで15分程度休憩といたします。

再開は15時20分にいたします。再開は15時20分にいたします。

（休憩：15：05～15：20）

○佐藤教育長 休憩前に引き続き、会議を再開いたします。

美術

○佐藤教育長 美術についてご審議願います。発行者は3者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

高森委員から時計回りの順にお願いいたします。

高森委員、お願いします。

○高森委員 科目名「美術科」・種目「美術」については、オリエンテーション導入部分で美術を学ぶ意義が明確に示されているか、学習の進め方が3年間を通して体系化されているか、各単元の学びの目標設定が妥当か、教材のバリエーションや生徒作品の具体例が豊富か、デジタル教材が適切に活用されているか、学習者の興味・関心を引き出す工夫が見られるか、技法・図法などの学びを支える資料が充実しているかといった複眼的視点で比較・検討し、私は開隆堂を1位、日本文教出版を2位に選びたいと思います。

教科書の導入部分に関しては、2者とも数ページを割いて美術という教科の存在価値、学習の意義と筋道について丁寧に説明がなされています。特に開隆堂の1年では、「図画工作から美術へ」と、小学校から中学校への接続を意識した説明があり、より高い次元への学習へといざなう工夫がなされています。また、2者ともに各題材の冒頭には、「学習の目標」あるいは「学びの目標」といった目当てが提示され、観察・表現の態度や視点を意識させる工夫が見られます。

他教科とのリンクについては、日本文教出版や光村図書には、国語・数学・理科・社会・技術・家庭・道徳・学級活動など、複数の教科との関連性がフットノートに記載されていますが、一方の開隆堂には採用されていないようです。

次にデジタル教材の活用について、2者とも本編・資料編いずれも、ほぼ全てに二次元

コードが示され、必要に応じてデジタル教材へアクセスできるようになっています。特に巻末資料の図法や技法に関しては、動画で実際の動作・作業の様子を視聴することができ、効果的な活用が期待されます。教材の解説なども充実しており、教員の力量に左右されることがないので、着実な知識・技能の定着が見込まれます。

最後に実際に同じ題材を扱っている単元を2者で比較してみますと、開隆堂第1学年26・27ページ、日本文教出版第1学年24・25ページの「風神雷神図屏風」などは、開隆堂のほうが図版を大きく使い、文字情報が少ないといった特徴があります。作品の解説や鑑賞の視点などは、二次元コードの動画を閲覧すれば十分な内容になっているため、開隆堂は教科書に求められる機能とデジタルコンテンツが有している機能と使い分けて利用する工夫ができていたと感じました。

以上の比較・検討を踏まえ、私は開隆堂を1位、日本文教出版を2位に選びました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

神田委員、お願いします。

○神田委員 美術は表現と鑑賞の活動が中心となる学習です。表現では創造的な表現方法を工夫させるために多くの質の高い作品や身近な生徒作品が多く掲載されていることが大切です。また、発想を豊かにできるような指導のヒントが掲載させているかなどを考えました。

また、鑑賞では生徒の見方・感じ方を広げることのできる美術作品を掲載しているかなどが重要になります。そして、美術を愛好し感性を豊かにしていくことのできる情操教育につながるものであることが大切だと思います。このような視点で教科書を拝見しました。

美術の教科書では、写真や絵の色彩やデザインが美しいことが大切です。開隆堂は表紙がとにかく美しいです。1年と2・3年の2冊となっていますが、1年では、モザイクタイルの質感、2・3年ではゴッホの作品の油絵の質感がよく出ていて、触っても楽しいし、色彩も豊かで目を引きました。中の写真や絵は大きく、また色彩やデザイン性も優れていると感じました。「主体的・対話的で深い学び」及び「造形的な見方・考え方」を習得できるよう、題材のねらいや内容が分かりやすい紙面構成になっています。例えば、授業展開を意識した4ページ構成、育てたい資質・能力が分かる小見出し、他教科との関連を意識した題材などが評価されます。

また、多彩な鑑賞の仕方を提案しているので、対話的な学びをしながら、生徒が考えを深めることができると思います。美術を身近に感じられる掲載作品が多いのも特徴です。原寸大の掲示あり、豊かに想像することができそうです。授業で活用できるデジタルコンテンツも充実しています。

光村図書でも、授業の流れが分かる紙面構成となっており、主体的に学ぶことができるように工夫されています。鑑賞教材には学びを深めるヒントとしてオレンジの吹き出しで示しており、苦手な生徒でも意見がもてるようになっています。「みんなの工夫」にイ

ンタビュー動画が用意され、QRコードでは紙面に紹介できなかつた工夫点を見ることができます。

どちらも優れた教科書ではありますが、私は1位に開隆堂を、2位に光村図書を推したいと思います。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

浦井委員、お願いします。

○浦井委員 よろしく申し上げます。

美術は、美術文化へのかかわりを高め、豊かな感性を育んでいくことを目的としている教科です。まず、豊かな表現力を身に付けさせるために、さまざまな美術作品に触れることが重要です。

そういった意味で、台東区は、本物の美術作品に触れる機会の多く持てる稀有な地域です。しかし、その恩恵も、生徒たち自身が興味を持ち、活かさなければ意味がありません。台東区としての目標は、表現を豊かにし、感性を育むことであるとのことですが、そのためにも本物を見たいと思い、自分でも作ってみたいと思えるよう、興味の幅を広げていくことのできる教科書であることが大切だと考えました。

そのうえで私は、第1位を開隆堂、第2位を光村図書とさせていただきました。

開隆堂は、他の委員も触れていらっしゃいましたが、小学校の図画工作からの導入がしっかりとされており、また、何よりも掲載されている写真が、それぞれの美術作品の魅力をも十分に引き出しており、圧倒的に良いと感じました。また、これも他の委員がすでに指摘されておりましたが、表紙など装丁に、手で触れて楽しめるなど、美術への興味を深める工夫がされています。少々語弊がありますが、正直なところ個人的には、小学校の教科書に比べれば中学の教科書については、表紙のデザインはそこまで生徒のやる気に大きな意味を持つわけではないと考えております。しかし、こと美術の教科書につきましては、美術の教科書が美術的にすばらしいということに、大変意味があると思えました。美術は、ともすれば目で見えるものが中心となってしまうがちですが、触れて感じるものなどいろいろなものがあります。この表紙は、今回から採用されたものだと思いますが、表紙ひとつで美術の面白さを語るができているのは、素晴らしいと思います。

他にも開隆堂は、日本の伝統色や墨絵なども取り上げています。デジタルコンテンツも圧倒的に多く、総じて使いやすいのではないかと思います。

光村図書は、別冊の資料があり、「つくってみよう」「みてみよう」など、創作の幅を広げる工夫がされていると思えました。この別冊は、使いやすいのではないかと思います。

なお、光村図書と日本文教出版は、2・3年を上下に分冊しており、教える順序がしっかりと定まっている場合は、生徒たちの持ち運びの負担を減らすという意味で良いと思えました。ただ、美術の教科書が、日常的に持ち運ぶものではないこと。2・3年を通して、さまざまな作品を作る中で、合冊により少しでも多くのインスピレーションを刺激する作

品を目にできた方が良いと考えられること。この2点を考慮すれば、敢えて分冊する必要性は低く、分冊よりも合冊の方にメリットがあると考えました。

以上のように、全体を通して考えますと、開隆堂の教科書が、使いやすく非常に魅力のあるものとなっているのではないかと感じ、第1位を開隆堂、第2位を光村図書とさせていただきます。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

垣内委員、お願いします。

○垣内委員 美術は、表現・鑑賞活動を通じて造形的な見方を働かせ、生活や社会の中の美術、そして美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成することが大きな目的とされております。この中で、事象を捉えるための造形的な視点というものを理解すること、そして表現を創意工夫し創造的に表すこと、造形的な美しさ、表現の意図・工夫等について考え、豊かな発想や美術に対する感じ方を深めるといったようなことが重要と考えております。

また、創造活動の喜びとか、それを味わい、愛好する心情を育み、豊かな感性につなげていくということも非常に重要なことと考えております。

その上で特に本区の場合は、特に感性・創造力を養うこと、それと鑑賞するための能力の育成といくことも課題だというふうにお聞きしました。

以上の観点でこの3者、テキストを比較・対照いたしました。

いずれの教科書も非常によくできていて、学ぶ目標や、知識や技能に関する目標、そして発想や構想に関わる目標など、様々な角度から、学びの目標、そして流れを明示するといったような工夫がなされています。また、内容についても非常に豊かな教材がそれぞれ配置されていて、甲乙つけがたいところがございます。また、美術ですので、色彩が非常に重要なところですが、ここについてもユニバーサルデザインになっているというのは、全ての者に一貫する傾向かと思えます。

その上で、私は開隆堂を第1位、そして、光村図書を第2位というふうに考えました。

開隆堂は、ほかの委員の先生方もおっしゃいましたけれども、もう表紙から、その教材の持つビジュアル、それから質感と言うんですかね、手触り、その他、全ての五感を駆使してこの作品を味わうといったような、ビジュアルのインパクトを最大限に生かすような形での提示になっており、これによって学ぶ人たちを、生徒の関心を引き込むというようなことがなされているというふうに感じました。これによって、興味・関心を持ってもらうという意味で、他の者よりも優れたものというふうに思っております。

表紙につきましても、他の委員がおっしゃったように、モザイクタイルの質感であったり、美術の2・3ではゴッホ作品、こういったものに関して、絵の具を塗り重ねた筆跡というか、筆致についてまで思いをはせることができるというような工夫は、この開隆堂が随一のものではないかというふうに考えております。以上、多様な切り口から様々な表現を学ぶことができるという点で、第1位が開隆堂。

第2位の光村図書についても非常に優れた図書ですが、ここに先ほど申したよう

なインパクトという意味で、開隆堂が一步リードだというふうに感じました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

私から、美術について申し上げます。

美術科については、中学校学習指導要領によれば、表現及び鑑賞の幅広い活動を通して造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指すことが大切であると認識しております。

美術科では美しいものや、よりよいものに憧れ、それを求め続けようとする豊かな心の働きに重点が置かれております。これは知性、感性、特性などの調和の上に成り立ち、豊かな精神や人間としてのあり方・生き方に強く影響をしていくものでございます。

近年、イノベーションを生み出すためのアート思考の重要性が社会において注目されているように、生徒が将来、持続可能な社会のづくり手となっていくためには、豊かな創造性は必要不可欠でございます。豊かな創造性を育むためには、育成を目指す資質・能力の三つの柱を関連させながら、バランスよく育成することが重要だと考えております。そこで私は、感性や想像力等を豊かに働かせて、思考・判断し、表現したり鑑賞したりするなどの資質・能力を相互に関連させながら育成することができる紙面構成に着目して、3者それぞれの教科書を比較・検討させていただきました。

どの教科書も、表現及び鑑賞の活動において目指す目標が明確に示され、その実現に向けた学習活動の流れがイメージできる紙面構成となっております。特に開隆堂は、各題材において身につけたい力を、知識・技能、発想・構想、鑑賞に分けて明確化するとともに、学習過程と関連づけながら示しております。学習過程の中に知識・技能が位置づくことで、生徒は必要感を持って知識・技能を習得することができるとともに、その知識・技能によって自分の作品が成長したと実感することができると思います。

また、巻末に学びの資料の関連ページが示されており、生徒が必要なページを進んで、参照しながら学習を進める姿が期待できるものです。

また、光村図書は、表現と鑑賞より関連付けた題材構成となっております。題材の導入では、手がかりとなる作品を鑑賞する活動が設定されるとともに、形や色彩、材料など、作品を鑑賞するときに着目すべきポイントが、問いかけの形式で示されており、そこで気づいたことを次の表現の活動に生かすという構成になっており、学習指導要領において、共通事項として示された指導事項を、より効果的に身につけることができると感じたところでございます。

以上のことから、私は、1位、開隆堂、2位、光村図書を推薦させていただきます。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局に報告をさせます。

(集計)

○事務局 それではただいまの集計結果について申し上げます。

第1位に開隆堂出版を推薦された方が5名。第2位に光村図書を推薦された方が4名、日本

文教出版を推薦された方が1名。

以上でございます。

○佐藤教育長 ただいまの集計結果のとおり、1位に開隆堂出版を挙げた方の数が5名と、過半数を超えております。

このことにより、美術については、開隆堂出版に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見などございますでしょうか。

(なし)

○佐藤教育長 それでは、美術については開隆堂出版に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

○佐藤教育長 ご異議ございませんので、美術については開隆堂出版に仮決定いたしました。

保健体育

○佐藤教育長 続いて、保健体育についてご審議願います。発行者は4者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

神田委員から時計回りの順にお願いいたします。

○神田委員 保健体育では、生涯にわたって心身の健康を維持しながら、スポーツライフを実現していく能力を育成することが大切です。

教科書を選ぶ視点ですが、①何を学ぶのかが明確に示していること、②健康を維持するための知識や技能を分かりやすく説明しているか、③生涯にわたって実践的な力をもつことを意識している内容かを考えました。

東京書籍は、見開きを1単元時間として、「見つける」「学習課題」「課題の解決」「広げる」というステップで学習の流れが分かる構成になっています。生徒が見通しをもって何を学ぶのか、どのように学ぶのかが明確になります。

また、健康を維持するための知識や技能をQRコンテンツから見ることができ、理解を深めることができます。

巻末にはスキルブックが設けられ、命や健康を守るために必要なことを確認しながら日常生活を送るなど、生涯にわたって役に立つように工夫されています。

大日本図書の紙面は、左ページに本文を、右ページには資料を載せるという分かりやすい構成です。「つかもう」「話し合ってみよう」「活用して深めよう」という学習の流れが示されています。多様性や感染症など現代的な課題についても取り上げられています。

どちらも優れた教科書ですが、私は1位に東京書籍、2位に大日本図書を推したいと思います。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

次に、浦井委員、お願いします。

○浦井委員 よろしくをお願いします。

保健体育は、他の教科でも触れました通り、思春期真っ只中という微妙な年頃の中学生にとって、大変重要な教科だと思います。近年、子供の身体的成長が非常に早く、一昔前には中学からと言われていた二次性徴も、小学生高学年には多くの子供たちに現れてきており、思春期に突入する時期も早まりました。かといって、精神的に成熟するかといえ、なかなかそういうわけにもいきませんので、精神的には幼いまま二次性徴や思春期を迎え、非常にアンバランスなまま中学という時期を過ごしている生徒も多いと思います。一方、生徒たちの性に関する知識などは、ネットなどの普及もあって、きちんとしたフォローがされないまま深まってしまっていると言えらると思います。そうしたなか、不安定な心と体を理解し、大人になっていく中で正しい知識を身に着けるためにも、保健体育の授業は、いっそう重要なものとなっていると思います。

候補となった教科書はそれぞれの良さがありましたが、私は第1位を東京書籍、第2位を大日本図書をとさせていただきました。

まず、東京書籍の特徴として、保健編が体育編よりも先に掲載されているという点が挙げられると思います。保健と体育と、重要さに差があるわけではありませぬし、内容的には相互に関連したものです。当然のことながら、他の3者は敢えて体育編を前に出されているものと思います。ただ、やはり教科書として使用するの、座学となる保健編が中心になるといいますし、「保健体育」という教科名からも、個人的には保健編が先にある方が自然に感じました。

また、東京書籍は、スポーツの多様性や学び方なども、わかりやすくまとめられており、学びやすい印象を受けました。

大日本図書は、実技についてのページが多く、充実しているところは良いと思いましたが、他者の教科書と比較して、少しばかり重いようにも思いましたが、保健体育の教科書は、日常的に持ち歩くものではないことを考えれば、その点は問題ないかと思ひます。ただ、比較いたしますと、より東京書籍の方が、実技などについても少ないページでしっかりとまとまっており、デジタルコンテンツもしっかりとしていることから、授業で用いるには総じて使いやすいのではないかと考えた次第です。

以上のような理由から、私は、第1位を東京書籍、第2位を大日本図書とさせていただきます。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

垣内委員、お願いします。

○垣内委員 保健体育は、学習指導要領によると、運動特性に応じた機能、個人生活の健康・安全についての理解、基本的な技能を身につけるということ、運動・健康について課題を発見し、合理的な解決に向けて思考し、判断し、他者に伝える力を養うこと、そして運動に親しみ健康の保持増進と体力向上を目指し、明るく豊かな生活を営む、そういう態

度を養うということとなっております。

このことから、生涯にわたるスポーツライフを送るための体力向上、そして具体的には、する、見る、知るといったような実践的な要素が非常に重要であるということ。また、保健については、疾病を防ぎ、健康に配慮した生活の質の向上につなげるということが重要であると考えております。

具体的には実技、あるいは実践につながるかどうか。そしてそのために資料として二次元コードの活用といったようなことにも着目して各者の教科書を拝見いたしました。いずれの教科書も、教科書によって差はありますが、発問、日常生活や経験を基にした発問から始める学びの流れであったり、学習のまとめが最後であったり、また、学びの流れを見通せるような構造化がなされ、様々な工夫がされているというふうに思いました。また、大体見開きで1単位になる。あるいは教科書の使い方、1時間の学習の主な流れが説明されているといったようなテキストもあります。

こういった中で各者比較いたしましたして、私は東京書籍を第1位、第2位を大日本図書とさせていただきますと思います。

東京書籍については、小学校の振り返りがあり、発達段階に合わせた内容になっているという点がまず一つあります。またさらに先ほども申しましたが、日常生活や体験を基にした発問があり、主体的に考え、学ぶ機会につながるのではないかとこの点にも思いますが、二次元コードにアクセスして見ることができるデジタルコンテンツも非常に充実しているというところも評価したいと思います。

東京書籍に関しましては、先ほどほかの委員もおっしゃいましたが、保健編が体育編の先に掲載されていますが、ここについても問題ないと思います。また、全体的にこの東京書籍では、体育は若干少ないものの、体力に関する記載は多く、充実していて、多様性とか安全とか情報、災害対応なども満遍なく示されているという点で、非常によく構成されていると思います。

なので、体育編が先に来なくても、非常に充実した、また教える側にとっても教えやすい、そういう教科書であろうと思います。

第2位の大日本図書に関しましても、非常によくできていて、1ページの半分が資料であるといったような形で、資料を読み取りながら話し合ったり、考えたりできるようになるという意味で、主体的な学びにつながるのではないかとこの点にも期待できるかと思えますけれども、満遍なく教材が配置されている、内容が非常に充実しているという点で、東京書籍が第1位だということになります。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

私から、保健体育について申し上げます。

保健体育につきましては、中学校学習指導要領によれば、体育や保健の見方、考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資

質・能力を育成することが大切であると認識しております。

しかしながら、取得した知識や技能を活用して課題解決することや、学習したことを相手に分かりやすく伝えること、日常的に運動する生徒とそうでない生徒の二極化傾向が見られることなどに課題があることが、一方では指摘されております。

また、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育むことの大切さが強調され、資質・能力の育成に向けては課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して育成を目指す、資質・能力の三つの柱を相互に関連させて、高めることが重要であるとされております。

そこで私は、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた工夫について、特に注目して、4者それぞれの教科書を比較・検討させていただきました。

全ての発行者において章の構成と1時間の学習の主な流れが全ての単元を通じて統一されております。その中でも大日本図書は1時間の学習の主な流れを、「学習のねらい」、「つかもう」、「やってみよう」、「話し合ってみよう」、「調べてみよう」、「活用して深めよう」と進めることが示されており、基本的な技能を身につけること、他者に伝える力を養うこと、明るく豊かな生活を営む態度を養うことができるよう工夫されております。

また、デジタルコンテンツも全ての発行者において扱いがございましたが、東京書籍は学習内容に関するデジタルコンテンツを示されるとともに、さらに「新編新しい保健体育」に使用する「D」マークコンテンツの種類、「授業で使ってみよう」、「学習のまとめに使ってみよう」のそれぞれの視点に立ったデジタルコンテンツの活用方法が示されており、主体的に運動や健康に関する課題を発見し、その解決を図れるよう工夫されていると感じました。

以上のことから、私は、1位を東京書籍、2位を大日本図書を推薦させていただきます。私からは以上です。

続きまして、高森委員、お願いいたします。

○高森委員 科目名「保健体育科」・種目「保健体育」については、導入部分において、当該教科の学びの目的・意義、学習の方法論などが的確に示されているか、学習の課題とまとめが生徒の知識・技能の定着につながっているか、評価の特性上、学習者が常に自分の身に引き当てたり、日常生活に照らし合わせて考えられる工夫が見られるか、デジタル教材は有効に活用されているかなどを主眼に置いて比較・検討しました。同時に、個別的内容として、保健の領域では性の問題、心の成長と葛藤、コミュニケーショントラブル、ストレスなど、生徒たちが日常的に向き合うであろう思春期特有の悩みや不安に対する学習課題について丁寧に説明がなされているか、事故・防犯・防災などのリスク教育、医療・薬品による病の治療法など、基礎的な知識を効率よく学習できる構成になっているかを分析し、また体育の領域では、運動やスポーツをする際の注意点、事故や障害を防止する安全教育についても記述の内容を確認しました。

以上の観点から私は、1位に大修館書店、2位に東京書籍を選びました。

2者ともオリエンテーションが大変充実しており、学習の目的や意義、習得した知識や技能の活用と展開、教科書の使い方、保健体育の学習方法と、段階を追って展開していきます。

特に東京書籍の場合は、8・9ページにデジタル教材の活用法、10・11ページにおいてブレインストーミングやロールプレイングの方法と留意点を解説するなど、学習の手引きとして充実した内容になっていると感じます。

1時間の学習の流れについては、2者ともに「章の扉」で学習課題を確認し、課題の解決に向けて資料等を参考に話し合い活動をするなど、学習のつかみどころを提示、「学習のまとめ」で学習した内容を振り返り、日常生活に活かすよう導く内容となっています。

大修館書店には、これに加えて、各章末にドリル形式の「学習のまとめ」が設定され、知識・技能、思考・判断、表現、主体的学習態度の各項目について振り返りを促しているという特色があります。

デジタル教材の活用について、2者ともに随所に二次元コードが用意され、発行者が作成したサイトのコンテンツにアクセスできる環境を整えています。

大修館書店の現行の当該教科では、デジタル教材はほとんどが外部リンクになっておりましたが、ここは改善された点といえます。

このように、2者は学習内容や資料が過不足なく配置され、レベルの高い教科書に仕上がっているなど、全体の構成が大変似通っているという印象を受けます。

そこで、今度は個別的な内容に着目して2者を比較してみたいと思います。比較するのは1年生の保健編で取り扱う、心と体の発達の学習です。2者を比べますと、大修館書店のほうが、視覚的に訴える写実的な図版の数が多く、また1時間の授業が教科書の見開きでほぼ完結する工夫がなされています。一方、東京書籍は、本編の図版はイラスト調でリアリティに欠けて、またこれとは別に章末資料にも拡大版の図版が用意されているため、学習者はページを行き来する必要があります。使い方という意味でも、大修館書店のほうが優れていると思います。

また、性的マイノリティに関する学習については、大修館書店は42・43ページの見開きで詳述され、一方の東京書籍は、巻末資料の61ページのみの記述となります。性教育は究極の人権教育と言われておりますので、大修館書店はその点を重く見ていることが分かります。

以上の比較・検討の結果、章末の学習のまとめの充実度、図版資料の視覚的効果などが優れているという点で、私は、1位に大修館書店、2位に東京書籍を選びました。

○佐藤教育長 ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局より報告させます。

(集計)

○事務局 それではただいまの集計結果について申し上げます。

第1位に東京書籍を推薦された方が4名、大修館書店を推薦された方が1名。第2位に大日本図書を推薦された方が4名、東京書籍を推薦された方が1名。

以上でございます。

○佐藤教育長 ただいまの集計結果のとおり、1位に東京書籍を挙げた方の数が4名と最も多く、過半数を超えております。

このことにより、保健体育については東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見などございますでしょうか。

(なし)

○佐藤教育長 それでは、保健体育については東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

○佐藤教育長 ご異議ございませんので、保健体育については東京書籍に仮決定いたしました。

技術・家庭（技術分野）

○佐藤教育長 続きまして、技術分野についてご審議願います。発行者は3者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

浦井委員から時計回りの順にお願いいたします。

浦井委員、お願いします。

○浦井委員 よろしく申し上げます。

技術・家庭の技術分野は、正直に申し上げて、候補となった3者とも遜色なく、大変悩みました。技術分野で重要視されるのは、まず、基礎的に必要かつ正確な知識と技術の習得だと思います。そして、そのうえで問題解決能力などを養い、身に着けた知識や技術をどのように応用・発展し、役立てていくかを考えさせ、その力を伸ばしていく必要があります。

技術分野で取り上げる内容は、他の教科以上に、時代の流れや技術の発展によって大きく変化せざるをえないものだと思います。例えば、つい少し前にパソコンとマウスの操作が中心であったコンピューター関連についても、現在生徒たちが実際に用いているのは、パソコンとマウスではなくタブレットが中心だと思います。実際に、授業などの中でしかキーボードやマウスに触れたことがないという生徒もいるのではないのでしょうか。特に、一人一台端末が活用されるようになってからは、タブレットが中心となる傾向は強まったように思います。

現在の中学生は、小さなころからスマホやタブレットが身近にある世代となってきています。QRコードも自分たちで器用に使いこなしますし、技術分野の教科書であるからこそ、デジタルコンテンツが活用しやすく提示されていることは、意味があると考えました。

このような考えのうえで、私は第1位を東京書籍、第2位を開隆堂、第3位を教育図書とさせていただきます。理由は次の通りです。

東京書籍は、資料が多く、QRコードも豊富だと感じました。特にQRコードは、常にページの右上の目につくところに掲示されているため、3者の中でもっとも使いやすく感じました。

また、問題解決能力を養うための工夫や、作業における安全の大切さを促す注意点なども、わかりやすく提示されていると思いました。

開隆堂は、写真の使い方が大変良いと感じました。具体的には、作業の過程の写真で、作業をする生徒の視点からの写真だけでなく、作業の様子が把握できる写真を掲載しているため、よりいっそう分かりやすく感じました。他人がやっている作業を見て学ぶこともあるかと思えますし、誰もが同じ視点になるわけではありませんので、この工夫は大変意味があるものと思います。

教育図書の特色のひとつともいえるのが別冊の「スキルアシスト」だと思いますが、この別冊自体は、大変良くまとまっており、写真も分かりやすく示されていて、内容的には使いやすいものだと感じました。これは、授業のやり方によっては、大変活用できるのではないかと思います。一概にメリット・デメリットを決めることはできませんし、A4版変形ということで、他の2者のAB版よりは多少横幅の狭い判型で工夫なさっているのかとも思いましたが、限られた机や作業台のうえで、教科書とこの別冊の両方を机に広げることは難しく、さらに中学生の紛失の危険性も考慮すると、デメリットもあるかもしれないと考え、迷いましたが今回プラス評価とはしない形にさせていただきました。

以上のような点につきまして総合的に考えました結果、私は第1位を東京書籍、第2位を開隆堂、第3位を教育図書とさせていただきます。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

垣内委員、お願いします。

○垣内委員 技術・家庭、技術分野に関して言えば、生活技術について、基礎的な理解と技能を身につけること、社会的な課題の解決策を構想し、実践し、評価して、改善すること、そしてよりよい生活、持続可能な社会構築に向けて工夫し、創造しようとする、実践的な態度を養うということが大きな目的とされていると認識しております。

その上で、着目したのは、以下3点です。一つは基礎知識・基礎技能の定着ということであり、2点目は問題解決に向かう姿勢、3点目はデジタル教材の有効活用ということです。こういう観点から3者比較をさせていただきました。

いずれの者のテキストであっても、学習活動の流れや手だてといったようなことを構造的に理解しやすいように構築されていて、学ぶ生徒にとっても学びやすく、そして教える側にも教えやすく工夫されていると感じました。さらに内容面も充実しておりまして、デジタル資料もいずれも豊富なものであろうというふうに理解いたしました。

その上で私は、第1位を東京書籍、第2位を開隆堂とさせていただきます。

理由について説明します。いずれもよくできた、構造的に編集されたテキストなんですけれども、東京書籍の場合は、「テックラボ」というんでしょうか、問題解決型学習に必要な基礎的な機能について、写真やイラストを用いた解説を掲載して、丁寧に提示していることにより、基礎・基本をより定着させることができるのではないかと期待を持ったということがあります。このことにより情報量も多く、学ぶ側にとっては様々な角度から多面的に考慮することができるのではないかとこのように考えました。

また、脚注に関しても技術の工夫ということで、身近な技術や製品などに関する情報を掲載することで、これを日常の生活、あるいはその先の社会に適応していこうというような態度を養うことにいざなうという意味でも評価できるかというふうに思いました。

また、内容面については、教材の数を少し絞っているのかなという感じがいたしております。ただ、学習した基礎知識を援用することによって、より実生活に生かす、総合的な活用につながるということも期待できる。これによって課題解決をするという主体的な学びにつながるのではないかとこのように考え、第1位を東京書籍としております。

開隆堂、第2位ですけれども、こちらも非常によくできたテキストでありまして、材料と加工の技術というところでは、製作のための技能として問題解決学習に必要な基礎的な議論についても、写真とイラストを用いてきちんとした解説を提示していること、それから脚注に「豆知識」という形で学習内容に関わる情報を掲載していることなど、多くの評価できる点がありますが、先ほども述べましたように、より主体的で基礎・基本を定着させるという観点から、東京書籍を第1位とさせていただきます。

○佐藤教育長 私から技術・家庭、技術分野について申し上げます。

技術分野については、中学校学習指導要領によれば、もの作りなどの技術に関する実践的・体系的な活動を通して、生活や社会で利用されている技術についての基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身につけ、よりよい生活や持続可能な社会の構築に向けて技術を工夫し、創造しようとする実践的な態度を養うことが大切であると認識しております。今後ますます高度化・システム化される技術に支えられた社会を生きる子供たちにとって、技術分野の学習はとても大切な役割を果たしていると言えます。

3者それぞれの内容について比較・検討いたしましたが、いずれの教科書も写真やイラストが随所に掲載されており、子供たちの学習意欲を喚起するとともに、作業などについても分かりやすく示してあると感じました。

私は、学習指導要領でも強調されております。実践的・体験的な活動の充実と、問題解決的な学習の充実につながる、生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能、実習や体験等の問題解決学習の掲載内容について着目をさせていただきました。

生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能については、東京書籍は「TechLab」として、開隆堂は「製作のための技能」として、教育図書は別冊「スキルアシスト」として、問題解決学習に必要な基礎的な技能について掲載しております。

材料と加工の技術においては、東京書籍教育図書は、基礎的な技能を加工作業ごとにま

とめて掲載しており、材料ごとの作業の違いについても捉えやすいように工夫されています。また、東京書籍と開隆堂は、教育図書に比べて写真やイラストのサイズは小さめではございますが、豊富に掲載されており、作業手順やポイントを確認するのに有効であると考えます。

また、問題解決学習については、3者ともに内容区分ごとの問題解決例をバランスよく掲載しておりますが、さらに東京書籍と開隆堂は、複数の内容区分を統合した問題解決例を掲載しており、学習した知識や技能を活用して、複合的な課題の解決に取り組む力を育成することにつながるものと考えました。

以上のことから私は、1位、東京書籍、2位、開隆堂を推薦させていただきます。

私からは以上です。

続きまして、高森委員、お願いいたします。

○高森委員 科目名「技術家庭科」・種目「技術」については、技術分野を学習する意義と目的、ならびに教科書の使い方や学習の進め方などがガイダンスにおいて明確に明示されているか、教科書を開きながら学習する工作・栽培・情報などの実習例は見やすい構造になっているか、実習時の安全面への配慮がなされているか、デジタル教材は有効に活用されているか、技術分野における現代社会の諸課題について考える教材が用意されているかなどという多角的な視点から比較・検討し、私は、1位に東京書籍、2位に開隆堂を選びました。

教科書冒頭のガイダンスは、2者ともに充実しています。東京書籍では、「技術は夢をかなえるためにある」の中で、技術分野を学習する意義や目的、「技術の見方・考え方」および「技術分野の学習を始めよう」で、学習の方法論や進め方をそれぞれ概観するつくりになっており、十分な内容に仕上がっています。一方、開隆堂には、技術を学習する意義についての明瞭な説明は管見の限り見当たりません。

また、安全面への配慮について、東京書籍は本編に「安全」「衛生」のアイコンで提示するほか、冒頭8・9ページの見開きを使って作業の安全確保について詳しくまとめられている点も高く評価できます。一方開隆堂も、18・19ページで、作業時の安全確保についての学習を用意し、本編に「安全」のアイコンを用いた注意喚起を行っています。

内容の部分では、ものづくり、生物育成、エネルギー、情報技術の各分野でそれぞれ特徴があります。

具体的に、まずは物作りの分野の木工で比較いたしますと、2者ともに製作図の書き方、試作品の製作、部品表の作成と材料の調達、工程表の作成といった過程を経て製作に臨むというステップを踏んでいる点では共通しています。相違点としては、開隆堂では試作品の製作の後に設計の改善が用意され、一方東京書籍は製作物が完成した後に、評価・改善・修正のステップが用意されているという点です。学習では完璧な製作物をつくるのが目的なのではなく、製作の過程における試行錯誤がどのような結果となるかを学ぶことを目的としているので、東京書籍のほうが、「発見につながる学習」に軸足を置いた内容

になっているのではないかと感じました。

また東京書籍は、基礎的な製作工程・工具の取扱い、あるいは基礎機能の解説を主軸に据えて、見開きをうまく活用した見やすい紙面の構成になっております。さらに、製図や設計図の説明が非常に詳しいのも東京書籍の強みです。

いま一つ、情報技術の分野では、2者ともにデジタル技術、情報モラル、知的財産、個人情報への扱い、セキュリティ、情報技術の活用事例などに関する基礎学習が充実しています。また、昨今話題となっている人工知能AIや仮想空間メタバースに関するコラムも用意されています。

両者の違いに着目しますと、特にプログラミングの学習に顕著な相違が見られ、台東区の中学校でも馴染みのある「Scratch」を主軸にプログラミング学習を展開する東京書籍に対し、開隆堂は、「Scratch」に対応する「JavaScript」について学習するなど、より専門的で高度な内容になっていると見受けました。その点、東京書籍では、巻末の付録で「JavaScript」の詳しい説明があります。プログラミングのバリエーションは多岐にわたる上に常に進化し続けるものなので、知識として知っておく程度でよろしいのではないかと思います。

そのほか、情報技術の分野で興味を引いたのは、東京書籍巻末付録の「コンピュータの基礎操作」と「プログラミング手帳」、開隆堂巻末付録の「コンピュータの基礎操作」と「プログラミング」で、どちらも実用的な付録となっていることが指摘できます。ただし、ボリュームとしては前者が14ページ、後者が3ページとなっており、東京書籍のほうが発達しています。また、人工知能AIに関するトピックが東京書籍では264ページ、開隆堂で280ページに見えますが、開隆堂は音声生成AIの紹介に特化しているのに対して、東京書籍は情報解析機能、レコメンド機能、音声認識機能など、AIの有する多様な機能の解説がなされています。

このほか、東京書籍には、内閣府が進める科学技術イノベーションのうちSociety5.0を紹介していることなど、魅力的なコンテンツが挙げられます。

以上、総合的に判断して、私は、1位に東京書籍、2位に開隆堂を選びました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

神田委員、お願いいたします。

○神田委員 技術はものづくりの技術の知識と技能を身に付け、より良い生活の実現や持続可能な社会を構築する資質・能力を育成することにねらいがあります。どの教科書も巻頭に学習の仕方や流れが説明され、また問題解決型の学習を意識した構成となっています。東京書籍は、目標⇒レッツスタート（導入）⇒学習課題（問い）⇒本文や図版⇒活動（深い学び）⇒まとめの活動という構成で生徒も教師も使いやすい構成になっています。考えを深めるための資料となるデジタルコンテンツも充実しています。また、社会、生活・健康・安全、最新技術、SDGsなど、多彩なテーマの問題解決例が載っているので、生徒の興味関心や解決に向かう支援となります。

開隆堂も、ガイドンスで技術についての学びへ興味をもたせ、問題解決の流れを掲示しております。内容区分ごとの問題解決例の多さも評価されます。

総合的に見て、私は、1位に東京書籍、2位に開隆堂を推したいと思います。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について事務局より報告させます。

(集計)

○事務局 それでは、ただいまの集計結果について申し上げます。

第1位に東京書籍を推薦された方が5名。第2位に開隆堂を推薦された方が5名。第3位に教育図書を推薦された方が1名。

以上でございます。

○佐藤教育長 ただいまの集計結果のとおり、1位に東京書籍を挙げた方の数が5名と最も多く、過半数を超えております。

このことにより、技術・家庭（技術分野）については、東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、このことにつきまして附帯意見等はございますでしょうか。

(なし)

○佐藤教育長 それでは、技術・家庭（技術分野）については、東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

○佐藤教育長 ご異議ございませんので、技術・家庭（技術分野）については東京書籍に仮決定いたしました。

技術・家庭（家庭分野）

○佐藤教育長 続きまして、技術・家庭（家庭分野）についてご審議願います。発行者は3者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

垣内委員から時計回りの順にお願いいたします。

垣内委員、お願いします。

○垣内委員 技術・家庭の家庭分野についてです。

ここでは、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住に関する実践的・体系的な活動を通じて、よりよい生活の実践につなげるというのが大きな目的になっていると理解しております。

そのため、家族・家庭の機能について理解する。家族・家庭、そして衣食住、消費や環境など、生活の自立に必要な、基礎的な理解・技能を身に付けると同時に、生活上の問題を解決する、生活上の工夫を行うといったような、非常に実践的かつ合理性を求められる科目であろうというふうに思われます。

このために、基礎・知識の定着、それから問題解決の姿勢、さらには実践・体験のためのデジタル資料の有効活用という3点から、3者を比較させていただきました。

いずれの者の教科書についても、この教科書の構成、あるいは使い方が丁寧に説明され、学びの流れというものが非常に明確に示されているという点は共通しているかと思えます。

こういう学びの構造化の上で、科学的な理解を深めるような資料として、実験とか、また調理方法といったようなことも豊富に盛り込まれている点、各者とも評価したいと思えます。またSDGsについても各者触れており、デジタル教材の資料も十分網羅されているかなというふうに思います。

その中で、私は東京書籍、第1位、開隆堂を第2位とさせていただきたいと思えます。

東京書籍に関しましては、最初のところに「未来につながる家庭分野」ということで私たちの食生活、それから衣生活・住生活、そして消費生活と環境、私たちの成長と家庭・地域といった構成で自分の身近なところから、広がりを持った形でこの家庭という科目の学習が進んでいくということを示す、非常に自然な流れの導入部となっております。また、様々な資料も充実しておりますし、LGBTQに関する内容も掲載しているということがあります。

複合的な課題解決の事例として幾つか掲載しています。ほかの者に比べると教材の数自体はそんなに多くはないんですけども、非常に丁寧な説明と、段階的なステップを踏んだ理解が促されるような工夫があるというふうに感じました。また、デジタル教材も非常に多いというようなこともありまして、学ぶ生徒の方、そして教える教師の方々にとっても柔軟な対応ができるのではないかというふうに考え、第1位を東京書籍とさせていただきました。

以上です。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

私から、技術・家庭（家庭分野）について申し上げます。

家庭分野について、中学校学習指導要領によれば、衣食住などに関する実践的・体系的な活動を通して、家族・家庭の機能について理解を深め、生活の自立に必要な基礎的な理解を図るとともに、それらに係る技能を身につけ、よりよい生活の実現に向けて生活を工夫し、創造しようとする実践的な態度を養うことが大切であると認識しております。

子供たちが生涯にわたって自立し、ともに生きる生活を創造するために、家庭分野の学習はとても大切な役割を果たしていると言えます。

3者それぞれの内容について比較・検討いたしました。技術分野同様に、いずれの教科書も写真やイラストが随所に掲載されており、子供たちの学習意欲を喚起するとともに、調理政策などについても分かりやすく示してあると感じました。

私は、学習指導要領でも強調されております、実践的・体験的な活動の充実と、問題解決的な学習の充実につながる、生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能、実習や体験等の問題解決学習の掲載内容について、技術分野と同様に着目をさせていただきました。

生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能については、東京書籍は「いつも確かめよう」として、開隆堂は「調理の基礎や製作の基礎・基本を知ろう」として、教育図書は「調理の基礎を知ろう」や「布を使ってみよう」の資料として、問題解決学習に必要な基礎的な議論について掲載しております。

食生活においては、東京書籍と開隆堂は、調理の作業ごとにまとめて掲載しており、食材や調理方法ごとの違いについても捉えやすいように工夫されております。また、東京書籍と開隆堂は、学習内容に関わる情報を各ページの下部に生活メモや豆知識として掲載し、子供たちの知識を広げ、深めることに有効であると考えます。

問題解決学習については、東京書籍と開隆堂は、内容区分ごとの問題解決例をバランスよく掲載しております。なお、複数の内容区分を統合した問題解決例については3者とも掲載しており、学習した知識や技能を活用して、複合的な課題の解決に取り組む力を育成することにつながるものと考えます。

以上のことから私は、1位、東京書籍、2位、開隆堂を推薦させていただきます。

私からは以上です。

次に、高森委員、お願いいたします。

○高森委員 科目名「技術家庭科」・種目「家庭」については、家庭分野を学習する意義と目的、ならびに教科書の使い方や学習の進め方などがガイダンスにおいて、明確に示されているか、教科書を開きながら学習する調理や裁縫など、実習では見やすい構造になっているか、実習時の安全面への配慮がなされているか、デジタル教材は有効に活用されているか。家庭分野における現代社会の諸課題について考える教材が用意されているか、などという多角的な視座から比較・検討し、私は、1位に東京書籍、2位に開隆堂を選びました。

まず教科書の導入部分に当たるガイダンスについては、家庭分野を学習する目的、各領域を俯瞰する学習観、目標・見通し・活動・実習・振り返り・まとめといった学習の流れなど、2者ともに詳しく解説され、よくまとめられていると思いました。特筆すべき点は、開隆堂には、6・7ページに、主体的・対話的で深い学びを主軸に据えた学び方、考え方の工夫などが具体的に示され、こちらは東京書籍には見られません。

また実習を安全に進めるための配慮に関しては、2者ともにガイダンスの中で触れ、さらに本編でも「安全」「衛生」のアイコン表記をもって提示しています。ガイダンスでは、東京書籍のほうが幼児・高齢者とのふれあい体験時の注意点、けがや感染症に対する対策など、より詳しい内容になっています。

全体の構成について、両者に大きな違いがあり、開隆堂では、A家族・家庭、B衣食住、C消費・環境の3部構成からなり、別途「生活の実践と課題」が巻末に設定されています。一方の東京書籍は、自らの生活、消費者としての意思決定、家族・社会との協働の3部構成で、このうち、「自らの生活」をさらに衣・食・住の3編に区分した全5編からなっており、別途、「選択」という枠組みの中で巻末に「生活の課題と実践」が組み込まれていま

す。特に身の回りの課題にスポットを当てた巻末の「生活の課題と実践」は、学習者が家庭科の学びを自分事として実生活に活かすきっかけになることが期待されます。

デジタル教材の活用については、2者ともに自社作成のオリジナル教材を活用し、開隆堂は「QR」のアイコン、東京書籍は「D」マークのアイコンで本編中に示され、内容もテキスト・動画ともに充実しています。

次に具体的な内容について、2点ほど取り上げて比較したいと思います。

まずは家庭科の導入部分に当たる、家族・家庭についての学習について比較しますと、2者ともに巻頭で「家族・生活」の単元を設け、家族・家庭の意義や機能、生業や社会との関わりなどを学習します。なお、開隆堂では、今日的課題として、家族のあり方や暮らし方に多様性があることに触れ、家族や家庭のあるべき姿を固定概念で決め付けない配慮もなされております。この点について、東京書籍では270ページのコラム欄で学習するにとどまっています。また、開隆堂では、男女共同参画、ジェンダー、ウェルビーイング、ヤングケアラーについても触れ、女性の社会進出のみならず、男性の育児進出にまで言及している点は高く評価したいと思います。管見の限り、東京書籍には同様のコンテンツはないように思います。

次に教科書を開きながら学習する実習の教材について比較します。その際には共通する題材を用いた実習例を比較の対象とする必要がありますので、調理実習のうち、具材・付け合わせ・組み合わせ料理もほぼ同じ、「さばの味噌煮」の例を比べています。東京書籍では92ページ、開隆堂では138ページとなります。2者とも見開きで展開しますが、開隆堂では、調理そのものの手順は1ページ内に収めてしまっているのに対して、東京書籍は2ページを有効に活用して、文字や写真も充実しています。特に写真入りで解説される調理の手順が、開隆堂では4ステップであるのに対して、東京書籍は食材の下ごしらえも含め6ステップ用意されている点など、学習者が調理の段取りをイメージできる工夫がなされています。

2者ともに優れている点が異なりますが、家庭科の教科書の特性上、座学よりも実習の充実度から判断して、私は、1位に東京書籍、2位に開隆堂を選びました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

神田委員、お願いします。

○神田委員 家庭は衣食住に関する理解とともに技術を身に付けることがねらいとなっています。そして、学習を通して課題解決を図り、よりよい家庭生活を実践する能力や態度を身に付けさせることが大切です。①衣食住に関する内容が分かりやすく説明されているか②安全面の配慮なども含め、実習を通して技術を身に付けることができる内容か③課題解決を通して思考力や実践力を身に付けることができる内容かについて考えてみました。どの教科書も冒頭のガイダンスで家庭科の学習のねらいや取り組み方が掲載されています。実習に関しても写真や図で分かりやすく説明されています。

その中でも注目したいのは東京書籍です。冒頭のガイダンスでは、教科書の構成が示

され、自立から共生へと展開されていきます。安全面での注意も冒頭や本文に適宜掲載されており、安全マークや衛生マークで示しています。QRコンテンツが前回の教科書よりかなり増えており、生徒が学ぶ上で教師が指導する上でも使いやすくなっています。また、やってみたくなるような調理実習、モノづくり、体験活動などを促しています。その点で美しい写真や多くの実習例が効果的です。キャラクターの呼びかけから問いを引き出した上で問題解決の道筋を示し、深い学びへと導かれています。

開隆堂は、豊富な実習制作や活動例が載せられており、評価されます。折込の食品の写真は彩りよく鮮明な画像です。また、教科書をガイドする様々なマークを駆使して理解を助けています。消費生活や環境について事例を基に考えさせているのも評価されます。

どちらも優れた教科書ですが、総合的に考えて、私は、1位を東京書籍、2位を開隆堂で推したいと思います。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

浦井委員、お願いします。

○浦井委員 よろしくをお願いします。

技術・家庭（家庭分野）は、技術分野と同じで、3者ともよくできた教科書であると感じました。そのため、大変迷いましたが、私は第1位を東京書籍、第2位を開隆堂、第3位を教育図書とさせていただきました。

家庭分野は、私たちの衣食住にかかわることだけでなく、生活の質をより良いものとし、地域社会とのつながり、自然との共生を大切にするなど、幅広い分野に及びます。

家庭分野の教科書は、それぞれの副題を、東京書籍が「自立と共生をめざして」、開隆堂が「自立しともに支え合う生活へ」、としているのに対し、教育図書は「暮らしを創造する」になっており、スタンスの違いを感じ、興味深く拝見しました。

東京書籍は、「自分の生活チェック」や「考えてみよう」など、あちこちに自分で考えさせる工夫がされており、授業でも使いやすく、また生徒も考えを深めやすいのではないかと思います。家庭科は、ノートを取るとなると思いのほか難しく、教科書を読みなおす生徒が多いと思います。そういったことを考えると、必要な部分に書き込みができる方式の東京書籍は、プリントがない場合にも有効に使えて、使いやすいのではないかと思います。

さらに、昨今無視することのできない食物アレルギーについてですが、東京書籍は、大切な内容があちこちにちらばらずに1か所にまとまって説明されており、内容が把握しやすく、良いのではないかと思います。もっとも、この点については、開隆堂と教育図書も、調理実習例のなかでも触れるようにするなど、違った形での工夫をなさっていると思います。

開隆堂は、写真が大変鮮やかで、野菜が瑞々しく見え、料理が美味しそうに見えるように感じました。これは、他愛ないことかもしれませんが、調理実習などをするにあたって、これから作ろうとするもの、食べようとするものが美味しそうに見えるか見えないかは、

重要だと思います。

教育図書は、特に調理実習などについての記述が分かりやすく感じました。この点、最初に触れました「暮らしを創造する」という副題のスタンスからも、納得できるものでした。例えば野菜の切り方について、短冊切りや拍子木切り、千切りなどそれぞれ、同じ野菜を使い、切った写真を原寸サイズで表示してあります。また、短冊や拍子木の絵を添えて、名前の由来を示して覚えやすくするなど、細かい工夫がされている点は、使いやすく分かりやすいのではないかと感じました。

ただ、これは敢えて比較すればですが、他の2者に比べ、「家庭・家庭生活」「消費生活・環境」の章よりも、多少「食生活」「衣生活」「住生活」の方に比重が置かれているような印象がありました。これはこれで、良い構成だと思いますが、授業での使いやすさを考え、今回はバランスの良さを取りました。

3者共に、それぞれの良さがあり、大変悩みましたが、使いやすさや内容などを総合的に判断した結果、第1位を東京書籍、第2位を開隆堂、第3位を教育図書とさせていただきます。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について事務局に報告させます。

(集計)

○事務局 それでは、ただいまの集計結果について申し上げます。

第1位に東京書籍を推薦された方が5名。第2位に開隆堂を推薦された方が5名。第3位に教育図書を推薦された方が1名。

以上でございます。

○佐藤教育長 ただいまの集計結果のとおり、1位に東京書籍を挙げた方の数が5名と最も多く、過半数を超えております。

このことにより、技術・家庭（家庭分野）については、東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、このことにつきまして附帯意見等がございますでしょうか。

(なし)

○佐藤教育長 それでは、技術・家庭（家庭分野）については東京書籍に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

○佐藤教育長 ご異議ございませんので、技術・家庭（家庭分野）については東京書籍に仮決定いたしました。

外国語（英語）

○佐藤教育長 続いて、英語についてご審議願います。発行者は6者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

私から時計回りの順にお願いいたします。

外国語について、中学校学習指導要領によれば、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考え方などを理解したり、表現したり、伝え合ったりする、コミュニケーションを図る資質・能力を育成することが大切であると認識しております。

グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっております。

一方で、授業では依然として英語の文法・語彙等の知識がどれだけ身につけていたかという点に重点が置かれ、習得した知識や経験を生かし、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現することに課題が見られます。

そこで私は、互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う、対話的な言語活動を重視するとともに、学習した語彙や表現等を実際に活用する活動を充実させ、言語活動の実質化を図るためのトピックの取り上げ方に特に注目して、6者それぞれの教科書を比較・検討させていただきました。

多くの発行者では、小学校外国語科との円滑な接続のための工夫がされており、身近なことから話題を広げるよう設定されております。

特に三省堂は1年時は家族・友人・生活などの身の回りのことを扱い、2年次で夢や海外の生活・学校行事など、やや範囲を広め、3年時には人権・戦争・日本文化などを扱うことで、発達段階に応じて知的好奇心を喚起したり、より深く考えさせたりすることが期待される内容配列となっております。また小学校段階との接続に絞って言えば、東京書籍は1年時において小・中接続単元を設定し、ユニット4までは小学校の活動を振り返るとともに、小学校で聞いたり話したりした単語や表現が中心となっており、小学校における外国語活動の成果として、英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成すると感じました。

以上のことから私は、1位、三省堂、2位、東京書籍を推薦させていただきます。

私からは以上です。

次に、高森委員、お願いいたします。

○高森委員 科目名「外国語科」・種目「英語」については、英語学習の意義について学習者に対してどのようなメッセージを発信しているか、教科書の構成と学習の流れが的確に示されているか、読む・聞く・話す・書く活動が充実しているか、文法事項の説明に過不足はないか、デジタル教材は有効に活用できそうか、辞書の使い方が、発音記号の解説と共に紹介されているかなどという視点で比較・検討し、私は、1位に東京書籍、2位に三省堂を選びました。

まず、英語学習の意義について、東京書籍は各学年の表2と扉の見開きで、それぞれの

学年に対応するかたちで英語を学習する目的を鮮明に打ち出しています。三省堂には、管見の限り見受けられません。ここは外国語教育に対する教科書会社の認識を読み取ることのできる重要な部分であり、教科書全体のコンセプトに関わるはずですので、採択の際の大切な尺度の一つとなります。

次に、導入部分のオリエンテーションで、教科書の取扱い説明と学習の方法について比較します。東京書籍では、扉の裏と1ページの見開きで「学習の流れをイメージしよう」が用意され、1年間を通してのロードマップと各単元でのユニットの展開を提示して、教科書の構成や学習の流れが分かりやすく解説されています。さらに続けて2・3ページの「学習の見通しを立てよう」のガイダンスが、目次を兼ねる形で用意されています。ここではユニットごとの活動目標や文法事項が見開きで紹介されるなど、これから学習する内容の見通しを立てやすくなっています。続く4・5ページでは、「学び方コーナー」が設けられ、第1学年では文字の書き方、辞書の使い方、発音のテクニックなどの基礎的事項、第2学年では単語の覚え方、思いや考えの伝え方や受け止め方、第3学年では文法の使い方、「パラグラフライティング」による文章の書き方など、英語を使った表現力の育成を目的とした学習内容が示されており、各学年で重点的に学習する事柄が詳細に説明されています。

一方、三省堂は、各学年の巻頭2・3ページに、目次を兼ねる活動の内容と、文法事項の説明、続く3・4ページでレッスンの流れと重点的取組みが示されておりますが、東京書籍のようなボリューム感はありません。教室英語については、三省堂の第1学年巻末資料に紹介がありますが、東京書籍のほうは、小学校で既習していることもあるためか、省略されているようです。

辞書の引き方についての学習は、東京書籍は第1学年3ページ、「学び方コーナー」の中で簡潔に紹介され、詳しくは二次元コードから解説動画で学習ができます。また、辞書引きの際に活用できる単語の基本的な発音と発音記号の学習は、各学年巻末付録教材の「英語の音と文字」のページに見開きで紹介され、併せて二次元コードから口の動きを動画で確認できます。一方、三省堂は、第1・第2学年のみ、巻末付録教材でつづりと発音の資料が掲載され、二次元コードの発音図鑑で口の動きや音の出し方を学習できます。辞書の引き方については、現行の三省堂本には英和辞典のみならず和英辞典の活用まで紹介がありましたが、今回は第1学年33ページの「For Self-study」に英和辞典の使い方のみ確認できます。なお、同様の辞書の活用法については、教育出版2年5ページ、啓林館1年29ページなどに、発音記号の学習については、教育出版は各学年の巻末④ページ、開隆堂の1年153、2年137ページ、3年136ページなどにも確認できます。

また、辞書学習と併行して、単語の覚え方の工夫について、東京書籍・三省堂ともに、英単語の構成要素としての接頭辞・語根・接尾辞の語源学習のプログラムが充実している点も評価したいところです。東京書籍では、第3学年の冒頭の「学び方コーナー」4ページに、「単語や表現を増やしたい」のコーナーが設けられ、二次元コードの動画も参照しな

がら、単語の知識を広げる学習があります。また、第3学年巻末の付属教材「Word Room」の中の144ページにも「英単語の成り立ち」のコラムが用意され、単語の仕組みが紹介されています。こちらは巻末にあるため見落とされがちですが、学習者にとっては意外に役立つ知識のはずです。

一方、三省堂でも、第2学年44ページの「For Self-study」に、「使える単語を増やそう」、第3学年42ページ、同じく「For Self-study」に、「単語の覚え方」のコーナーがそれぞれ設けられています。なお、同様の単語の語源学習については、教育出版3年134ページ、啓林館3年4ページなどにも確認できます。

読む・聞く・話す・書く活動のうち、特に東京書籍が優れていると感じるのは、「Real Life English」と銘打ったシチュエーション別の活動で、例えば買い物・レストラン・病院での意思伝達、道案内や電車の乗換案内、街中で助けを求める場合、機内放送の聞き取りなどなど、様々な事態を想定した活動が組み込まれ、まさに海外旅行などでも応用できる実践的プログラムが充実していると感じました。

一方、三省堂では各学年巻末付録に「Tips for Small Talk」において、会話を始める表現、進める表現、終える表現が整理され、続く「Roll-Play Seat」で、シチュエーション別の活動が、各学年とも計4ページにわたって用意されています。

また各学期ごとの締めくくりでは、東京書籍では、「Stage Activity」において、三省堂では「Project」において、それぞれプレゼンテーション形式の活動が用意されており、既習事項の応用編としての活用が期待されます。また、東京書籍では、中学校生活を締めくくる第3学年106ページにおいて、「10年後の自分へのメッセージ動画」を作成する活動が用意されています。学習端末を利用した取組みは大変工夫されていて新鮮に感じました。

文法事項に着目すると、東京書籍は会話文法を主軸にした「Grammar for Communication」が各ユニットに搭載され、1学年でbe動詞・一般動詞の平叙文・疑問文・疑問詞と特殊疑問文、名詞の単数系・複数系、三単元、代名詞のうち再帰代名詞以外の人称代名詞と所有代名詞、現在進行形・過去形・過去進行系、2年生では最初に五文型、続いて接続詞、不定詞、助動詞のcan・will・may・must、比較構文、能動態、受動態、3年生で現在完了形、・現在完了進行形、不定詞の学習のうち仮主語や原形不定詞の用法、後置修飾、仮定法の順で展開します。特に東京書籍の場合は五文型の解説が2年生の学習の早い段階でしっかりと組み込まれている点が大きな特徴ではないかと思います。

一方、三省堂では、ほぼ各レッスンごとに用意された「Language Focus」で基本文の学習が求められ、1年生でbe動詞・一般動詞の平叙文・基本文・命令文・特殊疑問文、助動詞のうちのcan、代名詞のうちの人称代名詞と所有代名詞、三単元、冠詞、進行形・過去形・過去進行形・未来形・時制の順で、2年生では時制の復習、接続詞、準動詞のうち不定詞・動名詞、第Ⅳ・第Ⅴ文型、比較構文、助動詞のcan・will・may・must、前置詞、現在完了形の順で、3年生では現在完了進行形、能動態、受動態、前置修飾、現在分詞・過

去分詞、五文型、関係詞のうちの関係代名詞、後置修飾、仮定法、間接疑問文の順で、それぞれ学習が展開します。

文法事項については中学英語に求められる高い水準まで、ほぼ学習ができる形になります。三省堂は時制については、1年生の既習事項を2年次の冒頭で復習する設定になっており、いずれも時間軸を図式化して学ぶ教材が用意されているのは、分かりやすく、評価できるかと思いました。

もろもろの比較・検討の結果、優劣をつけがたいところはありますけれども、私は、1位に東京書籍、2位に三省堂を選びました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

神田委員、お願いします。

○神田委員 英語は、英語による聞くこと、読むこと、話すこと（やり取り）、話すこと（発表）、書くことの5領域の言語活動を通して、コミュニケーション能力を身に付けることにあります。

教科書を選び視点として、それらの言語活動がバランスよく配置されていること、英語を使って日常的な話題や社会的な話題を表現したり伝え合ったりすることができるようにすることが大切です。これからの英語の学習では身に付けた力を活用することができるようにすることが求められています。

今は、文法や知識を教えることを中心とした内容から実生活で生きる学び、英語を使いたくなるような教科書を選ぶことが必要だと考えます。教科書の教材で取り上げている内容についても考える視点となります。「場面・目的・状況」を意識した学習、「即興力」の育成、高校入試に対応できるか、小中の連携という視点からの視点も大切です。

このような視点で教科書を拝見いたしました。

光村図書は、全教科書の中で唯一登場人物を中心として、3年間のストーリーになっています。ストーリーの魅力を生かした言語活動を通して生徒が意欲的に力を付けていくことができるのではないかと思います。目的、場面、状況の3つの要素が揃っています。実際の場を想定しながら学びを重ねることで文法や語彙を活用しながら身に付けることもできます。

Unitは、「扉」「Part」「Goal」の3つのまとまりで統一されているので、生徒は迷わず学習に取り組めます。Listen⇒Speak⇒Writeの順に構成された言語活動を通してアウトプットします。Goalでは、単元の目標に応じた言語活動に取り組む中で学んだことを表現に生かします。各学期の学びの確認も設定されているので達成度を評価することができます。新しく「英語の学び方ガイド」やキャラクターのせりふによる「Tips」、教科書を横断的に活用するための工夫として、「Idea Hunt」があり、教科書を行ったり来たりしながら表現することもできます。

都立入試のスピーキングテストへの対応、「テストにトライ！」もQRコードを使って問題に取り組めます。

三省堂は、全体のバランスや構成などを考えると優れた教科書です。パートごとに見開きになっており、左ページに基本文と導入、右ページに本文と習熟を置いています。構成が分かりやすくなっています。各単元でGoal Activityが設定されており、そこではReadingやWritingにしている技能的なバランスが考えられています。

総合的に判断して、私は、1位を光村図書、2位を三省堂で推したいと思います。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

浦井委員、お願いいたします。

○浦井委員 よろしく申し上げます。

私は、第1位を三省堂、第2位を東京書籍、第3位を開隆堂とさせていただきました。

英語は、現在大変重視されている教科であり、あるランキングによれば、2022年の時点で、中学生の習い事の順位は、1位の学習塾に次いで、英語・英会話が2位となっているそうです。

英語は、本人の好き嫌いや向き不向き以前に、これまでどの程度英語に触れてきたか、現在どの程度英語に触れているかがそのまま反映されてしまい、日常的な環境や本人の背景、学外での習得などによる生徒のスキルの差が、一番激しい教科であるように思います。今年度の中学1年生からは、全員が小学校から英語を学んできている学年になっていると思います。先ほども、子供が中学生だと申し上げましたが、実際に中学校の英語の授業を見ていても、ひとつのクラスの中に、帰国子女である生徒、外国にルーツを持つ生徒、習い事としてやっている生徒、普段学校以外で英語に触れる機会のない生徒など、さまざまな生徒がおり、それぞれ英語に触れてきた度合いが様々です。その結果、少人数のクラスの中でも、スキルに大きな差ができていないことを感じます。個人での習得度合いの差があり、教える側も教わる側も、苦勞する教科となっているのではないかと思います。

また、小学校までは、簡単な会話だけで単語のつづりを覚える必要はありませんが、中学校になると、単語を覚え、文法を覚える必要があります。1年生の教科書を見ても、簡単なあいさつや自己紹介から始まり、年度末には文法を含めた大変難しい内容まで進みます。オールイングリッシュの授業では、意味をつかみかねたまま適当に真似をして終わる生徒や、英語自体に苦手感を感じて嫌いになる生徒も出るでしょう。求められているスキルが高い分、さらに難しい教科となっていると思います。

そのうえで使われる教科書ですので、英語の教科書を選ぶにあたっては、何よりも分かりやすいこと、英語が苦手な生徒でも分かりやすくなっていることを重要視しました。三省堂は、神田委員も触れていらっしゃいましたが、内容が3年間でストーリーのようになっております。各レッスンのトピックを、1年次は家族・友人、2年次は学校生活や夢、海外生活など、3年次は日本文化や人権、戦争などと、徐々にその範囲を広げてあります。日常生活で使う簡単な会話や単語から始まり、自分が英語で語れる内容が広がっていくことをイメージでき、この構成は大変良いのではないかと思います。

また、三省堂は紙面が見やすく、各単元でGoal Activityとして最終目標を提示し、単

元ごとに身に着けるべきリーディングやライティングの能力やレベルが分かるようになっていきます。これも、教える側にとってはもちろん、実際に教科書を使っている教わる側にとっても、使いやすいものなのではないかと思いました。

東京書籍は、デジタル教科書を使う際に、その画面上からGoogle翻訳を使うことができる機能があります。これは、日本語を母語としない外国籍の生徒への対応を意識したものとのことで、そうした配慮は素晴らしいと思いました。ただ、個人的には、Google翻訳の正確性には、一応確認の必要があるかと思うところであり、教員のフォローは欠かせないと考えます。

開隆堂は、マンガのコマ割りを使ったり、吹き出しの色を強調したりして、大切なところや学ぶべき内容を、視覚的に分かりやすく、かつハードルが高く感じないように学べるよう、工夫した構成になっていると感じました。マンガ的な画面構成については、好き嫌いがあるとは思いますが、抵抗感をなくし、内容をくみ取りやすくするには、ひとつの有効な手段なのではないかと思います。光村図書もマンガを取り入れていましたが、敢えて比べれば、開隆堂の方が構成的に使いやすいように感じました。

英語は、文法も必要ではありますが、何より単語力が必要だと思います。その面では、順位に挙げた3者とも単語学習については充実しており、本文中の各ページに、そのページで扱われている単語数が表示されており、自分がどの程度の単語能力があるのかを、実感できるようになっているなどの点も、良いと思いました。また、すべての教科書ともに、小学校での英語学習からの繋がりを考慮し、接続单元をつくるなど、連携させている部分は良いと思いました。

なお、敢えて最後にひとつ触れさせていただきますと、順位に挙げさせていただいた3者は、いずれも判型がA4判で大きく、重みがあるように感じました。英語の授業では、教科書に出てきた例文やチャントを、何度も復唱し、口ずさんで覚えるようにと指導されることが多いかと思います。デジタル教科書などで確認することはできるでしょうが、教科書を持ち帰る生徒もいると思いますし、学校でも家庭でも、机の上の限られたスペースで開いて使うことを考えますと、単語などを書きとることが多い教科で、判型の大きいものは扱いづらく感じるどころです。難しいことは承知のうえで、可能であれば判型の変更や、軽量化を期待したいところです。

最後に、要望めいたことを申し上げてしまいましたが、使いやすさなどを中心に考えました結果、私は第1位を三省堂、第2位を東京書籍、第3位を開隆堂とさせていただきます。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

垣内委員、お願いします。

○垣内委員 英語に関しては、ほかの委員もおっしゃいましたが、グローバル化する国際社会の中で、外国語によるコミュニケーション能力の向上は喫緊の課題であるという認識のもと、知識・技能の定着、さらには思考力・判断力・表現能力の育成、そして学

びに向かう力を養うことが重要であるということを考えながら、聞く、読む、話す、書くといった言語活動を通じて、情報や考えなどを理解したり、表現したり、伝え合ったりする、そういう資質・能力を着実に育成するということが大切であると考えております。

そのためには、バランスよい言語活動ができる、その実践ができるような構成・内容になっているかどうか。それと合わせて、実践力ですので、デジタル教材なども含めて、テクニカルな部分も細やかな配慮がなされているのかどうかというところに着目しながら検討しました。

いずれの教科書も、コミュニケーション能力の育成という観点で、ユニットのトピック、あるいは発達段階への配慮、それぞれ工夫がなされていて、また漫画やキャラクターなどを使ったり、小学校とのつながりなどにも配慮されているというふうに思いました。デジタル教科書も、ほとんどの教科書において、豊富に盛り込まれているというふうにも感じました。

その上で順位をつけますと、第1位が三省堂、第2位が東京書籍です。

三省堂に関しましては、他の委員もおっしゃいましたが、学年を追って、発達段階に応じた知的好奇心に合った形でのテーマが提出されて、より深く考えることができるような配列になっていること、基本構成として、パートごとに見開きのつくりになっていて、基本文と導入、そして本文と習熟という形で提示することによって、教員や生徒の能力に過度に依存しないということもありますし、それぞれの発達段階で、主体的な学習や、基礎・基本の習熟の程度によって、いろいろと使い分けることができるのではないかとこのように感じました。また、生徒用のデジタル教科書の内容も非常に充実しているというところもあります。

さらに、各言語機能、言語活動のバランスもよく取れているかと思えます。「Goal Activity」の中には、リーディングやライティングなど、必要な技能についてもバランスよく盛り込まれているということ、そして、全体として音声的な導入から文字認識、読解、音読、そして表現活動という学習の流れを意識したつくりにもなっていて、これは今のコミュニケーション能力をバランスよく向上させるという意味でもいいかというふうに思いました。

一方、東京書籍は、既にいろんな委員の方がおっしゃっておりますけれども、より高度な内容になっているのかなという感じもいたしました。単語学習も非常に充実しておりますし、様々な工夫もなされているというところがありますが、中学校になると学力差もかなり出てきますので、こういう中で基礎的な知識・技能を定着させて、バランスよく言語活動を実践するという観点からは、三省堂を第1位とさせていただきます。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について事務局に報告させます。

(集計)

○事務局 それでは、ただいまの集計結果について申し上げます。

第1位に三省堂を推薦された方が3名、東京書籍を推薦された方が1名、光村図書を推薦された方が1名。第2位に東京書籍を推薦された方が3名、三省堂を推薦された方が2名。第3位に開隆堂を推薦された方が1名。

以上でございます。

○佐藤教育長 ただいまの集計結果のとおり、1位に三省堂を挙げた方の数が3名と最も多く、過半数を超えております。

このことにより、英語については、三省堂に仮決定させていただきたいと思いますが、このことにつきまして附帯意見などございますでしょうか。

(なし)

○佐藤教育長 それでは、英語については、三省堂に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

○佐藤教育長 ご異議ございませんので、英語については三省堂に仮決定いたしました。

道徳

○佐藤教育長 最後に、道徳についてご審議願います。発行者は7者となっております。

それでは、各委員から、採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

高森委員から、時計回りの順にお願いいたします。

○高森委員 科目名「特別の教科道徳」・種目「道徳」については、導入部分において、教科の説明や道徳学習の意義・進め方についてどのように触れているか、全体の構成が体系づけられているか、「4つの視点」、すなわち自分・他者・社会・自然界の各領域において全体を見通すことができるか、各教材の問い・話し合い・自己評価など、学習の発展性・持続性がどのように担保されているか、デジタル教材の使い勝手はどうかなどに着目して、比較・検討し、私は、1位に日本文教出版、2位に東京書籍を選びました。

まず、学習のオリエンテーションについて、日本文教出版は巻頭4・5ページに「道徳科での学びを始めよう！」のページを設け、何をどのように学ぶのかを明確に示し、教科書の使い方、及び別冊『道徳ノート』の活用法がコンパクトにまとめられています。学習の方法については、「気付く」「考える・議論する・深める」「見つめる・生かす」の3ステップを説明し、6・7ページに具体的実践例を紹介します。特筆すべき点は、日本文教出版にはデジタルコンテンツの動画で、「道徳科での学びを始めよう！」の説明を視聴することができる点で、こちらは東京書籍にはありません。

東京書籍は巻頭4・5ページ、「道徳科とは」の中で道徳学習の意義、「道徳の授業はこんな時間」の中で「気づく」「考える」「深める・広げる」の3ステップを基本に、「演じる」「話し合う」活動の紹介を行っています。6・7ページには、教科書・デジタルコンテンツの使い方が具体的に示されています。

本編の構成について、東京書籍では、巻末の付録に小学校道徳で学習した教材が各学年1点、およびSDGsと関連した学習を用意する「道徳×SDGs」の教材が全学年3点用意されています。

日本文教出版は、本編の教材の中にSDGsに関する教材が盛り込まれており、「4つの視点」とは別に、「いじめ」「情報社会」「自立と共生」「環境と未来」「安全な生活」など、SDGs関連のカテゴリが分かるアイコンを使用して示しています。このほか、構成上、特徴的な部分としては、日本文教出版ではユニット学習「いじめと向き合う」「よりよい社会を考える」のふたつのテーマを設け、学習の目当てを明確に示しながら、二つの課題を重視した教材を各学年にそれぞれ11～12教材用意しているところです。

東京書籍にも「いじめのない世界へ」と「いじめを考える」の2テーマを設けて重点学習を用意しておりますが、こちらは各学年6教材を指定しています。

日本文教出版はこのような多様な視点から学ぶ教材の点数が多い上に、ユニットでくくった教材学習の一貫性が有する意味についての解説ページも特別に用意されている点が優れていると感じました。

各教材の学習ポイントについては、日本文教出版は本編の教材の標題に「4つの視点」のアイコンと「気高く生きる」「かけがえのない生命」「生き抜くこと」などの学習のポイントがテキストで明記されて、下段に二次元コードが用意されております。このあたりのつくりは東京書籍も同様です。

デジタル教材については、東京書籍は各教材ごとに朗読音声とPDF版ワークシート、他教科・領域との関連資料などが中心であるのに対して、日本文教出版では、朗読音声、ワークシートのほか、登場人物紹介、外部リンクなど多彩なコンテンツが用意され、また、「道具箱」の中に「心情メーター」「シンキングツール」「ワークシート」といった対話的な学びに資するツールが入っています。

メインとなる本編の教材について、教科書によっては、学習する学年が異なるもの、また、教材名および編集が若干異なるものもありますが、多くの発行者で採用されていたのが「銀色のシャープペンシル」「一冊のノート」「六千人の命のビザ」「二通の手紙」「足袋の季節」「卒業文集最後の二行」などでした。道徳科の学習の進め方、発問の具体例、話し合いなど、教室での活動の内容について比較する際は、これら共通する題材の扱い方を見るのが公平であろうと思いますので、東京書籍・日本文教出版より一例だけ、「卒業文集最後の二行」を取り上げ、比較したいと思います。

まず、当該教材については、各者ともに原作の本文を中学生向けにアダプテーションして、独自に改作した教材になっているので、ここではテキストそのものの比較は保留し、主体的・対話的で深い学びに関連する事項について、比較したいと思います。東京書籍と日本文教出版ともに、教材の最後に提起された発音は各2つで、それぞれ登場人物の心情を考える感情移入、自分の身に引き当てて考える、自我関与の2パターンが用意され、いずれもエンパシー能力の育成を見据えていることが分かります。これは、他の教材でもほ

ば同様のスタイルとなります。ただし、日本文教出版のよいところは、全ての教材ではありませんが、当該教材を使った「学びを深めよう」のコーナーが設定され、教材の捉えどころを把握し、考察を深めるための活動が整っているところです。これは教える側にとっても、学ぶ側にとっても大変有効だと思います。一方の東京書籍にも、教材に続いて「プラス」のページが用意されているものもあり、考え、深める活動を担保していますが、活動内容の深み、学習者の気づきを促す工夫は、活動に導くヒントが整っている日本文教出版のほうが優れています。

各者共通のもの以外に、特色ある教材として、日本文教出版には、現行の教科書にもある興味深い工夫が用意されています。第2学年の教材5・6の「五月の風」は、ひとつのストーリーを「カナ」と「ミカ」というふたりの登場人物の視点を入れ替えて考えさせる教材、第3学年の教材7の「命のトランジットビザ」と、8の「エリカー 奇跡のいのち」は、杉原千畝とユダヤ人少女を主人公として、ユダヤ人迫害のドキュメンタリーをそれぞれの立場から照らし出して考える連続テーマで、こうしたアナザーストーリースタイルの教材は、他の発行者には見られないもので、工夫がこらされているかと思います。

また、全体的なテーマ設定について、道徳科の教材にしやすい努力・克服・達成・成功などの心が晴れやかになる美談と、失敗・挫折・苦悩・罪悪感・後悔や反省・つぐないなど、心の弱さ・脆さをテーマにした教材のバランスについて、日本文教出版、東京書籍ともに効果的に配置されています。特に後悔・反省・つぐないなどを取り上げた題材は、人間を生きることの難しさ、自らの本分を尽くすことの大切さを深く考えさせる機会となり、これから社会に出ていく中学生にとって、大きな気づきになると考えます。

以上の比較・検討を踏まえ、私は、1位に日本文教出版、2位に東京書籍を選びました。
○佐藤教育長 ありがとうございます。

神田委員、お願いします。

○神田委員 特別の教科 道徳は、人間としての生き方について考えを深める学習を通して、道徳的な判断力・心情、実践的意欲と態度を育てることが目標になっています。そして、自分自身に関する事、人との関わりに関する事、集団や社会と関わる事、生命や自然、崇高なものに関わる事の4つの項目を扱っています。

選定の観点として、①道徳のねらいに迫りやすい内容であるか、②四つの項目がバランスよく構成されているか③考え、議論する道徳を実現することができる内容か④いじめや情報モラル、ユニットなど、様々な工夫を基に考えました。

どの教科書もそれぞれに素晴らしい教材が含まれています。特別の教科 道徳の指導を意識した内容の工夫が感じられました。

両者ともに巻頭に道徳科で学ぶことの意義と学び方、テーマについて掲載しています。また、4つの項目がバランスよく盛り込まれています。

東京書籍は、冒頭に1年間の流れ、1時間の学習の流れ、教科書の使い方が載せられています。「いじめ問題」「生命の尊さ」「情報モラル」「SDGs」「多様性」という5つの

現代的な課題が取り上げられています。特に「いじめ問題」と「命の尊さ」はユニットにして前学年に配置し、3本の教材で多面的に考えられるようになっていきます。すべての教材に二次元コードが用意されていて朗読やWebサイトにアクセスできるようになっています。

日本文教出版は、「いじめ問題」と「多様性、SDGs」などの社会問題に力を入れています。各学年にこの2つの項目ユニットとなって複数盛り込まれています。また、別冊で道徳ノートがついていることが特徴です。道徳ノートは単元ごとに自分の考えをまとめることができます。わりと自由に記入し、使えるようになっていますが、毎回必要であるかは疑問に思いました。

どちらも優れた教科書ですが、総合的に考えて、私は1位に東京書籍、2位に日本文教出版を推したいと思います。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

浦井委員、お願いします。

○浦井委員 よろしく申し上げます。

道徳は、平成30年から特別の教科として教科化されており、個人内評価で、評価の数値化はしないものとなっております。いのちの大切さや、いじめの防止などを重点的に教える教科となっておりますが、小学校以上に、思春期の複雑な中学生にとっては非常に大切である反面、同時に難しい教科となっているのではないかと思います。

候補に挙がった教科書は、いずれも「いのちの大切さ」や「生命の尊さ」を取り扱い、「いじめの防止」、また昨今問題になってきている「情報モラル」についても、いろいろな取り上げ方で工夫して扱っていることが感じられました。そのため、正直迷いましたが、私は第1位を日本文教出版、第2位をGakken、第3位をあかつき教育図書とさせていただきました。理由は、次に述べる通りです。

先ほども申しあげました通り、思春期の中学生にとっての道徳は重要な教科ですが、いろいろな考え方や立場の生徒がいることを考えると、クラスによってどのような形で授業を進めるのが良いかが異なる可能性があるなど、難しい教科でもあると思います。

日本文教出版は、一番大きな特色が、「道徳ノート」という他者にはない別冊のノートがあることだと思います。これを使うか使わないかは、授業のやり方にもよりますが、ワークシートなどを別に用意する必要がないことを考えると、やはり教員の負担は減るのではないかと考えました。また、この道徳ノートによって、家庭との連携ができるように配慮されている点は、普段道徳の教科書自体を家庭に持ち帰らせれば、どうしても生徒の負担になることを考えると、やはり有効であると考えました。

あかつき教育出版とGakkenも、巻末に切り取り式で「学びの記録」や「学習の記録」などを書けるようにしてあり、学期や年度ごとに、生徒が成長を記録し、家庭と連携できるようになっています。学期末など限られますが、切り取って保護者に見せられるという意味で、これも良い試みだと思いました。特にGakkenは、教科書の判型も大きいので、切

り取れることは重要だと思います。

Gakkenは、教材が有効にバランスよく配置されており、各教材の最後に発問をうながす工夫がされている点が、良いと感じました。

「情報モラル」については、あかつき教育出版の取り上げ方が、もっとも生徒たちに考えさせ、関連学習などでもできるように工夫されているのではないかと感じました。

なお、順位には挙げませんでした。東京書籍が巻末につけている「心情円」という、自分の心の中の思いや葛藤の割合を視覚化し、円グラフ化させる試みは、大変良いと思いました。言葉にすることが苦手な生徒もいるかと思いますが、そういった生徒たちにとっても、自分を見つめなおすだけでなく、他の人に自分の思いを形にして説明することができ、良い試みだと思います。これについては、個人的に活用が広がれば良いと思いました。

以上、使いやすさや内容について比較し、総合的に考えました結果、私は第1位を日本文教出版、第2位をGakken、第3位をあかつき教育図書とさせていただきます。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

垣内委員、お願いします。

○垣内委員 道徳についてです。

学習指導要領では、教育そのものが人格の完成、及び国民の育成を目的として行われるということになっており、中でも道徳は特別の教科として、その道徳性を養うということが使命とされています。これは、人としての生き方や社会の在り方について、ときに対立がある場合も含めて、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら考え、感じ、そして他者と対話し、協働しながらよりよい方向を目指す資質・能力を備えることというふうに記載されているわけです。

この点とあわせて、道徳が特別の教科として導入された経緯も考慮いたしまして、各者のテキストを比較・検討いたしました。

いずれの教科書におきましても、命の大切さ、いじめの防止、現代的な課題、そして情報モラル、さらには先人の生き方などを扱った多様な教材が豊かに盛り込まれていて、いろいろな角度から考えさせる、そういったような構成になっているというふうに思いました。また、目次には各ユニット、あるいは幾つかの視点といったようなもの、さらにはマークが明示されていて、学ぶ上での目的が明確化されているという点も各者に共通する点です。

さらに、家庭との連携ということも配慮されていて、非常によくできているかなというふうに思いました。

これらを考慮した上で、私としては、第1位は日本文教出版、第2位、あかつき教育図書とさせていただきます。

日本文教出版では、特に最初の見開きのページ、1年生の見開きのページにメッセージが書かれていて、なぜ道徳を学ぶのかということについて共通理解があった上で目次に進むわけですが、いじめと向き合うとか、よりよい社会を考えるとといったようなカテゴリに

分かれて示され、様々なマークもあってわかりやすく、スムーズに学びに入っていけるように感じました。また、「いじめとは何」ということで、非常にはっきりと、明確にその定義を示しています。すなわち、行為を受けたほうが、心や体に苦しみ・痛みがあれば、それはいじめであるというふうに、明確に定義付けている点、これは各種ハラスメントに通ずる、基本的な記述であろうと思います。こういったことも明確にしているということも、高く評価いたしました。さらに、他の委員もおっしゃいましたが、「道徳ノート」。これには賛否両論あるかもしれませんが、あらかじめ設定された発問ではなくて、各自が自由に書いていく、また柔軟に活用できるように構成されているということは、この特別の教科に非常にふさわしいのではないかというふうに考え、第1位は日本文教出版。

第2位はあかつき教育図書ですが、こちらにつきましても、よりよい社会の構築につながる具体的な記述も多く見られましたし、生徒の読みに差異が生じないように、未習の漢字に、「初出」だけじゃなくて、振り仮名がつけられているという細やかな配慮もあるというところも評価いたしました。

○佐藤教育長 ありがとうございます。

私から道徳について申し上げます。

中学校学習指導要領には、道徳科の目標として、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを広める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てると示されております。

私としましては、道徳性を養うためには、生命の尊さ、友情・信頼など、道徳的価値に関する生徒自身の理解に基づいて自分自身を見つめることが大切であると認識しております。

また、道徳が特別の教科となった経緯等を踏まえると、命の大切さやいじめの防止など、喫緊の課題への対応が重要であると考えます。

7者いずれの教科書も、命の大切さ、いじめの防止、現代的な課題などについて様々な工夫が見られました。特に命の大切さに関しては、全ての学年・学期で継続的に取り組むことが大切だと考えます。

さらに、情報モラル等の現代的な課題についても、発達段階に応じて系統的に学ぶことが重要であると考えます。特に日本文教出版は、内容項目、生命の尊さを取り扱う教材が全学年で9本、各学年3本、掲載されております。

また、いじめ防止をテーマとしたユニット、「いじめと向き合う」が、第1学年に3か所、第2、第3学年に2か所ずつ、複数設定されており、いじめの認知が増える学年や長期休業明けなど、設定時期についても配慮されております。

さらに、情報モラルに関しては、全学年で情報モラルを扱った教材やコラムが掲載されており、情報社会のルールや情報セキュリティについて、総合的に学習できるようになっております。

また、他の委員も触れておりましたが、付属している「道徳ノート」につきましても、あらかじめ固定された発問の記載がないため、教員の授業における自由度が高く、生徒の実態に応じて柔軟に活用できるような構成となっております。

またあかつき教育図書につきましても、前者と同様に、命の大切さに関して、内容項目、生命の尊さを取り扱う教材が全学年で9本、各学年3本配置されております。

また、いじめの防止に関しましては、全学年でユニット「いじめを考える」が、各学年に1か所ずつ設定されております。

さらに、ユニット「情報モラル」が各学年で1か所ずつ設定されており、多様な視点から考えさせる教材等やコラム、シンキングを関連させて学習できるようになっております。以上のことから、私は、1位、日本文教出版、2位、あかつき教育図書を推薦させていただきます。私からは以上です。

ただいま各委員から、推薦する発行者について、ご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局より報告させます。

○事務局 それでは、ただいまの集計結果について、申し上げます。1位に日本文教出版を推薦された方が4名、東京書籍を推薦された方が1名。2位にあかつき教育図書を推薦された方が2名、東京書籍を推薦された方が1名、日本文教出版を推薦された方が1名、Gakkenを推薦された方が1名。第3位にあかつき教育図書を推薦された方が1名。

以上でございます。

○佐藤教育長 ただいまの集計結果のとおり、1位に日本文教出版を挙げた方の数が4名と最も多く、過半数を超えております。

このことにより、道徳については日本文教出版に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて附帯意見等はございますでしょうか。

(なし)

○佐藤教育長 それでは、道徳については日本文教出版に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(異議なし)

○佐藤教育長 ご異議ございませんので、道徳については日本文教出版に仮決定いたしました。

以上で、中学校教科用図書については、全ての教科について仮決定いたしました。

それでは、中学校教科用図書の仮決定した全ての発行者について、事務局から報告させます。

○事務局 中学校教科用図書について、仮決定した図書の発行者名について、ご報告いたします。

種目、国語、発行者名、光村図書

種目、書写、発行者名、光村図書

種目、社会、(地理的分野)、発行者名、帝国書院

種目、社会（歴史的分野）、発行者名、東京書籍

種目、社会（公民的分野）、発行者名、東京書籍

種目、地図、発行者名、帝国書院

種目、数学、発行者名、東京書籍

種目、理科、発行者名、東京書籍

種目、音楽（一般）、発行者名、教育芸術社

種目、音楽（器楽合奏）、発行者名、教育芸術社

種目、美術、発行者名、開隆堂

種目、保健体育、発行者名、東京書籍

種目、技術・家庭（技術分野）、発行者名、東京書籍

種目、技術・家庭（家庭分野）、発行者名、東京書籍

種目、英語、発行者名、三省堂

種目、道徳、発行者名、日本文教出版

報告は以上でございます。

○佐藤教育長 中学校教科用図書については、以上です。

次に、特別支援学級教科用図書についてご審議願います。

指導課長、説明をお願いします。

○指導課長 令和7年度使用台東区立小中学校特別支援学級教科用図書の採択について、ご説明申し上げます。

恐れ入りますが、ただいま配付させていただいています資料をご覧ください。

（資料配付）

○指導課長 内容につきましては、これまでもご説明し、重複することがあるかもしれませんが、ご了承いただければと思います。

項番1、採択の趣旨についてでございます。文部科学省通知、令和7年度使用教科書の採択事務処理についてによれば、特別支援学級においては、学校教育法付則第9条第1項の規定により、教科書目録に登載されている教科書以外の教科用図書、いわゆる一般図書を採択することができることと示されていることから、令和7年度に台東区立小中学校特別支援学級において使用する教科用図書について調査研究を行い、公正、かつ適正に採択を行うものでございます。

項番2、本区における特別支援学級設置校についてでございます。小学校は、東泉小学校、蔵前小学校、松葉小学校、金竜小学校の4校。中学校は、浅草中学校、柏葉中学校の2校。計6校に特別支援学級を設置しております。教科用図書の選定に当たっては、各校にて、特別支援学級資料作成委員会を組織し、各特別支援学級の教育目標に基づくとともに、どの教科書が児童・生徒一人一人に適しているかを考えて、調査・研究を行い、様式3として調査結果をご報告いただきました。

項番3、調査研究結果についてでございます。令和7年度使用教科用図書につきましては、

6校全てにおいて、通常の学級と同様の検定教科書を使用いたします。

よろしくご審議の上、ご採択いただきますようお願いいたします。

説明は以上です。

○佐藤教育長 特別支援学級の教科用図書について、ご質問、ご意見がありましたら、どうぞ。

よろしいですか。

(なし)

○佐藤教育長 それでは、特別支援学級の教科用図書について、説明のとおり仮決定することについてご異議ございませんか。

(異議なし)

○佐藤教育長 ご異議ございませんでしたので、以上のとおり仮決定いたしました。

ただいま審議、及び仮決定した内容を基に、事務局に議案を用意させます。議案の準備が整い次第、東京都台東区教育委員会会議規則第10条第1項の規定に基づき、日程を変更し、議案審議に入らせていただきます。

この進め方でよろしいでしょうか。

(異議なし)

○佐藤教育長 それでは、議案の準備が整うまでの間、20分程度休憩といたします。

(休憩：17：45～18：05)

○佐藤教育長 休憩前に引き続き、会議を再開いたします。

〈追加日程第1 議案審議〉

第23号議案

第24号議案

○佐藤教育長 追加日程第1、議案審議に入ります。

第23号議案、及び第24号議案を一括して議題といたします。

議案の提案理由及び内容について、指導課長、説明をお願いします。

○指導課長 第23号議案、令和7年度使用、台東区立中学校教科用図書採択について、ご説明申し上げます。本議案は地方教育行政の組織、及び運営に関する法律に基づき、提出するものでございます。恐れ入りますが、裏面をご覧ください。

表にございます発行者、及び教科用図書に先ほど仮決定されました。

続きまして、第24号議案、令和7年度使用、台東区立特別支援学級教科用図書採択について、ご説明申し上げます。

本議案は、地方教育行政の組織、及び運営に関する法律に基づき、提出するものでございます。恐れ入りますが、裏表をご覧ください。

小学校につきましては、通所の学級と同様の検定教科書に仮決定されました。中学校につきましても、中学校教科用図書と同じ検定教科書に仮決定されました。

よろしくご審議の上、ご採択いただきますようお願いいたします。

○佐藤教育長 本件について、審議をお願いします。

よろしいでしょうか。

(なし)

○佐藤教育長 これより裁決いたします。第23号議案及び第24号議案については、いずれも原案どおり決定いたしたいと思っております。これにご異議ございませんか。

(異議なし)

○佐藤教育長 ご異議ございませんので、原案どおり決定いたしました。

3 その他

○佐藤教育長 本日の案件は以上でございますが、その他、何かございますでしょうか。

よろしいでしょうか。

(なし)

○佐藤教育長 以上をもって、本日予定されました議事日程は全て終了いたしました。これもちまして、本日の定例会を閉じ、散会いたします。

午後6時10分 閉会